平成27年度

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト

成果報告書

新潟県教育庁高等学校教育課

はじめに

新潟県教育委員会では、「個を伸ばす教育」を進めるために、生徒一人一人が持つ多様な能力、個性、興味・関心に応じた教育環境づくりやオンリーワンの夢がかなえられるような特色ある学校づくりなどに取り組んできました。

これまで、「オンリーワン」を付した事業では、教育課程の研究や他校との連携などを取組の柱として、学校の特色化を推進する活動を支援してきました。本事業では、これまでの成果等を踏まえ、本県の課題である人口の社会減への対応や、ひとづくりの推進など、明日の新潟の飛躍につながるよう「地域と連携した特色ある学校づくり」をテーマに、新たな学校づくりに取り組んでいただいております。

地域の教育力を活用したキャリア教育の推進や地域と連携したイベントの開催、地域の産業を支える人材の育成など、地域密着型の活動をとおして、「地域産業の担い手確保」、「地域に貢献する人材の育成」及び「生徒の地元定着」につなげる取組が推進されているものと考えています。

また、この度公表した「県立高校の将来構想」においては、目指す高校の姿の一つに、地域との連携をより深化させ、他にはない特色ある教育を実践する「地域と連携した特色ある高校」を想定しています。これらの高校では、市町村や地元企業などと連携した特色ある教育活動やコミュニティへの参画などにより、魅力と活力ある学校づくりが推進されるものと考えています。

本書は、指定された18校の今年度の取組内容及びその成果等をまとめたものです。この事業が、「県立高校の将来構想」の目指す高校のモデルとなることを期待するとともに、本書を有効に活用し、各県立高等学校、県立中高一貫教育校において、魅力と活力ある学校づくりが一層推進されることを期待します。

平成28年３月

新潟県教育庁高等学校教育課長　飯田　昭男

目　次

1	新発田南高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	1
2	新発田農業高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	6
3	新発田商業高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	11
4	長岡農業高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	15
5	長岡工業高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	20
6	長岡商業高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	27
7	栃尾高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	32
8	新潟県央工業高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	39
9	三条商業高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	46
10	加茂農林高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	52
11	吉田高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	58
12	小千谷西高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	64
13	塩沢商工高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	70
14	十日町総合高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	76
15	柏崎工業高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	80
16	高田農業高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	87
17	上越総合技術高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	94
18	海洋高等学校	・・・・・・・・・・・・・・・	100

芝南高第　357 号
平成28年３月４日

高等学校教育課長　様

学番　25　県立新発田南高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

新発田南高校（新発田農業高校、新発田商業高校）
【テーマ】　芝ＴＡＣ ～地域活性化プロジェクト～
【目標】 ①　各校と連携しながら、商品開発やインターネット販売等の活動により地域の課題解決を図り、地域の活性化につなげるとともに、地域産業を支える人材の育成を図る。 ②　地域との連携による収穫祭等の地域イベントの企画・運営などの取組等により、生徒に自主性と責任感を持たせ、起業意識をもった人材の育成を図る。 【取組の概要】 ①　３校連携による商品開発やインターネット販売等の活動を実施 ・３校連携による事業本部（組織づくり）の企画や運営、システムを学習する。 ・地域の課題解決に向けた新商品開発や新サービスの提供などの実践に取組む。 ・芝ＴＡＣのホームページを立ち上げる。 ②　収穫祭等の地域イベントの企画・運営 ・イベントの立案や企画、運営に参加することにより、起業意識をもつ人材育成につなげる。 ・地域と連携したイベントを開催する。 ③　６次産業化に対応した実践的な知識と技術の習得 ・地域産業の現状及び課題を把握するために、産官等と連携をする。 ・「課題研究」の充実を図り、地域産業の課題解決を図る調査研究を実施する。 ・「課題研究」で習得した知識・能力を上級学校で、さらに向上させ、地域のリーダーとして地域産業の活性化を図る人材育成につなげる。 【取組の成果】 新発田市内の専門高校（新発田農業高校、新発田南高校工業科、新発田商業高校）が１年を通して活動計画やイベントを企画・運営してきた。その結果各校の特長を学び、自然と打ち解けて活動が出来るようになり次年度以降の模擬株式会社の立ち上げの基礎を築くことができた。

【平成27年度の取組】

１　芝ＴＡＣ組織形成

(1) 第１回芝ＴＡＣ担当者及び生徒打合せ会議

期日　平成27年７月27日(月)

場所　県立新発田南高等学校　電子制御実習室

議題　リーダー選出。芝ＴＡＣの活動の概要について。
南高祭、芝商祭、稲穂祭での連携取組活動について

(2) 第２回芝ＴＡＣ担当者及び生徒打合せ会議

期日　平成27年９月11日(金)

場所　県立新発田南高等学校　電子制御実習室

議題　南高祭、芝商祭でのパネル展示。稲穂祭での販売活動、アンケート実施。
会社組織作りの検討。

(3) 第３回芝ＴＡＣ担当者及び生徒打合せ会議

期日　平成27年10月16日(金)

場所　県立新発田南高等学校　電子制御実習室

議題　稲穂祭での販売活動。長岡ＣＡＴの視察について。
模擬株式会社についての検討。

(4) 第４回芝ＴＡＣ担当者及び生徒打合せ会議

期日　平成27年11月９日(月)

場所　県立新発田南高等学校　電子制御実習室

議題　長岡ＣＡＴクリスマスイベント視察について。
芝ＴＡＣでの商品開発、販売活動について。

(5) 第５回芝ＴＡＣ担当者及び生徒打合せ会議

期日　平成28年１月14日(木)

場所　県立新発田南高等学校　電子制御実習室

議題　長岡ＣＡＴ模擬株主総会視察について。次年度の活動について。

２　３校連携活動並びに地域イベント活動実施の取組

(1) 南　高　祭　平成27年９月19日(土)

(2) 芝　商　祭　平成27年10月24日(土)

(3) 稲　穂　祭　平成27年10月31日(土)

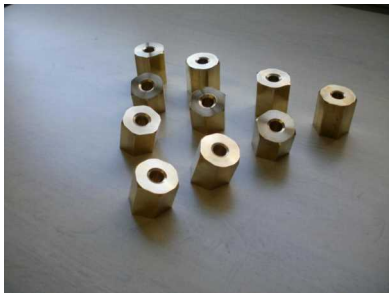
(4) 職業能力短期大学校文化祭
平成27年10月24日(土)～25日(日)
新発田南高校工業科作品展示

(5) イオン展示　平成28年１月29日(金)～１月31日(日)

３　試作商品開発の取組

① オリジナルストラップ

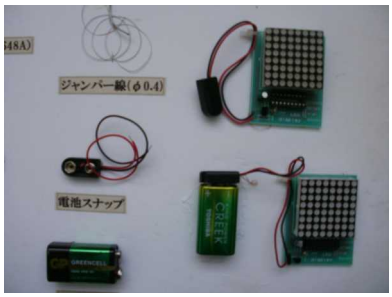
② ペン立て



③ 海抜表示板

④ プランター

⑤ ＬＥＤ表示板



４　長岡ＣＡＴ視察

(1) クリスマスイベント
期日　平成27年12月19日(土)
場所　長岡市リバーサイド千秋

【長岡ＣＡＴのメンバーに取材してきたことや感想等】

・商品の種類が多い。　・マスコットキャラクターがいる。
・長岡ＣＡＴのシールがある。
・各自が笑顔で声を良く出していて良く聞こえる。そろえてかけ声を出している。
・中央に休憩場所がある。　・買い物がしやすい。　・活動する場所が広い。

・人数が多い。（全体30人以上）１校あたりの人数が多い。
・囲むように店が配置されていて人目につきやすい。人が入りやすい。
・商店の詳細の写真があり分かりやすい。　・値段の安いものは売れやすい。
・ポスターは地域交流コミュニティーボードがある。
・販売と会計は別の方が混乱が避けられて良い。
・準備期間が長い。準備期間を早めにとれば余裕ができる。　・委員会で活動がなされている。
・工業は商品などではなく、子ども向けのサービスや縁日のようなことをしていた。
・高齢者の方への対応やコミュニケーションをとることは難しい。
・長岡工業では４月頃から生徒にアンケートを取り、長岡ＣＡＴに参加したい人を集めた。
・販売にかかわるサービス面は自分たちで企画している。
・「申しわけございません」としっかり言っていた。

(2) 模擬株式会社長岡ＣＡＴ株主総会視察
日時　平成28年２月９日(火)
16:30～17:30

【取組の成果】

○　生徒の感想

初めて新発田商業と新発田農業の生徒と一緒に話し合いをしたときには、どうして良いか分からず何も発言することができませんでした。リーダーを選出する時も自分たちにならないようにとばかり考えていましたが、何度か話し合いを繰り返す中で、最後には言いたい意見をすることができるようになりました。ラインの交換などもしましたが、もっと早くからコミュニケーションがスムーズにできていれば、もっといろいろな活動ができたように感じます。３年生なので、来年は一緒に活動することはできませんが、後輩の南高校の生徒は早くから一緒に活動できることを望んでいます。

近くにいても一緒に活動することはほとんどない農業高校生と商業高校生と連携して活動するといわれ少し緊張しましたが、思ったより早く馴染むことができました。いろいろ議論をしていく中で相手の学校の様子や自分の学校との違いを知ることができて良かったです。稲穂祭ではみんなで販売活動をしたり、アンケートの協力をしたりして学校が違っても全然一緒にできるし、楽しむことができました。工業は何かを作ったりするのが特長ですが、課題研究や放課後の時間で取り組んでも時間が足りないので期待に応えられなかったのが残念です。来年は「野菜工場」実験プラントを一緒にやっていこうということなので、早くから目標ができたと思います。

芝ＴＡＣの一員として、人前で大きな声をだしたり、大人や子どもに販売の勧誘をする経験をしましたが、正直自分にこんなことができると思っていませんでした。ハッピをきて見知らぬ人に声をかけるようなことは学校の中では想像もつかなかったです。イオンの展示場では、お年寄りや外国人、家族づれなど様々な人たちに自然と声をかけられるようになっていました。南高校の卒業生という大人の人が、終わり頃に「みんなが頑張っているので、とても嬉しかった。」といって飲み物を差し入れしてくれたときは、驚きと喜びを強く感じました。

１年間の活動でしたが、あっという間に終わり、考えていたことがあまりできなかったことが残念です。新発田商業や新発田農業のメンバーと一緒に話し合っていると１時間が過ぎるのが早くて、中々話が進まない感じがしました。イベントの企画や来年の活動、目標などいろいろ意見が出るのでまとめることが大変でした。始めはぎこちない雰囲気でしたが、だんだん慣れると同じ高校生だということが分かり気にならないようになりました。もっと一緒に何かできれば良かったと思います。最後に長岡ＣＡＴの株主総会を視察しましたが、工業の自分には少し内容が難しくて分からないことが沢山ありました。来年から芝ＴＡＣの工場で作った野菜が商品として売り出すことができたら凄いことだと思います。自分は３年生で協力できないのは残念ですが、夢のあることだと思うので後輩には是非頑張ってもらいたいです。

【期待する成果】

○　１年間ともに取り組むことで３校の連携は強化され一体感のある活動となる。

○　次年度は高校間だけでなく、職業能力短期大学校や新発田市とも連携を深めることで、より効果的なイベントの開催や広報活動を実施し、「芝ＴＡＣ」の名称を地域内だけでなく、県内全般に広めることが可能になる。

○　「野菜工場」において農作物が生産できれば全国的な知名度となる可能性もある。

【総合所見】

○　新潟未来プロジェクトの取組１年目として、各校の特長を生かしながら次年度にどの様な活動が実践できるか。どうすれば会社組織を立ち上げることが出来るかなどを繰り返し話し合ってきた。その結果として、各校の文化祭や地域イベントを通じて連携活動をすることで「芝ＴＡＣ」を広報することができた。

○　次年度は「芝ＴＡＣ」で職業能力開発短期大学校や新発田市と連携し、「野菜工場」の模擬プラントの製造ラインづくりに携わることで、農産物を地域ブランドとして「芝ＴＡＣ株式会社」による商品として販売できる体制づくりの基礎を築いていく。

○　本校の生徒は工業各学科３年生から４人が担当した。次年度は今後の２年間を見据えて、２学年による担当者とすることで３年目の取組への準備が早期にできる体制を整えていく。

芝 農　第２４９号
平成28年２月26日

高等学校教育課長　様

学番　26　新発田農業高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

新発田農業高校（新発田南高校、新発田商業高校）
【テーマ】　　芝ＴＡＣ **～地域活性化プロジェクト～**
【目標】 ①　「課題研究」等で各校と連携しながら、商品開発やインターネット販売等の活動により地域の課題解決を図り、地域の活性化につなげるとともに、地域産業を支える人材の育成を図る。 ②　地域との連携による収穫祭等の地域イベントの企画・運営などの取組等により、生徒に自主性と責任感を持たせ、起業意識をもった人材の育成を図る。 **【取組の概要】** ①　３校連携による商品開発やインターネット販売等の活動を実施 ・３校連携による事業本部（組織づくり）の企画や運営、システムを学習する。 ②　収穫祭等の地域イベントの企画・運営 ・イベントの立案や企画、運営に参加することにより、起業意識をもつ人材育成につなげる。 ・「芝農カフェ」の運営 ・「しばた雑煮合戦」への参加 ③　６次産業化に対応した実践的な知識と技術の習得 ・「課題研究」の充実を図り、地域産業の課題解決を図る調査研究を実施する。 ・「課題研究」で習得した知識・能力を上級学校で、さらに向上させ、地域のリーダーとして地域産業の活性化を図る人材育成につなげる。 **【取組の成果】** ①　３校連携による事業本部（組織づくり）の研修を実施することができたので、来年度にこの成果を示していきたい。 ②　「芝農カフェ」は継続して開催することができており、今年度は「しばた雑煮合戦」に初参加することができ、生徒の地域貢献の意識向上につながった。 ③　先進的な技術を持つ企業家や農業関係者の講演を聴く機会を来年度からの「課題研究」の充実に生かしたい。

１　３校連携による活動の実施について

(1)　「芝ＴＡＣ」の取組について

①　連携会議の実施

・月に一度、新発田南高等学校で３校連携会議を行っている。

②　３校連携の事業の実施

・９月19日(土)新発田南高校文化祭にて各校紹介パネル展示

・10月24日(土)新発田商業高校文化祭にて各校紹介パネル展示

・10月31日(土)稲穂祭への出展

③　３校連携による事業本部(組織づくり)の企画や運営、システムを学習

・12月19日(土)長岡ＣＡＴの第１回視察(場所：リバーサイド千秋)

・２月９日(火)長岡ＣＡＴの第２回視察(場所：長岡工業高校)

④　成果

・各校の文化祭での活動により、「芝ＴＡＣ」が少しずつ認知されてきている。

⑤　課題

・長岡ＣＡＴの視察などを行い、来年度以降、３校で協力し合いどんなことができるのかを検討していく。

２　地域イベントの企画・運営等の取組について

(1)　「芝農カフェ」の開催

①　開催期日

第１回：７月29日(水)

第２回：11月７日(土)

②　成果

・本校で生産した農産物、畜産物を使用して献立を考案し、食材本来のおいしさを引き出せるか、また、お客様に提供する魅力ある献立となっているかなど、生徒は普段の授業では経験することのない実践的な授業を経験することができた。「芝農カフェ」は、生徒らにとって大変意義深い学習となっている。

・献立を決定するまでには、何度も試作を重ね、味・見た目・バランス・季節感など様々な課題解決が必要であった。

・１回目の「芝農カフェ」では、なかなかお客様に来ていただけず、営業時間を延長しての20食を完売した。

・２回目の「芝農カフェ」では、開店前にもかかわらず行列ができ、あっという間の完売となり、生徒全員が充実感を得ることができた。

・また、献立説明のために、食材の栄養やカロリーについての学習もできた。

・何よりも、本校で仲間が生産した大切な農産物、畜産物を、地域の方々に食べてもらった喜びと、「芝農の生産物はうまい！」ということを改めて知った機会でもあった。

・「芝農カフェ」の開催は、大変意義深く、少数の提供ではあるものの、地域の方々に還元できることはすばらしく、続けていくことの意義は充分あると感じる。

③　課題

・１回目の「芝農カフェ」では客が入らず、宣伝の必要性を感じた。２回目の「芝農カフェ」は、土曜開催であり、１週間前の稲穂祭において、「芝農カフェ」のチラシを配付したこともあり大盛況であった。「芝農カフェ」の開催を知らなかったという声もあり、宣伝の必要性を感じた。

・また、年２回の開催をもっと増やしてほしいとの要望が多かった。

【１回目のメニュー】

【２回目のメニュー】

(2) 地域活性化「村おこし事業」への参加

①　取組内容

４月24日(金)　赤谷花壇作成

５月22日(金)、６月５日(金)　赤谷花壇除草・管理

６月19日(金)　地域住民との懇談会

７月29日(水)　ソバ播種・交流会

８月10日(月)　発芽確認

９月４日(金)　ソバ除草作業・開花確認

９月12日(土)、10月16日(金)　ソバ除草作業

11月13日(金)　ソバ収穫

12月11日(金)　試食・交流イベント

②　成果

・ソバの栽培を行い地域住民と交流を深めることができ、また、ソバ栽培以外に花壇の作成と管理を行い、地域住民から評価を得ることができた。

・継続して取り組む事で、地域外の人が多く花を見に来てくれるようになり、活性化へのきっかけとなり、大学生や福祉施設の方にも播種や収穫に参加してもらうことで活動をさらに充実した活動となった。

・地域の方と交流するようになって４年目となるが、声を掛けていただく機会が増え、活動の認知度が高くなってきている。

・今年度は、２年生からも播種や花壇管理に参加してもらい早くから中山間地域の抱える問題点などを住民の方から聞く機会を持つことができた。

③　課題

・これまで関わってくださっていた役員の方が、今年度は交代したことや、高齢になったことで地域の方の参加が少なくない。

・また、活動が固定化している事への対策も今後必要になってくると考える。今後は６次産業化や観光への発展を視野に入れ、新しい協力先を探すことが必要である。

(3) しばた雑煮合戦への参加

①　期日　平成28年１月10日(日)

②　内容

本校の雑煮は、本校農産物を使用し「地もっと元氣雑煮」のネーミングをして、販売開始から行列ができ、２時間あまりで200杯を売り上げ、堀部安兵衛特別賞を受賞した。

(4) インターンシップの実施

①　期日

７月17日(金)　インターンシップ研修事業顔合わせ及び事前説明会

７月27日(月)～８月27日(木)　インタンシップ研修受け入れ期間および職員巡回

②　成果

・今年度は、47名と多くの生徒が農業インターンシップに参加した。

・アンケート結果より、またインターンシップに参加したいと回答した生徒が99%、農業をもっと深く学びたいという回答も81%であった。インターンシップを体験した生徒達は、今後の学科選択や、進路選択に役立つと感じているようである。

③　課題

・受け入れ先は、時期の変更や生徒の交通手段の意見もあり、今後検討が必要である。

３　６次産業化に対応した実践的な知識と技術の習得の取組について

(1) 特別栽培米の栽培における成果

○　本田での適切な栽培管理によって食味が向上した。(食味値が過去最高の数値)

○　精米袋のデザインを考え、販売促進に努めた。

○　米コンテストに応募し、入賞することができた。

・第９回　あなたが選ぶ日本一おいしい米コンテスト　高校生部門　最優秀賞(第１位)

・第６回　全国農業高校　お米甲子園　金賞(第２位)

(2) 農業最新技術指導及び講習会、講演会の実施

①　生産技術科

講師　新発田市農政課、(株)越後新鮮組

内容　新発田市の農業の現状と新規就業者の現状について(講話等)

②　環境科学科

講師　ハーブランドシーズン

(株)脇坂園芸

内容　ハーブ石鹸及びラベンダースティックの作成実習

エディブルフラワーについて(講話等)

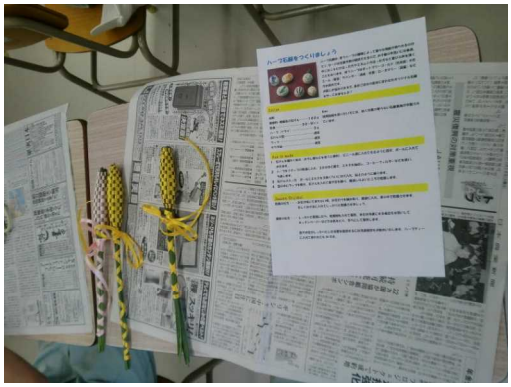
③　食品科学科

講師　シェフパティシエ専門学校

中野味噌糀店

内容　ケーキのデコレーションの演示、実習、講話等

味噌の糀の役割について(講話等)



３　総合所見

○　３校連携による事業本部(組織づくり)の研修として、長岡ＣＡＴの活動の視察を実施することができたので、来年度は「芝ＴＡＣ」に研修成果を生かしていきたい。来年度は、さらに３校の連携を深め、より充実した活動を展開したい。

○　来年度から新しい企画として、３校連携による植物プラントの作成を開始したい。

○　「芝農カフェ」や地域活性化事業への参加は、継続して実施することができており、さらに今年度は「しばた雑煮合戦」に初参加することができ、生徒の地域貢献の意識向上につながった。

○　来年度も継続して活動を続け、地域との連携をより深め、地域に情報発信をしていきたい。

○　先進的な技術を持つ企業家や農業関係者の講演を聴く機会を、来年度からの「課題研究」の充実に生かしたい。

芝 商　第２２１号
平成28年２月25日

高等学校教育課長　様

学番　27　新発田商業高等学校長

オンリーワン新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

新発田商業高校（新発田農業高校、新発田南高校）
【テーマ】　芝ＴＡＣ **～地域活性化プロジェクト～**
【目　標】 １　「課題研究」等で各校と連携をしながら、商品開発やインターネット販売等の活動により地域の課題解決を図り、地域の活性化につなげるとともに、地域産業を支える人材の育成を図る。 ２　地域との連携による収穫祭等の地域イベントの企画・運営などの取組等により、生徒の自主性と責任感を持たせ、起業意識をもった人材の育成を図る。 **【取組の概要】** １　３校連携による商品開発やインターネット販売等の活動を実施 (1) ３校連携による事業本部（組織づくり）の企画や運営、システムを学習する。 (2) 地域の課題解決に向けた新商品開発や新サービスの提供などの実践に取組む。 (3) 芝ＴＡＣのホームページを立ち上げる。 ２　収穫祭等の地域イベントの企画・運営 (1) イベントの立案や企画、運営に参加することにより、起業意識をもつ人材育成につなげる。 (2) 地域と連携したイベントを開催する。 ３　６次産業化に対応した実践的な知識と技術の習得 (1) 地域産業の現状及び課題を把握するために、先進的な取組を行っている産官等と連携をする。 (2) 「課題研究」の充実を図り、地域産業の課題解決を図る調査研究を実施する。 (3) 「課題研究」で習得した知識・能力を上級学校で、さらに向上させ、地域のリーダーとして地域産業の活性化を図る人材育成につなげる。 **【取組の成果】** ○　学校独自商品の企画、企業と連携した商品開発やイベントの出店をとおして販売実習を実施した。 ○　協力企業の選定から電話連絡、協力企業へのプレゼンテーション・試作品の評価、販売実習など校外活動を生徒主導で行うことにより、自主性や責任感が生まれ人間的な成長が見られた。

1　ニンジンとトマトを使ったアイスクリームの取組について

(1) アンケート調査の実施

新発田市内のイベントにて「嫌いな野菜」についてアンケート調査を実施

ニンジン　26.7%　　ピーマン　21.0%

ト マ ト　15.6%　　ネ　　ギ　8.2%

(2) ＪＡ北越後との連携

○　新発田市内で収穫される野菜や時期について話を聞き、その中でサイズや形が悪いため市場に流通しない規格外の野菜があることに着目した。

○　地元で収穫した市場に出回らない規格外の野菜を使い、無着色・無香料・無保存料のアイスクリームを作ることにした。

(3) なかの牧場との連携

○　月岡温泉の「なかの牧場」が製造・協力してくださることになった。

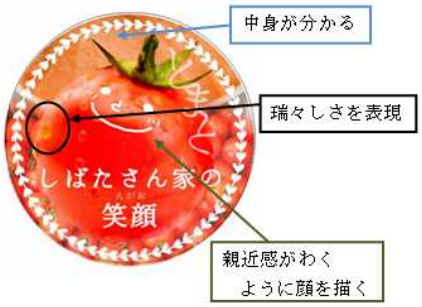
○　収穫時期や栄養素、アンケート結果から「ニンジン」と「トマト」を使ったアイスクリームを作ることにした。

(4) 新発田市内イベントでの販売

○　約２か月にわたる試作や話し合いの結果、6月27日に1回目の販売、7月11日に2回目の販売、7月25日に3回目の販売を実施した。

○　パッケージについても、野菜の美味しさが伝わるように「シズル感」を取り入れ、親近感がわくように野菜に顔を描き、中身が分かるようにした。

○　購入者からは「甘すぎずにおいしい」、「これなら食べることができる」などの感想をいただいた。



(5) 菅谷小学校の学校給食導入

○　ニンジンを使ったアイスクリームが7月17日に新発田市立菅谷小学校の学校給食に導入された。

○　当日は多くのマスコミ関係者も取材に訪れた。

(6) 新発田商業高校文化祭での芝ＴＡＣの取り組み紹介

○　新発田商業高校の文化祭(10月24日)にて、芝ＴＡＣの取り組み活動をパネルにて展示するとともに、トマトとニンジンを使ったアイスクリームを販売した。

(7) 新発田農業高校文化祭での合同販売

○　新発田農業高校の文化祭(10月31日)にて、３校での合同販売を実施した。

２　新発田特産品である「大峰かおり」と「菅谷リンゴ」を使った取組について

(1) ＪＡ北越後と高橋農園との連携

○　新発田の特産品を調べる中で、知名度があまり高くない「大峰かおり」と加工食品が少ない「菅谷リンゴ」を使った商品を企画・開発する。ともに収穫量が多くないため商品化、今後の販売数量の確保が可能か打ち合わせを行う。

(2) パトランとパザパとの連携

○　「大峰かおり」はスイーツに、「菅谷リンゴ」はパンとすることに決定し、スイーツは「パトラン」、パンは「パザパ」に製造を依頼することにした。

○　スイーツはシュークリームとし、クリームの種類や豆の挽き方などの数種類の試作品を作っていただく。

○　しかし、果物などを使ったシュークリームなどが多くあるため、まだ新潟県内ではほとんど販売されていない「シュケット」とする。

○　パンについても、数回の試作品や改良、打ち合わせを繰り返した。その結果、全体をリンゴの形とし、リンゴの食感と風味を生かすものとした。

(3) 新発田商業高校文化祭での芝ＴＡＣの取り組み紹介

○　新発田商業高校の文化祭(10月24日)にて、芝ＴＡＣの取り組み活動をパネルにて展示、同時に「大峰かおり」を使ったシュケットと「菅谷リンゴ」を使ったパンを販売した。

(4) 新発田農業高校文化祭での合同販売

○　新発田農業高校の文化祭(10月31日)にて、３校での合同販売を実施した。

(5) 新発田市内イベントでの販売Ⅰ

○　全国うまいもん横丁(11月１日、3日)にて販売を実施した。

○　新発田市内外からのお客様に「大峰かおり」と「菅谷リンゴ」のＰＲを行うことができた。

(6) 新発田市内イベントでの販売Ⅱ

○　全国雑煮合戦(１月10日)にて、「大峰かおり」を使ったシュケットを販売した。

３　生徒の感想

○　今年度第１回芝ＴＡＣの会議の開催も遅く、３校合同での販売が新発田農業高校の文化祭１回となった。来年度は合同販売の機会をもっと多くしたい。

○　地域の店舗、商店街、行政と連携ができたことは良かった。大きなイベントに出店できたことは地域のＰＲにもつながったと思う。

○　長岡ＣＡＴのクリスマスイベントを見学したが、３校連携で素晴らしかった。このように校外での販売活動を増やし、もっと芝ＴＡＣをＰＲしていければ良いと思う。

○　お客様から「おいしかったから、また買いに来たよ」、「高校生がこういうことをすると、街が、そしてイベントに活気が出るからまた出店してね」と言っていただいて嬉しかった。

○　普段は何気なく商品を購入しているが、１つの商品が出来るまでの苦労と商品を売るためのパッケージや陳列、接客と教室で学んだことを実践できて良かった。

４　総合所見

○　今年度は最初の３校合同会議の開催が遅くなり、方向性もよく見えないままのスタートとなった。そのため３校連携での商品開発を行うことが出来ず、各校での取り組みとなってしまった。また、３校合同販売も１回しか実施できなかった。

○　来年度は、選出生徒も３年生だけでなく、再来年度を見据えて１、２年生を選出していきたい。教員・生徒ともに、この事業が３校連携であることを共通認識し、計画どおりに実施していきたい。

長 農　第 253 号
平成28年３月３日

高等学校教育課長　様

学番　37　長岡農業高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

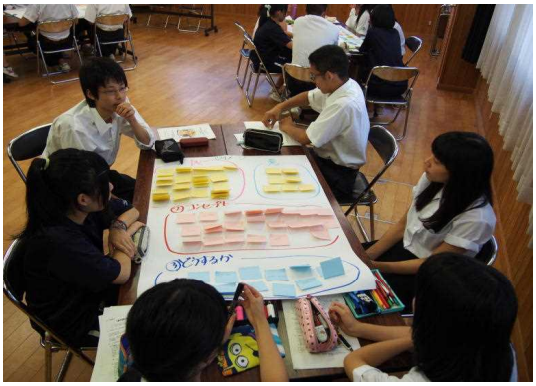
長岡農業高校（長岡工業高校、長岡商業高校）
【テーマ】地元理解と地域活性化を通じた海外をも視野に入れた経済的視点の育成 **～「緩やかな連携」から「強い絆」へ、長岡ＣＡＴ第３のステージ！～**
【目標】 1　長岡市、ながおか未来創造ネットワーク及び地元商工会議所等からの協力を得た常設店舗運営を視野に入れた商品の選定、また、オリジナル商品の開発とそれをふまえた販路獲得と販売戦略の構築。 2　上記商品の県内外での交流拠点（アオーレ長岡、長岡駅、新潟空港、新潟県アンテナショップ「ネスパス」等）での販売及び常設店舗経営に関する調査・研究。 3「長岡ＣＡＴ」合同合宿の実施による取締役会、商品管理部、営業部、経理部及び広報部の部署ごとの意識形成、共通理解の促進と組織運営の基本の習得。 4　地域行事やイベントへの積極的参加による地域社会に貢献する意識の向上と及び高校生活満足度の向上。 5　高校生が運営する県外の先進的取組の見学等をとおした研修と進路実現への連結。 **【取組の概要】** 1　長岡市、ながおか未来創造ネットワーク及び地元商工会議所等との連携による店舗設計や販売戦略を基にした地域行事やイベントへの参加・出店。 2　長岡市、ながおか未来創造ネットワーク及び地元商工会議所等の指導、協力を得た常設店舗運営に関する調査研究、店舗設計。 3　セミナーハウス（長陵会館）を利用した「長岡ＣＡＴ」合同研修の実施。 4　高校生が運営する県外の先進的な組織の見学・体験研修の実施。 5　感想文、アンケートによる「事後ふりかえり」の実施。 **【取組の成果】** 1　地域行政や経済産業界の協力を得た地域理解度の向上と郷土愛の醸成。 2　商品開発、販売を通じた「長岡ＣＡＴ」の知名度の向上。 3　販路拡大に関する調査･研究や県外での先進的な取組の研修をとおした経営手法の理解。 4　学校の枠を超えた意識形成と共通理解の促進及び組織運営の基本の習得。

１　地域行政や産業界の協力を得た地域理解度の向上と郷土愛の醸成

(1) 長岡まつり民謡流しへの参加(平成27年８月１日(土))

○　長岡工業高等学校セミナーハウス「長陵会館」にて長岡ＣＡＴ合同研修会と長岡まつり参加のための踊りの稽古を行った。（７月25日）

○　団結して取り組めるよう３校間の親睦を深め、グループ協議等をとおして会社運営の共通理解を深めた。また、長岡まつりの前夜祭「民謡流し」踊りを習得することができた。



３校でのグループワーク

講師による指導

○　地域理解と郷土愛の醸成、長岡ＣＡＴの知名度の向上ために長岡まつり民謡流しに参加し、３校生徒が揃いの黄色いポロシャツを着て「長岡甚句」と「大花火音頭」を踊った。

長岡まつり民謡流し

「長岡甚句」と「大花火音頭」

(2) おっここ摂田屋市への参加

○　摂田屋地区のイベントであるおっここ摂田屋市に参加し、商品を販売することで、地域住民に長岡農業高校の長岡ＣＡＴへの取り組みと実習製品のアピールを行った。

○　醸造の町摂田屋は、古くから醤油やお酒等の企業があり、その地での実習は、大変有意義であり地元の良さを再認識するきっかけとなる活動であった。

(3) 長岡市市民協働推進室とながおか未来創造ネットワークと連携した地域創生活動

○　次の主旨からご支援をいただいた。

・専門高校生による模擬株式会社「長岡ＣＡＴ」の事業創生支援を通じて、まちなかの魅力創造と地域活性化、次世代の育成を図る。

・若者の自由で柔軟な発想を最大限に発揮させることを基本とし、「ながおか未来創造ネットワーク」から適切な支援を行う。

２　商品開発、販売を通じた「長岡ＣＡＴ」の知名度の向上

(1)　ちやざわ生産組合との連携

○　米粉を提供していただき、こめっこロールやクッキーに使用するなど米粉の利用、普及に努めた。

(2)　チョコチップクッキー販売において認可された商標登録を生かしたシールを使用し、知名度向上に努めた。

３　販路拡大に関する調査･研究や県外での先進的な取組の研修をとおした経営手法の理解

(1)　長野県長野商業高等学校への視察（平成27年10月24日（土））

○　県外高校生が運営する先進的な店舗を見学し、長岡ＣＡＴの今後の活動に役立てるために、長野県長野商業高等学校（長野県長野市妻科243）「長商デパート」を視察した。

「長商デパート」大売り出し

販売の様子

４　学校の枠を超えた意識形成と共通理解の促進及び組織運営の基本の習得

(1)　長岡ＣＡＴクリスマスイベントへの参加（平成27年12月19日（土））

○　リバーサイド千秋において、「リバ千で商農工がコラボ長岡ＣＡＴのクリスマス～ニャンダフォー　2015～」のイベントタイトルのもと、長岡農業高校では、「こめっこロール」をはじめ、米粉チョコチップクッキー、味噌、イチゴジャム等を販売を行った。

○　また、体験ブースとしてアイビーを利用したテラリウムの作成ブースを設け、園児や小学生との交流を図った。

チョコチップクッキー

ＣＡＴ商標登録ラベルの貼付

ＣＡＴのクリスマス打合せ

販売の様子

ＣＡＴのクリスマス

体験ブース（テラリウムの作成）

(2) こどもフェニックスフェスティバルへの参加

○　幼稚園児・小学生に対して、本校生徒がテラリウムの作成を指導することで、交流を図るとともに農業クラブの目標でもある指導性と社会性を高めることができた。

○　今回のイベントからカフェブースを設けて、コンビニエンスストアーとの価格を比較検討しながら試行錯誤し、コーヒーと各種ジュース等の販売を行った。

カフェの運営

体験ブース（テラリウムの作成）

(3) ラグビーまつりへの参加（平成28年１月24日（日））

○　アオーレ長岡ナカドマにて、カフェブースを開き、常設店舗設置に向けたリサーチを行った。残念ながら天候に恵まれず、当日は吹雪の中での販売となり、予想を下回る結果であった。

○　ロゴ入り紙コップを使用し、コーヒーを提供を行った。オリジナル紙コップを使用することで、お客様に長岡ＣＡＴの発信のきっかけとなり、今後の使用についての足がかりとなった。

ＣＡＴロゴ入り紙コップ

ラグビーまつりでの販売

(4) 株主総会(平成28年２月９日(火))

○　長岡工業高校会議室にて、2015模擬株式会社長岡ＣＡＴの株主総会を行い、事業報告、損益計算書、貸借対照表、収支報告、監査報告、利益処分等が検討されました。

○　会社経営の本質である各種事業報告と会計報告がなされ、生徒にとって経営面を学習するよい機会となった。

○　新潟経営大学教授吉田一郎様、長岡市市民協働室上村建史様、各校のＰＴＡ役員の方々からの参加があり、講評をいただきました。

○　今後、長岡ＣＡＴは、３校での連携をさらに強化し、地域社会に根ざした活動を行っていきたい。

株主総会の様子

株主総会での説明

３　総合所見

(1) ３校合同研修会を実施したことにより、３校生徒の交流が深まり、連携強化につながった。また、３校が長岡まつりの民謡流しや地域のおっここ摂田屋まつりなどに参加したことで、地域理解と伝統文化について考える非常によい機会となり、今後もこの活動を継続していきたい。

(2) 長野県長野商業高校を視察した際、接客マナーや各ブースでの整理整頓、ゴミの処理など参考になることが多くあった。また、重い荷物を持っているお客様に声がけを行いその荷物運びを行ったりするなど、生徒がお客様目線で接していることがとても参考になった。

　次年度は、高校生が運営する三重県立相可高等学校高校生レストラン「まごの店」の視察を予定しており、生徒の意欲の向上と長岡ＣＡＴへの愛着を図っていきたい。

(3) 長岡市市民協働推進室と未来創造ネットワーク様のご支援により、常設店舗設置に向けた調査・研究が進み、次年度以降の活動の基礎固めができた。さらに今後、連携を密にし、生徒のアイディアをできるだけ取り入れた活動と起業家育成への視点にたった活動を展開していきたい。

(4) 米粉や長岡野菜等、地域の素材を生かし、長岡から県内外に発信できるような商品開発と地域産業に貢献できるオリジナル商品作りに努め、多くの生徒が主体的に関わり、全校生徒と保護者、地域の方々に応援してもらえる活動にしていく。また、起業家精神醸成し、農業学習の専門性のさらなる深化を図っていきたい。

長 工　第３１３号
平成28年３月２日

高等学校教育課長　様

学番　38　長岡工業高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

長岡工業高校（長岡農業高校、長岡商業高校）
【テーマ】地元理解と地域活性化を通じた海外をも視野に入れた経済的視点の育成 **～「緩やかな連携」から「強い絆」へ、長岡ＣＡＴ第３のステージ！～**
【目標】 1　地元商工会議所等からの協力を得た長岡地域独特の食材、商品の選定や商品コンペディションを通じたオリジナル商品の開発、及びそれをふまえた「今年のイチオシ」商品に特化した販売戦略の構築。 2　上記商品の県内外での交流拠点（長岡駅、新潟空港、新潟県アンテナショップ「ネスパス」等）での販売及び常設店舗経営に関する調査・研究。 3　「長岡ＣＡＴ」合同合宿の実施による取締役、製造本部、営業本部、及び広告宣伝本部等部署ごとの意識形成、共通理解の促進と組織運営の基本の習得。 4　高校生が運営する県外の先進的な組織の見学とそこでの体験等をとおした研修の深化と進路実現への連結、及び高校生活満足度の向上。 **【取組の概要】** 1　商品コンペディションを通じて採用された企画に基づくオリジナル商品の製造。 2　セミナーハウス（長陵会館）を利用した「長岡ＣＡＴ」合同研修の実施。 3　高校生が運営する県外の先進的な組織の見学・体験研修の実施。 4　感想文、アンケートによる「事後ふりかえり」の実施。 **【取組の成果】** 1　長岡市、ながおか未来創造ネットワーク（ＮＰＯ法人）の協力を得て、従来の物販のみならず「カフェ」を設営し、新しい店舗設計を考える足がかりを作りことができた。 2　セミナーハウス（長陵会館）を利用して「長岡ＣＡＴ」合同研修を実施し、学校間の交流ができ、これまで以上に「つながり」の意識形成を行った。また、長岡まつり「民謡流し」に参加し、知名度向上に向けた取組を行った。 3　長野県長野商業高校の生徒が運営する「長商デパート大売り出し」を実際に見学し、先進的な取組を体験的に研修することができた。 4　「長岡ＣＡＴ」の活動とおして地域の方々とふれあうことの喜びや、他者と協力して物事を遂行することの大切さを生徒に実感させることができた。

1　平成27年度の取組の詳細

○　４月14日(火)　第１回担当者(指導教員)会議
　　(1) 平成27年度の運営について　(2) 第１回取締役・監査役会について
　　27日(月)　第１回取締役会
　　(1) 「オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト」について
　　(2) 今後の予定について
　　①　第１回取締役・監査役会について
　　②　今年度のイベント参加について

第１回取締役･監査役会

○　５月27日(水)　第１回長岡地区専門高校活性化会議
　　(第１回取締役・監査役会)
　　(1) 各校平成27年度役員自己紹介
　　(2) 模擬株式会社代表取締役の選出について
　　(3) 平成27年度の主な活動予定について
　　(4) 「オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト」について

○　６月８日(月)　第２回担当者(指導教員)会議
　　16日(火)　第３回担当者(指導教員)会議
　　「オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト」詳細事業計画の作成について

○　７月10日(金)　第２回取締役会
　　(1) 今後の部体制について
　　取締役会・経理部・商品管理部・営業部・広報部の５部体制に決定
　　(2) 合同研修会の日程及び研修内容について
　　(3) 「県立専門高校メッセ」での取組について
　　25日(土)　合同合宿(場所：セミナーハウス長陵会館　8:30～17:00)
　　研修Ⅰ　長岡甚句・大花火音頭の踊りの習得
　　(昼食づくり＝協力体制の構築)
　　研修Ⅱ　仲間づくりのためのグループワークトレーニング
　　研修Ⅲ　部署別グループ協議「『長岡ＣＡＴ』の今年のコンセプトを考える」
　　(協議後、プレゼンテーション)

○　８月１日(土)　長岡まつり民謡流し　参加
　　11日(火)　「県立専門高校メッセ」でＰＲ・販売活動

長岡まつり民踊流し

県立専門高校メッセでＰＲ・販売活動

○　９月11日(金)　第１回運営会議(第２回取締役・監査役会)

(1)　「常設店舗」開設に向けた基本方針及び長岡市からの提案について

(2)　今後の活動予定について

①　おっここ摂田屋市(10月３日開催)での出店について

②　「長商デパート」(長野県長野商業高校)の見学研修について

17日(木)　第３回取締役会

(1)　長岡市の提案に係る常設店舗の試行について

(2)　常設店舗の企画・内容について

(3)　アオーレグッズ(ノベルティー)の商品開発について

○　10月３日(土)　おっここ摂田屋市　出店

24日(土)　県外研修(長野県長野商業高校「長商デパート　大売り出し」見学研修)

日程　7:20　長岡駅東口集合　出発

10:30　長野県長野商業高等学校到着

全体説明の後、見学研修

14:30　研修終了　帰路出発

17:45　長岡駅東口到着　解散

おっここ摂田屋市 出店

「長商デパート　大売り出し」見学研修

○　11月14日(土)
15日(日)　「長商全国食Ｋｉｎｇ」出店(長岡駅東口Ｅプラザ)

○　12月10日(木)　第２回運営会議(第３回取締役・監査役会)

(1)　長岡市からの支援の受入について

(2)　オリジナルイベント「長岡ＣＡＴのクリスマス」の具体的内容について

(3)　アオーレ長岡冬季２イベントへの出店について

※　長岡市からのオブザーバー出席者

市民協働推進室　柳鳥課長　上村課長補佐　桜井係長　勝沼主査

ながおか未来創造ネットワーク　川合中活リーダー

19日(土)　オリジナルイベント「長岡ＣＡＴのクリスマス」開催(リバーサイド千秋)

長商全国食Ｋｉｎｇ

第２回運営会議
(長岡市からオブザーバーが出席)

長岡ＣＡＴのクリスマス

27日(日)　「こどもフェニックス塾」(アオーレ長岡)での物販に加え、常設店舗の試行として「カフェ」を併設して出店

こどもフェニックス塾

ラグビーまつり2016inアオーレ

オリジナル紙コップ

平成28年

○　１月24日(日)　「パパもママもあそぼ～れ！ラグビーまつり2016inアオーレ」(アオーレ長岡)
常設店舗の試行として「カフェ」を併設して出店

株主総会

○　２月９日(火)　平成27年度株主総会　開催
(1) 報 告 事 項　事業報告及び各校活動報告
(2) 議 案 審 議　第１号～第４号議案
(3) 指導・講評
※　来賓　新 潟 経 営 大 学　吉田准教授
長岡市市民協働推進室　上村課長補佐
長 岡 商 業 高 等 学 校　笠井ＰＴＡ会長
長 岡 農 業 高 等 学 校　石原ＰＴＡ会長
長 岡 工 業 高 等 学 校　横山ＰＴＡ副会長

２　長岡市・(ＮＰＯ法人)ながおか未来創造ネットワークとの連携

○　８月26日(水)　長岡市市民協働推進室(ながおか未来創造ネットワーク)から要請・提案
(1)　「アオーレ長岡の新しい魅力づくり」への協力要請
①　カフェサービスの提供(カフェセット試作品の作製)
②　アオーレグッズ(ノベルティー)の商品開発
(2) 事業展開に必要な資源支援の提案

○　９月17日(木)　第３回取締役会
(1) 長岡市の提案に係る常設店舗の試行について
「長岡ＣＡＴ」の基本的なスタンスを確認した上で、受入を決定
(2) 常設店舗試行における企画・内容について
(3) アオーレグッズ(ノベルティー)の商品開発について
18日(金)　長岡市との協議(１回目)
(1) 長岡市のスタンスの説明
(2) 協力・支援体制の受入に関する基本的合意
(3)　３校の生徒が協働するための活動拠点(オフィス)提供の申し出
29日(火)　「長岡ＣＡＴ」運営のための校長･教頭・担当教員会議(１回目)

○　10月８日(木)　長岡市との協議(２回目)

(1)　「長岡ＣＡＴ」の基本的スタンス・基本方針・平成27年度活動計画、及び新潟未来プロジェクトにおける県配当予算の概要の確認

(2)　オフィスについて

(アオーレの「サテライト」としての利用についての再考要請)

(3)　常設店舗試行について(アオーレにおけるイベントでの出店)

(4)　カフェの試作品について

28日(水)　「長岡ＣＡＴ」運営のための校長･教頭・担当教員会議(２回目)

(1)　オフィスについて

①　提案を受け入れと具体的な借用方法・什器等についての協議の開始

②　以後のスケジュールを踏まえた借用期間・目的・用途等の明確化

(2)　常設店舗「試行」について

①　アオーレ長岡冬季２イベントを選定と常設店舗試行出店の実施

(カフェ機能を持たせ、試作品(ワンプレート方式)の販売を試みる)

②　出店するアオーレ長岡冬季イベントは下記の２イベントとする。

・平成27年12月27日(日)　こどもフェニックス塾

・平成28年１月24日(日)　ラグビーまつり2016inアオーレ

○　11月10日(火)　第１回長岡市と「長岡ＣＡＴ」協働に係る担当者会議

(1)　上記「長岡ＣＡＴ」運営のための校長･教頭・担当教員会議での内容を確認し、支援受入について正式合意

(2)　上記アオーレ長岡２イベントに出店決定

(3)　その他

①　森本千絵氏(「アオーレバード」デザイナー)との連携について

②　平成28年度の支援について

※　会議前にオフィス想定物件(樋熊ビル５階)の現地視察を行った。

○　12月10日(木)　第２回長岡市と「長岡ＣＡＴ」協働に係る担当者会議

(1)　「こどもフェニックス塾」出店に向けた計画について

(2)　オリジナル紙コップの作成について

(3)　その他

①　「ラグビーまつり2016inアオーレ」でのペッパー君の使用について

②　イベント開催に対する長岡市の期待について

３　取組に対する生徒の意見、感想等

(1)　年度当初の取組に対する気持ち

・地域の人々と話したりするので、人とかかわることについて学ぶことができると思った。
・農、工、商の高校が一緒になって活動するというのがすごいと思った。
・生徒会総務に入るときに、長岡ＣＡＴの活動に参加することは聞かされてていなかった。
・自分が望んで入った訳ではないのでそこまで、積極的ではなかった。

(2)　事前の活動に対する理解と当日の活動への積極性について

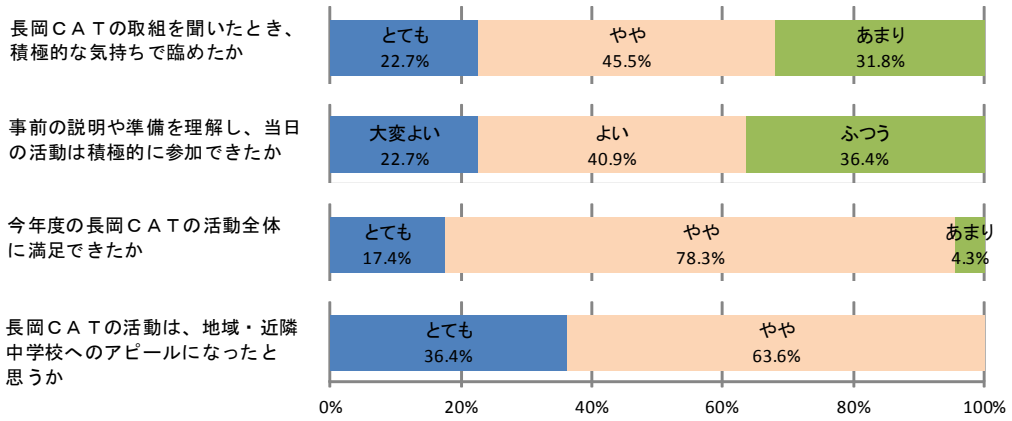
・カフェや販売など積極的にできた。
・準備でイベントに使うものを作成していたが、前日には準備に行けなかった。
・部活の大会などがありなかなか参加できなかった。
・積極的ではないが、やることはやった。
・みんなで協力して活動を行うことができた。

(3)　今年度の活動の満足度

・アオーレでのイベントなど他校の生徒と協力できた。
・自分が長岡ＣＡＴのアピールに協力できたことや、人と関わったりできたので、とても満足のできる活動だった。
・もっとイベントを増やしてもよかったと思う。
・自分への社会勉強になったと思う。
・ＣＡＴの皆の仲も深まったと思う。
・このような活動は人生で初めてやった。物を売る際に積極的にはなれなかった。実際に物を売る体験ができることは素晴らしいと思う。
・３校合同というのはなかなかできないことなので、良い活動だったと思う

(4)　活動の地域に対するＰＲ度や地域の認知度について

・多くのイベントに参加したことで、たくさんの人に知ってもらえたと思う。
・地域の人たちと関わりをもつことができた。
・各校の特色を活かした活動をアピールすることができたと思う。
・まだ知名度が低いと思った。
・知名度を上げることが大切だとは思わないが、活動を見た人は知る機会になったと思う。



４　総合所見

○　これまで以上に３校の生徒間に「つながり」の実感や自覚を促すため、合同研修会の実施や長岡まつり「民謡流し」への参加、更に県外研修等を企画し、一緒に行動する機会を増やす仕掛けづくりを行った。

○　また、長岡市の全面的な協力を得て、常設店舗の試行の第一歩として「カフェ」を設営、運営し、３校の生徒が相互に協力する場面を増やすことができた。

○　昨年度以前に比して格段に連帯感や協力体制は向上したと思われる。

○　平成28年度も常設店舗運営の基礎力として、連帯し協力する意識をより一層高めたい。

○　本校ではこれまで「長岡ＣＡＴ同好会」として、単年度の募集、解散を繰り返してきた。

○　継続する生徒もいるが人数が限られるため、校友会(生徒会)総務となった生徒をイベントごとに動員することで運営を行ってきた。

○　しかし、新潟未来プロジェクトの指定を受けたこと、長岡市の支援を受けこれまで以上の活動を展開する必要があることを踏まえ、連続性・継続性をもった生徒の活動が望まれる。

○　平成28年度からは「長岡ＣＡＴ同好会」を維持しながら、校友会(生徒会)の委員会の１つとして位置づけ、各クラス２名の委員を選出し、恒常的な生徒数の確保をする。これにより「長岡ＣＡＴ」の活動に更なる弾みをつけたい。

長 商　第２１０号
平成28年３月４日

高等学校教育課長　様

学番　39　長岡商業高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

長岡商業高校（長岡農業高校、長岡工業高校）

【テーマ】地元理解と地域活性化を通じた海外をも視野に入れた経済的視点の育成
～「緩やかな連携」から「強い絆」へ、長岡ＣＡＴ第３のステージ！～

【目　　標】

1　地元商工会議所やＪＡからの協力を得た長岡地域独特の食材、商品の選定や、商品コンペディションを通じたオリジナル商品の開発、及びそれをふまえた「今年のイチオシ」商品に特化した販売戦略の構築。

2　上記商品の県内外での交流拠点（長岡駅、新潟空港、新潟県アンテナショップ「ネスパス」等）での販売及び常設店舗経営に関する調査・研究。

3　「長岡ＣＡＴ」合同合宿の実施による取締役、製造本部、営業本部、及び広告宣伝本部等部署ごとの意識形成、共通理解の促進と組織運営の基本の習得。

4　高校生が運営する県外の先進的な組織の見学と、そこでの体験等をとおした研修の深化と進路実現への連結、及び高校生活満足度の向上。

【今年度の所見】

①　３校で合同合宿をしたため、多くのチャレンジを３校ですることができ、例年以上の大きな成果（長岡市とのコラボ、常設店舗の運営、イベント数の増加、企業コラボによる商品開発、複数回の講演会の実施、長岡ＣＡＴの知名度向上活動の推進）をあげることができた。３校の協力関係は「強い絆」となった。

②　常設店舗は、検討の余地がある。市場のニーズ把握はもちろん、店舗の位置や提供商品の選定、開店日の設定など、多くの課題が山積みで、早期の検討が必要である。

③　ビジネスマナーや店舗設営の仕方など、昨年度の反省も生かし改善されてきた。３校の教職員はもちろん、生徒間でも情報の共有を図り、さらなる向上に努めていきたい。

④　新たな取り組みが多かったが、教職員・生徒役員が努力し会議を複数回開催し、情報の共有がスムーズにできた。

⑤　アオーレ長岡、ながおか未来創造ネットワーク、長岡商工会議所と連携を密にすることができた。

【取組の概要】

１　商品コンペディションでの企画に基づくオリジナル商品の製造

(1) 長岡市内の「マルシャン」と商品コンペディションを行い、「長岡ＣＡＴオリジナルカツサンド」の商品開発に成功した。猫の爪をかたどったカツサンドを開発することができ、長岡ＣＡＴのＰＲにつながった。次年度もさらなる商品開発を継続していきたい。

　また、長岡市内の企業と他の商品についてコラボレーションし、長岡地域のＰＲと活性化の一助となるように活動を継続していきたい。

(2) 商品開発ガイダンス

　サークルＫサンクスの担当者による「商品開発ガイダンス」を４回実施した。商品開発に対する心構え、トレンドの予測や消費者ニーズの把握方法などの学習を深めた。

　コンビニエンスストアの経営から、模擬株式会社「長岡ＣＡＴ」を運営することの難しさや責任の重さ、商品選定の難しさ、ニーズ把握をするための日々のリサーチの大切さ、商品開発のための研究など学ぶことが多かった。次年度もこの講義を生かした店舗運営を心掛けたい。

２　「長岡ＣＡＴ」合同合宿

平成27年７月25日、長岡工業高等学校のセミナーハウス(長陵会館)で、３校の生徒役員各10名(計30名)で実施した。民踊流し講習会、昼食作り、研修会と盛りだくさんの内容を３校の生徒が協力して取り組み、「ゆるやかな連携」から「強い絆」へ連携強化への礎を作る合宿となった。

３校のリーダーが「強い絆」を抱くと、長岡ＣＡＴの運営活動もスムーズになることを痛感した１年でもあった。次年度も機会を複数回設け、さらなる「強い絆」を育み、長岡ＣＡＴをさらに発展させたい。

３　高校生が運営する県外の先進的な組織の見学・体験研修

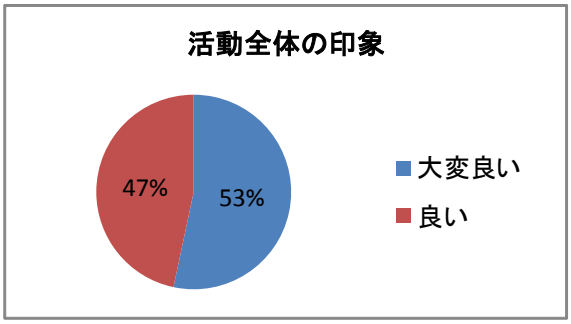
平成27年10月24日に長野県長野商業高校で実施された「長商デパート」の見学・体験研修を実施した。全国No. １のデパートを３校の生徒30名が見学・体験研修した。長岡商業高校としては過去に３回の訪問歴があり、様々なノウハウの伝授を受けているが、新たな発見が多くあり生徒・教職員ともに実りの多い研修となった。それ以上に、長岡農業高校と長岡工業高校の生徒・教職員に新たな刺激を与えることができた。これからの長岡ＣＡＴの発展は３校のスキルアップなくして実現はしないので、次年度も３校が３校の立場で影響を受ける研修先を見つけ、研修を重ねていきたい。そして、長岡ＣＡＴの「知識・情報の財産」を増やしていきたい。

４　事後ふりかえり（感想、アンケート）

(1) 平成28年２月９日の株主総会において３校の役員、参加された株主の方々、各校の教職員から感想文やアンケートの記入をお願いした。株主の方々からは温かいご指導をいただき、次年度の活動の糧となった。今年度の長岡ＣＡＴとしての総括、各校の総括をしっかり行い、次年度の活動に反映していきたい。

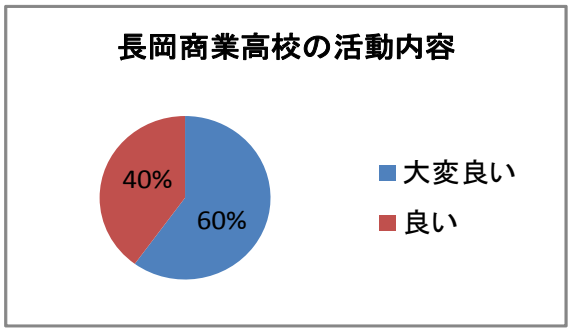
(2) アンケート結果（株主）

① 長岡ＣＡＴ活動全体の印象はどうでしたか？



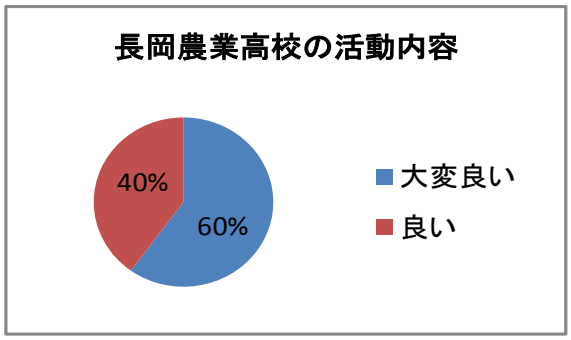
〈意見〉
・長く活動し、引き継いできたので、これからもさらに良くなると感じました。

② 長岡商業高校の活動内容はどうでしたか？



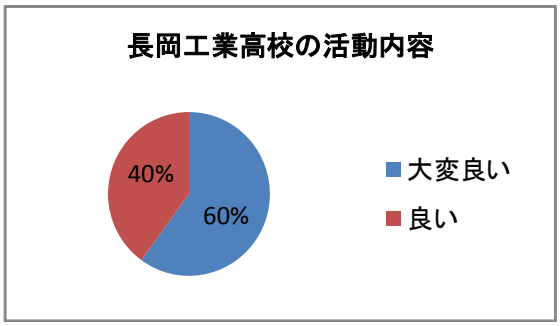
＜意見＞
・マーケティング・プロモーションの研修を計画的に進めることを期待します。

③　長岡農業高校の活動内容はどうでしたか？



＜意見＞
・長岡食材を使った新商品の開発を期待しています。

④　長岡工業高校の活動内容はどうでしたか？



＜意見＞
・製品作成の背景を「見える化」し、物語性を作って下さい。
・作るだけではなく商品開発に向けてターゲット等を計画していて良い。

５　期待する成果

(1)　地域理解に基づく商品開発・販売を通じた「長岡ＣＡＴ」の知名度の向上

①　平成27年度開発商品「長岡ＣＡＴオリジナルカツサンド」の生産・販売によって長岡ＣＡＴの知名度向上ができた。次年度も「長岡ＣＡＴオリジナルカツサンド」を継続生産・販売を行い、知名度を向上させたい。

②　長岡ＣＡＴの知名度向上に向けて企業の新規開拓を行い、コラボレーションを進め、複数の商品開発を行い、さらなる長岡ＣＡＴの知名度向上と定着を目指したい。

(2)　販路拡大に関する調査･研究や県外での先進的な取り組みの研修をとおした経営手法の理解

①　常設店舗運営を目指して、９月から長岡大手通りやアオーレ長岡にて「通行量調査」を実施した。長岡駅前の通行人の人数や年齢層・性別が明確になり、ターゲットや商品選定をどのようにするべきか明確になり、対応しやすかった。

②　長岡ＣＡＴの各イベントにて「市場調査」「通行量調査」を実施した。消費者ニーズの多様化が進み、対応が難しくなってきている。特に今年度は通行量調査をイベント前に１～２週間単位で丁寧に実施し、消費者ニーズの把握に努めた。消費者ニーズの多様化にもある程度対応できたので、成果を上げることができた。次年度も継続して「市場調査」を行い、比較検討を重ね、長岡ＣＡＴの運営の貴重なデータとしたい。

(3)　学校の枠を超えた意識形成と共通理解の促進及び組織運営の基本の習得

①　サークルＫサンクスの担当者による店舗運営、ビジネスマナー、接客の仕方、商品開発に関する講習を４回受講し、長岡ＣＡＴの店舗運営・接客マナーの向上につなげることができた。次年度も生徒向け講演会を多く設け、生徒の成長を期待したい。また、身に付けたビジネスマナーや接客の仕方を３校で共有し､長岡ＣＡＴの店舗全体のレベルアップを図りたい。

② 長岡市内の３企業(「オマージュ・ア・パリ」「マルシャン」「煉瓦亭」)とのコラボを通して、商品開発の難しさや、消費者に対する責任を学ぶことができた。次年度もコラボを継続し、商品の定番化に向けて頑張っていきたい。

③ アオーレ長岡とのコラボ企画第１弾(「常設店舗」、「こどもフェニックスフェスティバル」)を実現することができた。次年度に向け企画の研究・改善、新しい企画立案が次年度の課題である。

④ アオーレ長岡、ながおか未来創造ネットワーク、長岡商工会議所などと連携を密にすることができた。イベントのコラボをはじめ、長岡市と長岡ＣＡＴの将来構想を複数回の会議を通して積み重ねることができた。次年度の長岡地区の活性化と地方創生の一助になるために関係を密にし、大きな１歩(長岡ＣＡＴの第３のステージ)を踏み出したい。

６ 総合所見

(1) 次年度の課題

① 「常設店舗」のコンセプトの作成、開店時期、提供商品の検討が課題である。３校で常設店舗のイメージ・将来像を共有するためにも、早い時期から検討を開始し、次年度のできるだけ早い時期から開店したい。また、予算も含めてしっかりデータを取り、改善し、常設店舗単独で運営できるようにしたい。

② １年間の「イベントスケジュール」の見直しが課題である。「常設店舗」の開店時期との兼ね合いがあるので、３校でしっかり検討したい。

③ ３校のさらに強固な「強い絆」を築くための方策が課題である。１日限りの研修・合宿だけではなく、各イベント直前の商品の製作や袋詰めの手伝いなどを増やし、日々の交流機会を作り、生徒間の交流を深める。

④ 外部講師を招き、教職員・生徒役員の研修機会を増やすことが課題である。新しい知識を増やし、現在のノウハウのアレンジを行い、市場に対応できる力を育みたい。

⑤ 長岡ＣＡＴへの取り組みの評価の生徒への還元。評価の観点の見直しを常に行う。

⑥ 教職員・生徒役員の後継者の育成が課題であり、地道な勧誘活動や運営ノウハウの伝授(教職員も含め)や、２年生の関わり方の検討を早急に進めなければならない。

(2) 今後の展開

○ 「表参道・新潟館ネスパス」、「新潟空港」への出店

○ 企業コラボによる「商品開発」の推進

○ 長岡ＣＡＴのＰＲ作戦の推進

○ アオーレ長岡とのコラボ企画の推進・地域活性化の推進

栃 高　第１７４号
平成28年３月１日

高等学校教育課長　様

学番　41　栃尾高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

栃尾高校

【テーマ】　地域とともに進める学校づくり
～　将来の自己実現を目指して　～

【目　　標】

1　組織的・計画的なキャリア教育の実践をとおして､総合学科の特性を発揮した教育に取り組む。
2　地域の企業、小・中学校、行政、住民等との相互交流を推進する。
3　新たな問題の解決や探求活動に主体的、創造的に、協働して取り組む態度や能力を養う。

【取組の概要】

これまでの本校教育活動に、地域の「住民」「産業」「行政」を巻き込む事業を展開するとともに、地域の自然や歴史、文化等の再確認をとおした郷土愛の醸成を図る。
1　地域の人材を活用した取組や体験活動等を実施する。
2　世代間交流をとおした学校づくりのため、生徒と住民が集う地域コミュニティの場をつくる。

【取組の成果】

評価項目	実際の取組例	評価方法	評価
1　地域に対する愛着と誇りの醸成	①地域探訪（地域と連携した地元の町並み、歴史、産業等の理解）	・生徒アンケート、感想	B
2　学校と地域の活性化	②小学校への出張授業	・小学校児童感想	B
	③栃尾高校のＰＲと地域活性化の取組	・生徒感想、保護者感想	B
3　地域に求められる学校へ	④香育講習会、手話講習会、栃尾手まり講習会	・生徒感想、学校職員による評価	B
	⑤読み聞かせ会	・生徒アンケート、保育園職員アンケート	B
	⑥栃尾の歴史と産業見学会	・生徒感想、職員感想	B

「評価」　Ａ：達成できた　Ｂ：概ね達成できた　Ｃ：達成できなかった
（評価の詳細については、別紙参照）

１　実際の取組例

(1) 地域探訪（地域と連携した地元の町並み、歴史、産業等の理解）

ア　目的

日頃の学校生活から離れ、学校のある地域の自然や名所・歴史に触れ、地域理解を深める。また、仲間とともに遠距離を歩く中で、コミュニケーションや交流を深め、協力と協調を養い、達成感を味わう。

イ　取組の概要

(ｱ) 実施日時

平成27年10月８日（金）　１０：００～１６：００

(ｲ) 内容

①コース

１・２年　：杜々の森 → 菅原神社 → ほだれ大神 → 道の駅 → 秋葉神社 → 学校

３年(午前)：上杉謙信及び城山に関する講演 → 学校 → 城山登山 → 学校

３年(午後)：学校 → 巣守・貴渡神社 → 道の駅 → 秋葉神社 → 学校

②実施方法

５名程度の班で行動し、目的地(チェックポイント)を経由・見学しながら学校まで歩く。

③取組の実際

１、２年生はバスで杜々の森まで移動し、昼食及び自由見学後、一斉にスタートし、決められた栃尾地域の名所であるポイントを通過（見学）しながら、ゴールの学校まで歩いた。

３年生は、午前中、栃尾ボランティアガイド３名の方による、栃尾地域で旗揚げをした上杉謙信及びその城山に関する講演を聞き、その後、城山登山を行った。午後は、栃尾の基幹産業である織物に関係の深い貴渡神社を目指し、その後、地域の名所を見学しながら、ゴールの学校まで歩いた。

それぞれのコースでタブレットパソコンを１台ずつ持参し、３年生では城山山頂で昔の栃尾地域の写真と現在の風景を見比べたり、１、２年生ではコース沿いに咲く草花を調べ、色々な角度から地域理解を深めた。

ウ　取組の成果

生徒アンケートより（抜粋）

・班のみんなと協力して最後まで歩いてゴールでき、さらに班の人たちと仲良くなれたので良かった。楽しくゴールするという目標も達成でき、栃尾の知らない場所にも行けて良かった。杜々の森は自然がきれいで気持ちが良かった。

・久しぶりに長い距離を歩き疲れたが、友達と話しながら歩いたり、栃尾の文化に触れたりできたので、充実した地域探訪だった。城山の本丸からの栃尾の街のながめは、とてもすばらしかった。上杉謙信についても学べて良かった。

・普段、長い距離を歩くことがないが、クラスの人たちとコミュニケーションがとれてとても良かった。そして栃尾の自然や名所を見ることで栃尾への興味が深まった。

(2) 小学校への出張授業（ワークショップ「ねんどで縄文体験」、「おもしろサイエンス」）

ア　目的

小中高の連携の一環として、小学校への出前授業（文化祭のワークショップ）を行い、実験・実習をとおして、社会や理科の楽しさを体験してもらう。

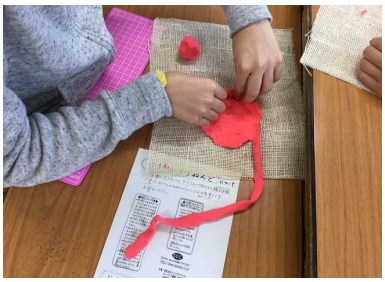
イ　取組の概要

(ｱ) 実施日時

平成27年11月８日（日）　１３：３０～１５：１０

(ｲ) 内容

①ワークショップ「ねんどで縄文体験」



前半と後半の各45分のワークショップを２回開催。

はじめに、縄文時代の生活の様子を簡単に説明し、遺跡から発掘された土器などを紹介。続いて紙粘土に貝殻、ひも、麻布などを用いて模様を付ける方法や器の作り方を説明し、その後、作品製作にとりかかった。完成後は全員で作品鑑賞をした。

②ワークショップ「おもしろサイエンス」

テーマは「見る」。前半は児童たちと「見る」ことについて考えたり感じたりし、後半は、目の錯覚を利用した工作と、ウニの胚（受精卵～プルテウス幼生）とコケの中の微生物を顕微鏡で観察して、顕微鏡の世界を体験してもらった。

ウ　取組の成果

①ワークショップ「ねんどで縄文体験」

縄文時代の暮らしに興味を持つ子、模様付けに集中する子、作品鑑賞で丁寧な完成度の高い作品に興味を持って見ていた子、やわらかい紙粘土の扱いに苦労しながら完成させた子など、どの児童も真剣な取組姿勢であった。児童は反応があり充実した時間を過ごせた。鑑賞の時間を設けたことで、別のテーブルの児童がどのような作品をどのような工夫をしながら作り上げたのかを知ることになり、「わー、すごい」「これはきれいだね」などの反応の声を聞くことができた。一方通行ではなく、参加者同士の相互作用が生まれるワークショップであった。

②ワークショップ「おもしろサイエンス」

１年生から６年生まで幅広く参加してくれた。とても積極的な姿を見ることができ、子どもたちの知的好奇心の高さに驚いた。今回のテーマは「見る」。前半は児童たちと「見る」ことについて考えたり感じたりした。後半は、″工作による錯覚の体験″と″顕微鏡の世界の体験″。26名の子どもたちと「見る」ことの不思議を感じることができた。保護者の方々からも多くの質問があり、″サイエンス″を通して交流することができた。また、本校科学部の生徒と元栃尾高校の教員からの協力もあり、子どもたちに丁寧に対応することができた。

(3) 栃尾高校のＰＲと栃尾地域活性化の取組

ア　取組の概要

(ｱ) 内容

今年度新たな取組として、本校や栃尾のＰＲ活動を行った。ＰＲのための材料製作にあたり、本校卒業生のイラストレーター大竹様より講演いただき、ポケットティッシュの製作とポストカードの製作に取り組んだ。

ポストカードに関しては、工業技術系列の取組で製作した製品と一緒に地元商店「とちパル」にて販売することとし、同時に簿記の学習として販売計画、分析活動も行った。

また、椽峰祭（文化祭）では、新たなＰＲグッズとして、オリジナルボールペンを製作した。

(ｲ) 具体的な取組

①７月　・ポケットティッシュに入れるチラシ作りと栃尾地域活性化のポストカードを製作（イラストレーター　大竹幸輔先生による講演）
　・ポケットティッシュ用チラシ製作
　・油揚げ創作料理レシピのポストカード製作

②７月17日　・栃尾東小学校の遠足において児童にポケットティッシュを配付

③７月17・21日　・工業技術系列の取組で製作した製品用に、台紙製作と袋詰め。
　・ＰＯＰ製作、販売開始のチラシの製作

④７月29日　・栃尾高校体験入学時に、ポケットティッシュと販売開始のチラシを配付

⑤７月29日　・「とちパル」店内で商品の販売開始

⑥10月　・椽峰祭（文化祭）において本校ＰＲ用のボールペンを製作して配付

イ　取組の成果

(ｱ) 地域の方より

・とちパルの活用などこれからも是非推進していって欲しい。
・栃尾高校がどのような活動をしているかを知ることも出来、今後も頑張ってやって欲しい。
・高校生が栃尾地域を盛り上げているのはとても良いことで、今後みんなで協力して盛り上げていきたい。

(ｲ) 生徒の感想より（抜粋）

・自分たちが作った製品が販売されるのは嬉しい。
・栃高の商品を見たよと声をかけられた。
・売上が気になる。

(4) 香育講習会、手話講習会、栃尾手まり講習会

ア　取組の概要

(ｱ) 香育講習会

平成27年12月７日（月）５、６限

嗅覚と味覚は、人を危険から守る感覚機能である。現代社会は、合成の着香料や調味料の大量生産により天然成分を摂取する機会が減っており、そのため人が本来持っている機能の低下が危惧されている。そこで、体と心の調子を整えるひとつの手立てとして、天然アロマを用いた香り体験を行い、毎年の栃尾地区在住の高齢者への「香袋」製作プレゼントに、その効果を取り入れた。

(ｲ) 手話講習会

平成27年11月９日（月）５、６限

手話による自己紹介の表現方法を学ぶ。また、県立長岡聾学校との交流会に向けて、自己学習した手話表現が適切かどうか、講師から助言していただく。県立長岡聾学校との交流会では、あらかじめ決めていた両校混合班で昼食をとった後、生徒全員が名刺交換をしながら手話で自己紹介を行った。レクリエーションの「ジェスチャーゲーム」は栃尾高校生が司会をし、罰ゲームを取り入れるなど、楽しめる内容を考案した。手話ソング講習会は、県立長岡聾学校の自作ＤＶＤを写しながら、手話とダンスを取り入れた手話ソングを生徒全員で行った。

(ｳ) 栃尾手まり講習会

平成27年７月15日（水）～９月30日（水）　計６回（12時間）

第１回　　手まりの土台作りを行った。芯に数珠玉を入れて音がなるような工夫を施し、糸を巻き付けて所定の大きさに仕上げていった。

第２回　　写真見本から、作りたい柄と色糸を選び、製作を開始した。

第３回～５回　　まり上に刺していく位置を確認しながら、色糸で形と模様を作っていく。

第６回　　仕上げの飾り紐をつくり、手まりに取り付ける。

イ　取組の成果

(ｱ) 香育講習会（生徒感想より抜粋）

・苦手な香りが多かったが、オレンジとヒノキを混ぜた香りはいい香りだった。
・どのような種類があるのかもっと知りたい。
・もっとたくさんの匂いをかいでみたかった。ブラックペッパーは不思議な香りだった。
・アロマがどうやって作られているか分かった。こういう授業をもっと受けたいと思った。

(ｲ) 手話講習会（生徒感想より抜粋）

・交流会では、最初は何を話したらよいか分からなかったけれど、同じ趣味を持っている人がいたり、交流が進むにつれて仲良くなっていけて良かった。
・うまく手話ができるか心配だったが、自己紹介はきちんとできた。話しているときに県立長岡聾学校の生徒さんが、うなずいてくれて嬉しかった。
・言葉で話せなくても文字や手話で伝わることに感動した。
・私たちにとって話すことは普通のことだけど、聾学校の人たちは「手」で会話することが当たり前で、あまり見ることのできない光景が新鮮だった。

(5) 読み聞かせ会

ア　取組の概要

読み聞かせ会を実施するにあたり、図書委員会で読み聞かせについて考えさせることから始めた。また、生徒への指導と読み聞かせの理解を深めるため、教員自らが外部読み聞かせ講座に参加するとともに、図書委員も地域図書館にて読み聞かせ講習を受けた。８月からは、月１、２回（日時は保育園と相談）、図書委員が保育園に赴き、読み聞かせを実践。10月に行われた橡峰祭（文化祭）では、図書委員会の企画として取り組み、多くの皆さんから参加してもらった。

イ　取組の成果

(ｱ) 生徒アンケートより

・嬉しい気持ちになった。　　・相手のことを考えるようになった

・読む力が上がった。　　・読み方を考えるようになった。

(ｲ) 保育園より

８月から絵本の読み聞かせの時間が始まり、子どもたちがどんな反応をするのか職員皆が毎回楽しみにしていました。きちんと聞いてくれるのかな？とのこちらの心配をよそに、毎回生徒さんの絵本をじ～っと見て、聞いている姿に感動でした。いつも真剣にお話を読んでくださりありがとうございました。これからもまた交流を深めていけたらと思います。恥ずかしかったり、緊張もした事でしょうが皆さんが一生懸命に読んでくれたことは子どもたちにとって良い宝物になったと思います。次回は緊張せずに来園ください。お待ちしています。

(6) 栃尾の歴史と産業見学会

ア　取組の概要

平成27年12月４日（金）

工業技術系列選択３学年を対象として、木造小学校（長岡市立中野俣小学校）と地元企業（越銘醸株式会社）の見学会を実施した。いずれも長い伝統を感じさせる建築物が壮観で、歴史や産業の話を伺い、昔の人々の暮らしや長い伝統を誇る酒造りの様子を学習することができた。

イ　取組の成果

中野俣小学校では木造校舎のぬくもりに触れるとともに、当時の学校生活や農家の暮らしぶりをじっくりと伺うことができた。全校児童12名が学ぶ木造校舎は、まさに現代の「二十四の瞳」のようであった。

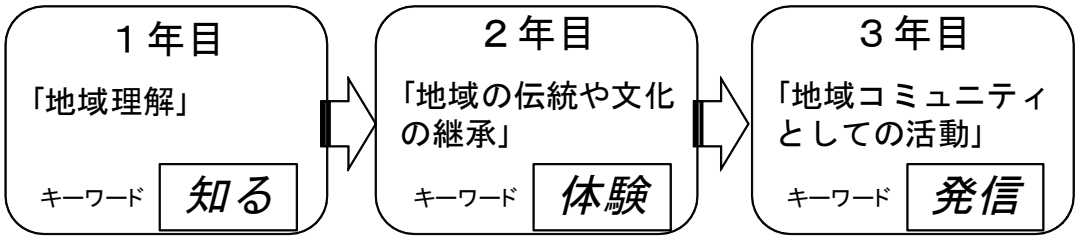
越銘醸株式会社は昔ながらの酒造りの伝統を守りつつ、新しい商品作りに挑戦している姿や、栃尾の雁木通りに合う形で、本社社屋のリフォームなど過去と現代の融合がブランドイメージを高めるとともに、さらに新しい伝統を作り上げているということがわかった。

今回の見学会では両者とも建築物の歴史的価値だけではなく、それを実際に利用している皆さんの様子を拝見することにより、昔ながらのものを最大限に活かしてさらに新しい未来を切り拓こうとする姿が感じられ、「栃尾の地域理解を深める」という所期の目的を十分に達成できた。

２　総合所見

⑴　３年間を見通した取組へ

今年度は、１年目の取組として、これまでの本校の教育活動を見直しながら、校内にとどまらず地域へ活動の場所を広げて取り組んできた。１年間の取組をとおして、本事業の１年目から３年目のテーマとキーワードを、３年後の栃尾高校の姿を見据えて次のように設定した。



１年目のテーマは「地域理解」でキーワードは「知る」である。本校は地元栃尾地域からの通学者が約４割、旧長岡及び見附地域から通学している生徒が約６割となっている。そのため、まずは栃尾を知る、本校が地域に求められていることを知る、などをテーマに、各系列（教科）、学年、委員会等が中心となって、具体的な活動計画を立てて実施した。その結果、それぞれの取組のアンケートでもわかるとおり、生徒のみならず教職員も新たな栃尾の魅力、地域からの期待を実感する活動となった。

⑵　３つの目標に対して

ア　組織的・計画的なキャリア教育の実践をとおして､総合学科の特性を発揮した教育に取り組む

学年ごとの進路ガイダンスをはじめ、各系列で地元の企業見学や伝統工芸品の製作などをとおして、今後の進路について考える機会が多かった。また、今年度から新たに取り組んだ栃尾高校の販売実習では、工業技術系列とビジネス・情報系列が協力して製作活動を行い、継続して販売方法を検討していくなかで、それぞれの系列の生徒が今後の進路を考える良い機会となった。

イ　地域の企業、小・中学校、行政、住民等との相互交流を推進する

これまでも小学校への出張授業を行ったり保育園の園児が来校したりする機会があった。今年度はそれらの取組に加え、隣接する小学校の遠足時に、高校生が実習で製作した物をプレゼントしたり、近隣の保育園に読み聞かせのために訪問したりするなど、活動の範囲を広げて取り組んだ。また、中高の相互交流として地元の２つの中学校から、本校の授業公開に参加してもらい、意見交換する機会を設けるなどの取組も行った。どの取組においても、日頃、接する機会が少ない世代との交流の中で、お互いに学ぶことが多かったと考える。

ウ　新たな問題の解決や探求活動に主体的、創造的に、協働して取り組む態度や能力を養う

各系列の授業の中には、この目標に関する取組が行われていたものもあった。例えば、先ほどでもあげた販売活動では、グループに分かれ現状分析や今後の販売計画を行い、どうすれば売れるかという問題点について話合いがもたれている。しかし、今年度の取組では、この目標を実践する活動には乏しいため、次年度以後の課題として今後の展開を考えていきたい。

⑶　次年度の取組に向けて

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトの活動の２年目は『体験』するをテーマに取り組む計画である。この活動はそのまま３年目のテーマである『発信』するにつながる。１年目の取組で見えてきた課題、例えば栃尾の魅力を若い人達に知ってもらう機会が少ないのではないか、また、高校時代に学んだことをもっと地域の方達に還元できないかなどの課題を解決する活動に結びつけていきたいと考えている。そのためには、次年度は今年度以上にそれぞれの取組の中で体験的活動を増やしていく計画である。見る、聞くだけではなく、自ら体験することにより栃尾の魅力を発信できるように準備する１年でありたいと考えている。

最終年度である３年目には、本校において、地域の方の参加型ワークショップなどを開催したり、栃尾の魅力を発信するためのパンフレット作り等に取り組み、本校が率先して地域活性化の発信源となれるように目指していきたいと考えている。

県央工第268号
平成28年３月４日

高等学校教育課長　様

学番 45　新潟県央工業高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

新潟県央工業高校（三条商業高校、加茂農林高校）
【テーマ】　県央地域に最新未来都市を創造する地域活性化プロジェクト ～レトロフューチャーからリアルフューチャーへ～
【目　　標】 災害に強く、豊かな生活環境を保ち、地域の歴史や文化を守りながらも若者が集い、活気あふれる街を創造し、最新の未来都市、「リアルフューチャー」な都市のイメージを県央地域に創造することを目指し、専門高校生が観光・防災・環境の３つの視点から新たな未来都市作りに資する取り組みを行う。 **【取組の概要】** ○　３校によるＮＰＯ法人を設立 ３校が学校の垣根を取り払って、ＮＰＯ法人を設立し、事業別の企画課により３校それぞれが持つ特色を取り入れた企画を立案し、各種事業を実施する。 ○　地域イベントへの積極的な参加及び開催 三条マルシェ、三条市のイベント等の地域イベントへ３校で連携して参加し、イベントを盛り上げて地域活性化に貢献する。 ロボット競技大会や防災フォーラムを開催し、地域に参加をアピールできるよう、３校が連携して、企画価値を高めていく。 ○　教育・学習・体験ツアーの実施 県内外の小中学生・高校生などを対象に、観光・防災・環境の３つの視点を取り入れた「教育・学習・体験ツアー」を企画・立案し、県内外に案内して参加者を募り、高校生ガイドが案内する。 ○　地域活性化のための諸活動 観光・防災・環境をテーマにして、地域活性化のための新商品の開発、防災標識の設置、自然ふれあい体験等を展開する。あわせて高校生が発案した企画を、地域企業と連携して、商品開発・販売活動をすることにより企業家教育に結びつける。具体的には各校が連携して、地域住民の方から調査を行い、高校生の視点を取り入れて、地域に適した防災グッズなどの商品開発・販売活動、危険箇所の標識表示や防災リーフレットの作成を行う。 ○　地域イベントの開催及び積極的な参加 ロボット競技大会や防災フォーラムを開催し、地域に参加をアピールできるよう、３校が連携して、企画価値を高めていく。 三条マルシェ、三条市のイベント等の地域イベントへ３校で連携して参加し、イベントを盛り上げて地域活性化に貢献する。

１　オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト
新潟県央工業高等学校、三条商業高等高校、加茂農林高等学校の取組

(1) 防災キャンプへの参加

平成27年度セイフティアドベンチャー　防災キャンプＩＮ三条

期　日　平成27年７月29日(水)～30日(木)

参加者　職員２名、生徒２年建設工学科都市防災コース８名

会　場　三条市立月岡小学校体育館を中心とした各施設

内　容　地域の危険個所探索、安全マップ作り、避難所体験活動、避難食体験、講演会等

日　程　　9:15　開会式・オリエンテーション
　　9:30　①マップ大作戦～危険個所探索ツアー、安全マップ作成活動
　　12:00　②非常食体験
　　13:30　③プロジェクトアドベンチャー
　　14:00　④選択プログラム～避難所づくり体験～
　　16:45　高校生ボランティア解散式

①　マップ大作戦～危険個所探索ツアー、安全マップ作成活動

②　非常食体験

○　配給品
- おかゆ
- 梅干し
- 缶詰(きんぴらごぼう、ひじき、煮豆など)
- 野菜ジュース(非常用)
- ミネラルウォーター
- ビスケット(絶乾状態)

③　プロジェクトアドベンチャー

④　選択プログラム　～避難所づくり体験～

○　本部

本部では、看板作成をし、三条商業高校と協力して目立つような看板を作成しました。リーダー会議では、各班の進行状況を確認し、進行が遅れてる場合には指示をだして計画の遅延がないようにしました。会議の時には大人との会話も増え、臨機応変に対応している大人の姿が印象的でした。

【参加生徒の声】

防災キャンプでは、当時の様子を地域の方から聞き、実際に被災現場を見たことで水害の怖さを改めて知ることができました。普段意識をすることを忘れてしまいがちな災害の怖さを思い出したと同時に防災についての大切さを実践的に知ることができました。

(2) ロボット大会三条大会

期　日　平成27年９月５日(土)
会　場　新潟県央工業高校

○　地域イベントとして盛り上げるため、大会会場で、三条商業がパン販売を行いました。
○　観客に大好評で、20分で80個を完売しました。

(3) 青少年による座談会

期　日　平成27年11月15日(日)
会　場　三条ものづくり学校多目的ホール
テーマ　「地域の活性化を考える」
主　催　三条市青少年育成市民会議
内　容　青少年の社会参加、ふるさとへの愛着と誇りの醸成を目的とした座談会
参加校　新潟県央工業高校、三条商業高校、加茂農林高校

新潟県央工業高校の紹介パネル

３校の発表生徒(後方の壇上)

(4) 視察研修旅行

期　日　平成27年11月19日(木)～11月20日(金)

【１日目】宮城県多賀城高等学校　多賀城市笠神2-17-1

・創立：昭和51年
・平成27年度：創立40周年
・全日制課程　普通科(７)　837名
・仙台駅から仙石線で下馬駅(20分)下車、下馬駅から徒歩20分
・99％進学(国公立大学50～60名程度)
・来春、全国二校目となる防災関連学科「災害科学科」が誕生する。
・平成26年度は、ＳＰＰ採択校となり、平成27年度は、　国連防災世界会議に出席しパブリックフォーラム「世界防災ジュニア会議」で「命を守る未来に伝える」が最高賞の「グッド減災賞」(金賞)に輝いた。
・その他、国際交流、ボランティア活動、地域貢献等、防災に関する活動を積極的に行っている。

○　多賀城高校近くのイオン駐車場(４階)から東日本大震災当時の様子を聞く。

○　多賀城高校近くの歩道橋下に設置した津波による浸水シール(多賀城高校作成)の説明を受ける。

○　生徒間交流では、各校の生徒会活動の取り組みや東日本大震災の様子、本校からは7.13水害の様子など、災害や防災についての取り組みを紹介し、交流を深めた。

【２日目】仙台市立仙台工業高等学校　仙台市宮城野区東宮城野3-1

・創立：明治29年
・平成28年度：創立120周年
・全日制課程　593名
　建築科（１）、土木科（１）、機械科（２）、電気科（２）
・定時制課程　85名　建築土木科、機械科
・仙台駅からバスで20分
・鉄筋コンクリート４階建て
・平成28年度　全日制課程120周年
　　定時制課程100周年
・校訓：友愛、協調、勤勉
・平成26年度　ジュニアマイスター認定者
　　ゴールド８名、シルバー24名
・就職率100％

○　土木科の先生（写真左奥）から学校の概要や土木科の教育活動の説明を受ける。また、「震災がもたらしたもの～あれから４年経過して～」というテーマで防災教育推進についての説明も受けた。
○　難関資格（測量士補、２級土木施工管理技術検定）にも多くの合格者を出している。

【生徒感想１】
今回の視察は、東日本大震災の被災地である、仙台市と多賀城市の高校ということで様々な思いやこれまでの取り組みに非常に興味関心がありました。特に、多賀城高校は、全国で２校目となる防災関連学科が誕生するということで、その準備についてや被災地の見学もさせていただきました。その中で、やはり地震や津波の恐怖については今なお消えることのないものだと強く感じました。次の日の仙台工業高校は、宮城県を代表する工業高校ということで、プライドを持って教育活動に取り組んでいる様子がわかりました。実習棟の見学はできませんでしたが校舎はとても立派でした。今回の視察から、今後も両校との交流を継続し、深めていきたいと思いました。特に、多賀城高校には、毎年、本校が参加している「防災キャンプ」に参加してもらえればとお誘いしました。

【生徒感想２】
今回の県外視察は、他校との交流の他に防災に関して情報を交換し合うという目的がありました。私は、都市防災コースの代表として、津波を受けた海岸などの現地視察をしましたが、想像を超えた規模の津波の爪痕を見て絶句しました。現在はあまりテレビに取り上げられず、今の被災地の姿を見る機会がありませんでしたが、被災地を視察して復興が徐々に進んでいることを実感しました。今回、学んだことはたくさんあり、この学校でも活かせる体験をしてこれたと思います。とても勉強となった県外視察でした。一日も早く復興するよう祈ってます。

(5) 平成27年度オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト報告会

期　日　平成28年２月16日(火)
会　場　新潟県央工業高校講堂
参加者　コメンテーター　ＮＰＯ法人にいがた防災ボランティアネットワーク
理事・事務局長　李仁鉄　様
新潟県央工業高校　１．２学年全生徒、全教職員
三 条 商 業 高 校　生徒８名、教職員２名
加 茂 農 林 高 校　生徒６名、教職員１名

(6) 三条マルシェへの出店

○　新潟県央工業高校：機械工作部、建設部建築班を中心にネームプレートや槌起銅器の制作の体験工作を行っている。
○　三 条 商 業 高 校：学校設定科目「プランニング」において企業と連携・開発した商品や、商業クラブの「いかぱん」を販売している。

次年度以降は、加茂農林も合同出店を予定している。

(7) その他

○　文化祭相互参加
３校の文化祭に相互出店した。
10月17日　三条商業高校
10月24日　新潟県央工業高校、加茂農林高校

２　３校ＮＰＯ法人（トライフューチャー）の設立について

○　３校合同委員会（平成28年１月28日開催）において、ＮＰＯ法人の名称を「トライフューチャー」と定め、平成28年度中の設立を目標とすることを確認した。
○　平成27年度オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト報告会（平成28年２月16日開催）において、ＮＰＯ法人の名称を発表した。
○　今後、役員の人選、約款の作成、費用負担等の課題を確認した上で、新潟県教育委員会、司法書士等の指導を仰ぎながら、高校間の垣根を超えたより広範な活動を行っていく。

３　総合所見

○　初年度は３校が県央地域を活性化するための様々な取り組みを行うために、学校の垣根を取り払い、ＮＰＯ法人を設立し、３校それぞれが持つ特色を取り入れた企画を立案して各種事業を実施していくという目標を具体化する事が出来た。実際にＮＰＯ法人を作り上げるためには、様々な課題を解決していくことが必要であるが、全国的に見ても合同でのＮＰＯ法人設立は初の試みであり、そのことが持つ今後の波及効果を期待していきたい。
○　３校の連携面については、手探りの状態からいくつかの合同事業の実施、教職員・生徒間での意見交換により、ある程度の成果を出すことが出来た。
○　課題としては、ＮＰＯ法人のための設立手続き上の費用や、税金負担などの経済面と、連携していく上で、加茂農林高校と三条市内２校間の距離により、定期的な意見交換の場を設ける事に支障が生ずるとの不安が、インターネット環境の利用等により、工夫をして密接な協議の場を数多く設けていく。
○　次年度については、３年目に予定している地域フォーラムの開催や観光・防災・環境ツアーの実施に向けた準備を行うとともに、ＮＰＯトライフューチャーによるイベントへの参加、イベント開催を行い、３校間の連携強化と、様々な事業の企画力・実行力を高めていく。観光・防災・環境という３校の特色を活かした事業を通して、将来この地域を支えていく人材育成と、人的なつながりを育むことにより、オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトの波及効果が、事業終了後も長期間に渡って続いていく様に指導していく。

三商第269号
平成28年3月4日

高等学校教育課長　様

学番　46　三条商業高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて下記のとおり報告します。

記

三条商業高校（新潟県央工業高校、加茂農林高校）
【テーマ】　県央地域に最新未来都市を創造する地域活性化プロジェクト ～レトロフューチャーからリアルフューチャーへ～
【目　　標】 災害に強く、豊かな生活環境を保ち、地域の歴史や文化を守りながらも若者が集い、活気あふれる街を創造し、最新の未来都市、「リアルフューチャー」な都市のイメージを県央地域に創造することを目指し、専門高校生が観光・防災・環境の３つの視点から新たな未来都市作りに資する取り組みを行う。 【取組の概要】 ○　３校によるＮＰＯ法人の設立・登記（準備） ３校が学校の垣根を取り払って、ＮＰＯ法人を設立し、事業別の企画課が３校それぞれが持つ特色を取り入れた企画を立案し、各種事業を実施する。 ○　教育・学習・体験ツアーの実施（準備） 県内外の小中学生・高校生などを対象に、観光・防災・環境の３つの視点を取り入れた「教育・学習・体験ツアー」を企画・立案し、県内外に案内して参加者を募り、高校生ガイドが案内する。 ○　地域活性化のための諸活動 観光・防災・環境をテーマにして、地域活性化のための新商品の開発、防災標識の設置、自然ふれあい体験等を展開する。あわせて高校生が発案した企画を、地域企業と連携して、商品開発・販売活動をすることにより企業家教育に結びつける。具体的には各校が連携して、地域住民の方から調査を行い、高校生の視点を取り入れて、地域に適した防災グッズなどの商品開発・販売活動、危険箇所の標識表示や防災リーフレットの作成を行う。 ○　地域イベントへの積極的な参加及び開催 三条マルシェ、三条市のイベント等の地域イベントへ３校で連携して参加し、イベントを盛り上げて地域活性化に貢献する。 ロボット競技大会や防災フォーラムを開催し、地域に参加をアピールできるよう、３校が連携して、企画価値を高めていく。 【取組の成果】 専門高校が連携して事業に取り組むことにより、各校が独自に育んできたノウハウを共有し、複合的で高度化された新事業を準備・計画できた。各校の生徒が共同作業を進めていく中で、将来社会に出て働いていくための資質を身に付け、斬新で新しいアイディアを創造することにより、将来、県央地域を発展させていく人材育成の礎となった。

【平成27年度の取組】

1　取組状況

６月12日　第１回校内委員会(オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト委員会)の開催

７月29日　セイフティーアドベンチャー(防災キャンプＩＮ三条)参加
新潟県央工業高校、三条商業高校参加　(三条市立月岡小学校)
○避難所体験　○避難食体験　○地域の危険箇所探索
○救急救命講習　○講演会など

８月７日　オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト合同委員会開催
(新潟県央工業高校)
○各校の取組状況　○模擬株式会社設立について
○３校共同事業について

９月８日　第２回校内委員会開催

９月13日　三条マルシェ出店

９月16日　青少年による座談会打合せ　(三条市青少年育成センター)

10月４日　ボランティア祭出店　(三条市福祉センター)

10月12日　三条マルシェ出店(新潟県央工業高校、三条商業高校参加)

10月18日　大崎小学校バザー出店　(大崎小学校)

10月23日　「県庁生協祭り」出店　(新潟県庁)

10月24日　新潟県央工業高校、加茂農林高校の学園祭参加
(新潟県央工業高校、加茂農林高校)

10月25日　「いい湯らてい秋の大感謝祭」出店　(三条市いい湯らてい)

11月６日　青少年による座談会打合せ　(三条市青少年育成センター)

11月15日　青少年による座談会(高校生徒先輩たちのユーストーク)
(三条ものづくり学校多目的ホール)
○トーク出演者の話　○高校生の発表　○フリートーク

11月26日　観光に関する先進校訪問(学校訪問)　(福井県立奥越明成高校)

11月27日　観光に関する先進校訪問(学校訪問)　(石川県立金沢商業高校)

12月７日　オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト合同委員会開催
(新潟県央工業高校)
○ＮＰＯ法人の設立について

12月14日　オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト(観光に関する講演会)開催
○演題「県央地区の観光資源の活用とその取組

１月28日　オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト合同委員会開催
(新潟県央工業高校)
○ＮＰＯ法人の名称決定　○ＮＰＯ法人の設立　○次年度の計画

２月４日　第３回校内委員会

２月16日　オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト報告会
新潟県央工業高校、加茂農林高校、三条商業高校参加
(新潟県央工業高校)

３月16日　オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト(防災に関する講演会)開催
○演題「災害に強く、豊かな生活環境を保つための地域の防災」

２　主な取組の成果

(1) セイフティーアドベンチャー(防災キャンプＩＮ三条)

○　三条市教育委員会主催で市内の小学５、６年生、中学生を対象として月岡小学校で二日間開催された。本校の生徒と新潟県央工業高校の生徒はボランティアとして初日の一日参加した。

○　活動目的は、児童・生徒が学校教育外の環境(放課後、学校休業日)において、被災した場合に、自らの危険を回避できるよう必要な技術や知識を学習させることである。

○　具体的には地域の危険箇所探索、安全マップ作り、救急救命講習、避難所体験活動、避難食体験 、講演会などが行われた。

○　群馬大学大学院の片田敏孝教授や、三条市消防本部、三条市福祉協議会、ＮＰＯ法人新潟災害ボランティアネットワーク等の方々から協力をしていただいた。

○　三条市は過去に洪水で五十嵐川の堤防が決壊し、大きな水害が発生し、甚大な被害がおきた。時間が経過し、日頃忘れがちな防災について再認識することができた。

○　いざ災害が発生したとき自ら危険を回避できるか、具体的な実践例を体験・学習し、お互いに学ぶことができた。

(2) 三条マルシェ(10月開催)

○　三条マルシェは年７回開催されるが、10月は三条市のメインストリート全体で行われる大規模な開催である。

○　今回のマルシェは新潟県央工業高校の生徒と、本校の創造ビジネスコースの３年生の生徒、そして商業クラブの生徒が参加した。普段はそれぞれの学校が単独で参加していたが、今回はオンリーワンスクール新潟未来プロジェクトの一環として２校が協力・連携して参加した。２校はそれぞれ得意の専門分野で出店し、新潟県央工業高校はネームプレートや木製のパズルなど機械工作の製品を販売し、本校の創造ビジネス科の３年生は学校設定科目「プランニング」の 授業の一環として、それぞれのグループが企業と共同開発したオリジナル商品(主に食品)を販売し、商業クラブの生徒は三条商業高校オリジナルのパン販売を行った。

○　日頃、別々の学校で学ぶ２校の生徒が互いに協力して地域の活性化を目的としたイベントに参加できたことは 、生徒にとって有意義で貴重な経験となった。

(3) 新潟県央工業高校・加茂農林高校の学園祭への参加

○　２校の学園祭は同日に開催されたが、本校の生徒を二つに分け、２校とも学園祭に参加し出店した。

○　他校の学園祭の参加は今回が初めてで、今後は毎年相互に学園祭に参加する予定である。本校の生徒はそれぞれの学校でブースを設けて、10月の三条マルシェで販売したオリジナル商品を販売した。それぞれの学校の生徒が特徴を活かし、また、お互いに情報交換が行われ、実践的な販売実習ができた。

(4) 青少年による座談会(高校生徒先輩たちのユーストーク)

○　ＮＡＭＡＲＡお笑いコンビ「ジャックポット」大野まさやさんによる軽妙な進行で、本校を含め、新潟県央工業高校、加茂農林高校の３校が参加し、地元の職人やまちづくりのプロの方たちなどによる、地域の活性化についてのトークセッションが開催された。

(5) 観光に関する先進校訪問(学校訪問)

○　奥越明成高校(福井県)

・福井県で初めての総合産業高校である奥越明成高校を訪問した。

・ビジネス情報科では学校設定科目「観光」という授業があり、観光について基礎を学び、さらに３年生では観光の実践的な学習を通して、地域やふるさとについて学んでいる。

・また、授業の一環としてで「のこのこ」というフリーペーパーを作成したり、プロ顔まけの地元大野市の観光ポスターなどの作品を制作している。

○　金沢商業高校(石川県)
・100年を超える歴史と伝統を誇る学校で、生徒が企画して、商品の仕入から販売までを行う、「金商デパート」が有名である。
・金沢の魅力発信のために、地元の伝統や文化を学んでいる。
・また、最近では文部科学省の研究指定事業として「観光」に力を入れている先進校で、高校生によるガイドツアー等を企画し、地元石川の魅力を発信している。

(6) オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト「観光」に関する講演会
○　対象生徒は１年生で、学校設定科目「地域ビジネス」として実施した。
○　新潟経営大学特任教授の藪下保弘先生から、「県央地区の観光資源の活用とその取組」という演題で、燕三条の産業と観光資源について講演していただいた。
○　普段、私たちが気づかない、ものづくりの拠点としての燕三条の観光地としての魅力について学習した。

(7) オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト報告会
○　平成27年度の活動報告があり、最後に指導講評としてＮＰＯ法人新潟防災ボランティアネットワークの理事・事務局長の李　仁鉄様から貴重なアドバイスをいただいた。

(8) オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト「防災」に関する講演会
演題　「災害に強く、豊かな生活環境を保つための地域の防災」
講師　長岡造形大学　准教授　澤田　雅浩　様

３　生徒の感想

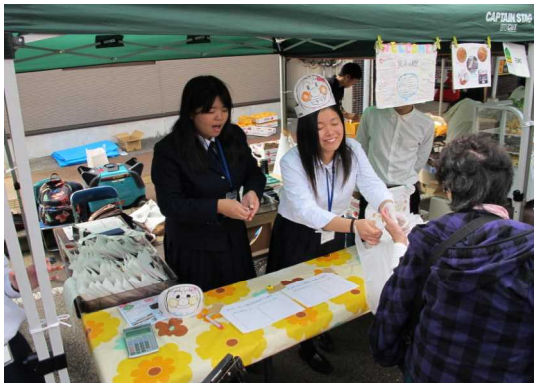
○　私は商業クラブに入ってから様々な貴重な体験をさせてもらっている。その中でもマルシェでの「いかパン」販売は、お客様とのコミュニケーションがとれてとても楽しい。高校生活の中で商業クラブの活動をとおして地元三条市や三条商業高校を盛り上げることが私の目標である。残り１年間で何ができるのかを考えながら行動していきたい。
○　２月16日に新潟県央工業高校で行われた「オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト報告会」に参加しました。この報告会では新潟県央工業高校生による防災についての活動報告を聞きました。３つの班の発表があった中でも、一番私の心に残ったのは、県外視察につい報告です。５年前に発生した東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県の２つの高校を視察した報告を聞きました。多賀城高校には災害科学科があり、生徒たちが津波の浸水の深さの表示シールを作成、設置したということが特に印象的でした。また、ＮＰＯ法人新潟防災ボランティアネットワークの李　仁鉄さんのお話を聞いて、防災がどれだけ大切なものなのかを実感しました。今後も新潟県央工業高校、加茂農林高校、三条商業高校の３校で連携して、このプロジェクトを成功させたいです。

４　総合所見

○　今後のオンリーワンスクール新潟未来プロジェクトの取り組みを継続、発展させていく上で、新潟県央工業高校、加茂農林高校、三条商業高校の３校がそれぞれの特色を活かし、連携を進めていき、継続して相互の特色づくりにつながるようにしていきたい。
○　三条市で開催されるイベント等が多いので、今後三条市と連携して、情報交換や意思疎通を図っていくことが大切である。
○　次年度、オンリーワン新潟未来プロジェクトをＮＰＯ法人化する計画があるので、今後、定款の作成や設立認証申請書、事業計画書、収支予算書などの設立・登記のための準備を周到に行う必要がある。

セイフティアドベンチャー
（防災キャンプ）

三条マルシェ（商業クラブ）



三条マルシェ（創造ビジネスクラス）

加茂農林高校学園祭

三条商業高校学園祭

三条商業高校学園祭

青少年による座談会（ユーストーク）

奥越明成高校生徒作成のフリーペーパー

観光に関する講演会

オンリーワン新潟未来プロジェクト報告会

加 農 第 3 7 0 号
平成28年３月２日

高等学校教育課長　様

学番　50　加茂農林高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

加茂農林高校（新潟県央工業高校、三条商業高校）
【テーマ】　県央地域に最新未来都市を創造する地域活性化プロジェクト ～ レトロフューチャーからリアルフューチャーへ ～

【目標】

災害に強く、豊かな生活環境を保ち、地域の歴史や文化を守りながらも若者が集い、活気あふれる街を創造し、最新の未来都市、「リアルフューチャー」な都市のイメージを県央地域に創造することを目指し、専門高校生が観光・防災・環境の３つの視点から新たな未来都市作りに資する取組を行う。

【取組の概要】

○　３校による模擬株式会社の設立

３校が学校の垣根を取り払って、模擬株式会社を設立し、事業別の企画課が３校それぞれが持つ特色を取り入れた企画を立案し、各種事業を実施する。

○　教育・学習・体験ツアーの実施

県内外の小中学生・高校生などを対象に、観光・防災・環境の３つの視点を取り入れた「教育・学習・体験ツアー」を企画・立案し、県内外に案内して参加者を募り、高校生ガイドが案内する。

○　地域活性化のための諸活動

観光・防災・環境をテーマにして、地域活性化のための新商品の開発、防災標識の設置、自然ふれあい体験等を展開する。あわせて高校生が発案した企画を、地域企業と連携して、商品開発・販売活動をすることにより企業家教育に結びつける。具体的には各校が連携して、地域住民の方から調査を行い、高校生の視点を取り入れて、地域に適した防災グッズなどの商品開発・販売活動、危険箇所の標識表示や防災リーフレットの作成を行う。

○　地域イベントへの積極的な参加及び開催

三条マルシェ、三条市のイベント等の地域イベントへ３校で連携して参加し、イベントを盛り上げて地域活性化に貢献する。ロボット競技大会や防災フォーラムを開催し、地域に参加をアピールできるよう、３校が連携して、企画価値を高めていく。

【取組の成果】

○　今年度は、三条市が主催するイベントへ３校で参加した。県央地域で活躍されている先輩方たちと意見交換し会場を大いに盛り上げた。また、３校が連携して事業に取り組み、各校が独自に育んできたノウハウを共有し、ＮＰＯ法人の名称を決定し設立に向け取り組んでいる。申請には様々な規制があるため、１つ１つ問題を解決しながら進んでいる。３校それぞれが観光・防災・環境の３つの視点から新たな未来都市作りに向け検討している。

【平成27年度の取組】

1　体験ツアーの試験的取組について

(1) 小学生を招いての田植え、稲刈り、もみすり体験ツアー

本校の生産技術科２年作物コースが加茂市立加茂小学校の５年生を招き１年間を通し、イネ作りをテーマに、体験ツアーを実施した。

①　実施経過

平成27年５月14日(木)　小学生を招き、イネの各部の名称を説明する
平成27年５月29日(金)　小学生と田植えの実施
平成27年７月７日(火)　加茂小学校へ出向き、バケツイネの管理方法の指導
平成27年９月25日(金)　小学生を招いての収穫の実施
平成27年12月15日(火)　小学生と脱穀・もみすり調製・精米作業の実施
平成28年１月29日(金)　加茂小学校でイネの発表会を参観する

田植えの様子

稲刈りの様子

はさ掛けの様子

ポスターを作成し説明

脱穀の指導

もみすりの指導

②　体験後の生徒の様子

小学生と顔を合わせるまでは、生徒も緊張感を持ち自分たちの話を聞いてくれるのか心配した様子が見られたが、回数を重ねるごとにお互いに顔を覚え、笑顔で接する様子が見られた。

脱穀・もみすり調製・精米の実施体験時では、生徒に説明用のポスターを事前作成させ、小学生に対してどうすれば理解されるか考えさせた。最後は、小学校側から発表会に招待され、自分たちが教えたこと以外も調べて発表され、生徒も感心する場面が見られた。今後も継続して取り組みたいという意見が多く占めていた。

(2) 小学生を招いての動物触れあい体験ツアー

加茂市内の小学生を農場へ招き、本校で飼育している動物と触れあいながら、畜産の役割や命の大切さを知ることをできる体験ツアーを２回実施した。

【第１回目】

① 実 施 日　平成27年９月７日(月)

② 対 象 校　加茂市立南小学校１年生32人

③ 体験目的　動物の観察とスケッチ

④ 体験案内における注意点

ア　低学年児童は活発に動き回るため、怪我をさせないよう児童２人に高校生１人が付き添い、手を繋いで案内すること。

イ　アレルギーの兆候が見られたらすぐ外に出すこと。

ウ　トイレの対応を行うこと。

⑤ 小学生に対しての説明内容

ア　どんな動物なのか

イ　どんな物を食べるのか

ウ　体重はどれくらいか

エ　何年生きるのか

オ　母牛の仕事などの基本的なことに加え、最後に産まれた子牛の行く末について説明し、かわいそうだけど人間の為に殺して肉にする。命を頂くから食べる前に「いただきます」と言うことなどを話すことにした。

加茂市立加茂小学校１年生の体験の様子

⑥ 体験案内後の感想(生徒)

実際に案内してみると「なんで牛はウシって言うの？」「なんでモォーって鳴くの？」「なんで角が生えているの？」などの質問が多くあった。高校生にとっては、普通のことでも分かりやすく理解できるように答えるのはとても難しく、答えられないことが沢山あり、小学校１年生に案内する難しさを感じた。

【第２回目】

① 実 施 日　平成27年９月９日(水)

② 対 象 校　田上町立田上小学校３年生32名

③ 体験目的

ア　社会科見学の一環で産業を学ぶこと

イ　畜産とはどういった内容の仕事なのか、また、どの様な仕事内容なのか体験すること

④ 体験案内での注意点

ア　見学者10人に対し高校生６～７人が付き添う。その中の１人が代表して説明し、他はサポートにまわり怪我をさせないように注意すること。

イ　作業体験の採卵、洗卵、パック詰めでは、洗卵機を動かす際に誤って手を挟まないように注視すること

ウ　アレルギーの兆候が見られたらすぐ外に出すこと

⑤　説明内容について

ア　牛、豚、鶏の生産サイクルについて

イ　牛、豚の妊娠期間について

ウ　牛、豚の年間分娩回数について

エ　それぞれの家畜が誕生してから出荷するまでに要する日数について

オ　繁殖種畜として飼育している期間について

カ　日常の管理について

⑥　体験案内後の感想(生徒)

採卵体験は楽しかったらしく、「もっと取りたい！」という児童が沢山いました。また「この牛は牛乳が出ないの？」「どうして白黒じゃないの？」と、牛はホルスタインのイメージが強く、牛乳だけでなく、肉として出荷され食卓にあがる品種もいることを説明しました。

肥育豚舎にいる豚たちは、時期が来たら全て出荷されることを説明すると「かわいそうだ」と言う子も中にはいました。しかし、多くの子が触ってもいい？エサをあげてみてもいい？など好奇心旺盛で、目を離すと走り出すなど元気な子もいてヒヤヒヤしました。

(3) 特別支援学校を招いての果樹収穫体験ツアー

特別支援学校の生徒を招き、普段できない貴重な農業を体験するツアーを実施した。

体験の様子

①　実 施 日　平成27年９月30日

②　対 象 校　新潟県立五泉養護学校高等部

③　体験内容

ア　ブドウを収穫し商品パック詰めまでの体験

イ　クリを収穫しイガから実を取り出し水洗いする体験

④　体験案内後の様子

体験を案内する前は、不安な様子が見られましたが、プログラムを進めていくうちに気持ちがほぐれ、和やかな雰囲気で案内をしていた。また、丁寧に案内していたため、先生方が入る場面が少なく体験案内を終えることができた。お互いにこの体験を通して生徒たちの喜びや自信につながったと思います。

(4) 地元の小学生と保護者を招いての秋の収穫体験ツアー　～ふれあい農園～

加茂市立加茂小学校の児童をと触れ合いながら、農業について興味を持ってもらうため収穫体験ツアーを実施した。

サツマイモ収穫の様子

①　実 施 日　平成27年11月１日(日)

②　参加者数　児童・幼児 22人、保護者 17人、計 39人

③　体験内容

ア　サツマイモとサトイモの収穫体験

イ　レクリエーション(花弁を使用したしおり作り)

サトイモ収穫の様子

しおり作りの様子

参加者の集合写真

④　体験を終えて

参加した地域の小学生や保護者の皆さんに大変喜んでいただき、生徒はやりがいを感じることができた。さらに、生徒一人ひとりが、子供たちにどうしたら農業の面白さを知ってもらい、興味を持ってもらうかを考えて準備に取り組むことができた。当日も運営の難しさや子供と上手に触れ合うことの難しさを知り、次年度の開催に向け課題ができた。

⑤　今後の課題

今後は、加茂小学校以外の小学校とも連携を取れるように規模を広げていきたい。また、生徒たちも事前の計画と準備を丁寧に行い、更に良い農業体験ツアーを改善し、一人でも多くの子供たちに農業について興味を持ってもらうように検討していきたい。

２　地域主催のイベント参加について

(1) 第１回 高校生と先輩たちのユーストーク　～青少年による座談会～

①　日　時　平成27年11月15日(日)　午後１時30分～３時

②　会　場　三条ものづくり学校　多目的ホール

③　主　催　三条市青少年育成市民会議

④　内　容

ア　テーマ「地域の活性化を考える」

高校生が学校や地域で実際に取り組んできた実習、体験などを通して、地域の活性化のためにはどのようなことをしたいのか、どうあってほしいのか。そのためには高校生がどの様な関わりを持てばいいのか。県央の専門系3高校の生徒が夢を語った。

イ　司会進行　大野　まさや(有限会社ナマラエンターテイメント「ジャックポット」)

ウ　トーク出演者

結城　靖博　様(有限会社　魚兵　代表取締役)

星野　達也　様(株式会社　タダフツ)

内山　徳寿　様(内山農園　代表)

栗山　佳明　様(三条商業高校ＯＢ・株式会社　佐藤商店)

加茂農林高校の代表生徒20人・新潟県央工業高校・三条商業高校

三条ものづくり学校(旧南小学校)

パワーポイントによる発表

加茂農林高校の紹介ブース

エ　座談会を終えて

今年度、初めての３校での取組の事業で、参加した代表生徒は、専門高校で学んでいる内容についてパワーポイントで報告し、地域の先輩たちからアドバイスや質問を受けた。また、会場内に地域の先輩たちそれぞれのブースあり、生徒たちは自由に回りながら先輩たちから話を聞く時間も設けられた。地域の伝統産業などを改めて知ることで新しい発見が生まれ、このプロジェクトで取り組もうとしている新たな未来都市作りに大きな刺激となった。

【総合所見】

○　本校では農場を観光できる農場とし、生徒が案内役となり展開していきたいと考えている。

○　これまでも本校は、地域の保育園、幼稚園、小学校等を対象に動物の飼育や農産物の生産に関わる一部を体験的にできるプログラムを実施してきたが、今後はそのノウハウを活かし、教育的に学習できる体験内容に充実させていきたい。

○　案内役の生徒たちもどのような体験プログラムにしたらよいのか、また、農業の楽しさ、喜びを伝えるにはどう対応すればよいのか次年度への課題としている。

○　さらに　次年度以降、農場で生産された農畜産物を３校連携の地域イベント等でも積極的に販売を行い、県央地域の活性化に向けて取り組んでいきたい。

吉　高 第 255 号
平成28年３月２日

高等学校教育課長　様

学番 47　吉田高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

吉田高校
【 テ ー マ 】　燕市の明るい未来を担う人材の育成
【 目　　標 】 1　吉田高校の文系・理系・情報ビジネス・健康体育・文化教養の５つのコースにおける活動を活性化させ、その教育内容を地域に情報発信する。 2　チームの中で自分の役割を見つけ、考えたり行動することができる力を育成する。 3　体験や学びを通して自尊感情を高め、生涯にわたって能動的に学び続ける力を育成する。
【取組の概要】 ○　燕市教育委員会、燕商工会議所、吉田商工会、燕市観光協会、社会福祉協議会との連携 ○　酒呑童子行列や桜フェスティバルなど燕市観光協会主催行事におけるボランティア活動 ○　インターンシップなど就業体験の準備 ○　文系コース　理系コース 上級学校の講師による特別講義 ○　健康体育コース 県内アスリートによる体育実技講習と進路講話 ○　文化教養コース 赤ちゃん交流会、高齢者疑似体験、地域の食と文化を学ぶ講座の実施 ○　情報ビジネスコース 同窓会との連携による地元企業見学 ○　その他 進路講演会、進路講話の実施 【総合所見】 1　吉田商工会、燕市観光協会など地域機関と連携した活動を行うことで、地域の特性、特色について生徒が学ぶ良い機会となった。また、教職員にとっても開かれた学校への地域の切実な期待、要望を知る貴重な機会となった。本事業の取組を教員の意識改革、授業改善の取組へとつなげることが次年度以降の課題である。 2　文系、理系、健康体育、情報ビジネス、文化教養の５コースがそれぞれ特色ある取組を行うことで、目標に掲げた各コースにおける活動の活性化が十分に図られた。次年度は各コースの取組を学校全体の取組に関連させていくことが課題である。 3　各活動後に行うアンケート結果では、今年度の各事業が「進路や将来を考える上で役に立つ」と答えた生徒の割合が高かった。興味や関心の幅を広げ、自己の適性や職業についての意識を高めていくような体験活動を継続していく。

【取組の成果】

1　観光協会主催行事におけるボランティア活動

(1) 目的

地域を知り、異世代と交わることで、コミュニケーションの望ましいあり方を考えるとともに奉仕活動を通して自己肯定感を育む。

(2) 内容

桜フェスティバル(４月11日　吉田ふれあい広場)、酒呑童子行列(９月28日　道の駅国上)において事前準備、イベント当日の受付、フェイスペイントコーナーの運営、会場設置と撤去などの運営ボランティアを行った。

(3) 実施後アンケート結果(とても：４、まあまあ：３、あまり：２、全く：１)

質問項目	4	3	2	1
この取組について先生から初めて聞いたとき興味を持ちましたか	60%	40%	0%	0%
自分に与えられた仕事への取組は満足できるものでしたか	80%	20%	0%	0%
活動は楽しかったですか	80%	20%	0%	0%
地域行事について興味関心は高まりましたか	80%	20%	0%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	60%	40%	0%	0%

(4) 生徒感想

○　酒呑童子伝説など地域の言い伝えについて、少しは勉強していったつもりだったがお客様の質問に答えられず地域についてもっと学ぶ必要があると感じた。

○　もっとたくさんの高校生が活躍できる場があるとさらにイベントが盛り上がると思う。

○　出された指示には従えたが自分たちで考えたり工夫して何かをやることが少なかった。

○　ただ指示を待つだけでなく自分たちで考えて動けるようにならなければならない。

鬼姿の高校生がＰＲ

燕で27日、酒呑童子行列

燕市分水地区の酒呑童子伝説をモチーフにしたイベント「越後こがね山酒呑童子行列」が27日、同市の道の駅国上周辺で開かれる。今年は地元高校生が「伝説」による酒呑童子は鬼姿スタッフに加わりPRを強化。行列参加者にはスプーンを掲げて金銅作食器産業をアピールしてもらう。

イベントで酒呑童子行列を事前PRする高校生らＩ29日、燕市

分水地区生まれ、外遊びという名の美しい自年だったが、国上寺で修じていた際、喰たちの恐怖を無視したため鬼になったとされる。

イベントは国観光協会などでつくる実行委員会の主催で、11回目。高校生はこれまでも外遊び役として参加してきたが、今回は事前に約30人がスタッフとして鬼メークを考案したり、各種イベントでのPR活動に協力したりした。

平成27年９月３日　新潟日報

2　文系コース特別講義(平成28年２月29日)

(1) 目　的　　自分達一人一人が世界を構成する一員であり世界とつながって生きていることを認識し、将来の生き方について考える機会とする。

(2) 講　師　　和田　直
(JICA新潟デスク新潟県国際協力推進員)

(3) テーマ　　世界が１つの村だったら

(4) 内　容　　青年海外協力隊員として西アフリカで活動をした体験を聞き、「世界が１つの村だったら」のワークショップに参加する。

(5) 実施後アンケート結果(とても：４、まあまあ：３、あまり：２、全く：１)

質問項目	4	3	2	1
この取組について先生から初めて聞いたとき興味を持ちましたか	35%	52%	12%	1%
活動は楽しかったですか	30%	59%	11%	0%
自分が世界とつながって生きているという認識が持てましたか	45%	50%	5%	0%
国際交流や異文化を体験することに興味関心は高まりましたか	32%	58%	10%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	26%	55%	18%	1%

(6) 生徒感想

○　今、自分が当たり前にやっていること、出来ていることに感謝しないといけないことがよく分かった。
○　当たり前のように読み書きができること、毎日おなかいっぱいご飯を食べられることに感謝しないといけない。
○　100人のうちの栄養が十分ではない14人と今にも死にそうな１人のために何か出来ることはないかこれから考えていきたい。そしてそのために行動したい。
○　世界には色々な国があり、様々な暮らしがある。自分の知らないこと、経験したことがないことを拒絶するのではなく、「面白いね！」と言えるようになりたい。
○　特別な資格がなくても海外青年協力隊で出来る仕事があることが分かった。

３　理系コース特別講義（平成28年２月29日）

(1) 目　的　　自分達の暮らしを豊かにし、食と環境を支えてきたバイオテクノロジーの概要を知るとともに、世界規模の環境問題について考える機会とする。
(2) 講　師　　重松　亨
（新潟薬科大学応用生命科学部　教授）
(3) テーマ　　食と環境を支えるバイオテクノロジー
(4) 内　容　　微生物を利用して生ゴミを天然ガスに変換する「メタン発酵技術」の研究の最先端についての講義を受け、本校の卒業生の成果について知る。
(5) 実施後アンケート結果（とても：４、まあまあ：３、あまり：２、全く：１）

質問項目	4	3	2	1
この取組について先生から初めて聞いたとき興味を持ちましたか	28%	59%	10%	3%
豊かな生活がバイオテクノロジーに支えられていることが理解できましたか	48%	48%	4%	0%
地球規模の環境問題について関心が高まりましたか	41%	41%	18%	0%
吉田高校の卒業生の成果について興味を持ちましたか	48%	45%	7%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	35%	48%	14%	3%

(6) 生徒感想

○　微生物が現代の食や環境に大きな影響を与えていることがよく分かった。
○　新しい技術の開発についての話が興味深かった。
○　何かに興味を持って日々を過ごすことが大切だと分かった。
○　大学に進学してから研究してみたいテーマだった。

４　健康体育コース特別講義（平成27年12月８日）

(1) 目　的　　県内のアスリートに直接指導を受けることで生涯にわたってスポーツに親しむ気持ちを育み、講話を通して困難を乗り越え目標を実現する尊さを学ぶ。
(2) 講　師　　青柳　勧（新潟産業大学　柏崎ブルボンウォーターポロクラブ）
(3) 内　容　　水泳実技指導及び進路講話「私の水球人生」
(4) 実施後アンケート結果（とても：４、まあまあ：３、あまり：２、全く：１）
＜水泳実技指導について＞

質問項目	4	3	2	1
この取組について先生から初めて聞いたとき興味を持ちましたか	64%	27%	9%	0%
自分の授業での取組方は満足できるものでしたか	69%	31%	0%	0%
活動は楽しかったですか	80%	20%	0%	0%
水泳について興味関心は高まりましたか	58%	38%	4%	0%

＜進路講話について＞

質問項目	4	3	2	1
興味を持って聞くことができましたか	76%	24%	0%	0%
スポーツや健康について興味関心は高まりましたか	73%	27%	0%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	71%	29%	0%	0%

(5) 生徒感想

＜水泳実技指導について＞

○　水泳では、自分の苦手なところを改めて知ることができた。

○　分かりやすい説明と、上手な見本でよいイメージを浮かべることが出来た。

＜進路講話について＞

○　今回のような実技指導や講話を毎年やってほしい。

○　プロスポーツの厳しさが分かった。

○　夢を叶えるのは、叶えたいと強く思うか否かだと思った。

○　好きなこと得意なことを続けることが大切だと分かった。

○　高校生活では夢に向かって少しずつ小さな工夫を積み重ねていくことが大事だと思った。自分でも小さな事の積み重ねならば出来そうだと思った。

○　夢を見つけるのも、自分自身で努力しなければならないと分かった。

○　行動力を身に付けるためには、いつも「今の自分」と比較していくことが大切だと思った。

５　文化教養コース

【赤ちゃん交流会（平成27年９月９日、14日）】

(1) 目　　的　地域の、赤ちゃんを持つ親や保育の仕事に携わる方との交流を通して子育てのイメージを膨らませ、将来親になることを肯定的に受け入れる土台作りをする。

(2) 協力団体等　更生保護女性会、地域児童館・研修館、地域在住保健師・助産師

(3) 内　　容　赤ちゃんやお母さんお父さんとの交流、助産師による性教育講話

(4) 実施後アンケート結果（とても：４、まあまあ：３、あまり：２、全く：１）

質問項目	4	3	2	1
この取組について先生から初めて聞いたとき興味を持ちましたか	70%	20%	10%	0%
自分に与えられた仕事への取組は満足できるものでしたか	73%	24%	3%	0%
活動は楽しかったですか	90%	7％	3%	0%
保育について興味関心は高まりましたか	67%	30%	3%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	73%	17%	10%	0%

(5) 生徒感想

○　赤ちゃんを育てるのは大変だと思ったがやりがいのあることだと思った。

○　今まで赤ちゃんとふれあえる場がなかったが授業の間にたくさんの赤ちゃんとふれあえてさらに赤ちゃんが好きになった、楽しかった。

○　保育について前よりも興味がわいた。

○　お母さんと会話が進んでいろんな話が聞けた。

○　赤ちゃんとあそんでいるうちに楽しくなって笑顔で接することができるようになった。プレゼントを喜んでくれてよかった。

○　手遊び歌も緊張せずに楽しくできた。また交流会をしてみたい。

○　小さい子と、どのようにふれあうか不安だったが、楽しくふれあえた。

【地域の食と産業を学ぶ講座（平成27年12月9日、14日）】

(1) 目　　的　地域に受け継がれてきた伝統料理について学ぶことで自分達が住む地域についての理解と愛着を深めるとともに、地域特産品の情報発信についても学ぶ。

(2) 協力団体　吉田商工会青年部

(3) 内　　容　吉田商工会青年部の方（８名）を講師に、県内各イベントで吉田地域の特産品としてＰＲされている「鶏肉のレモンあえ」を調理する料理講座を行う。さらに商品開発、情報発信のあり方についての職業講話も実施する。

鶏肉のレモンあえ

ご当地の味広がれ

吉田高で調理実習と講話

燕市の吉田商工会青年部は9日、吉田地区の新たな名物として売り出している「ご当地グルメ」鶏肉のレモンあえ」について知ってもらおうと、吉田高文化教養コースの2年生15人に調理実習＝写真＝と職業講話を行った。

鶏肉のレモンあえは、1981年に旧吉田町に赴任した栄養士の女性が学校給食の献立に取り入れたのをきっかけに、地元で広く愛されている。同商工会青年部がご当地グルメとして発掘し、4年ほど前からイベントなどで販売している。

この日は、同青年部の渡辺浮一部長（37）が「吉田地区は名物が少ないので何とか盛り上げたかった」と取り組みのきっかけを説明した。昨年、弥彦村で開かれた「国際ご当地グルメグランプリ」で審査員特別賞を受賞。今年は7回のイベントで計3千食を完売するなど、知名度も徐々に上がっているとした。

その後、生徒たちは渡辺部長らの指導で調理実習。レモン汁としょうゆなどを合わせたたれに、揚げた鶏肉を漬け込み、甘酸っぱいレモンあえを仕上げた。

2年生の今井夏落汰さん（17）は「学校給食で食べたことがあり、同じ味でびっくりした。人気が出ると思う」と喜んでいた。

平成27年12月11日　新潟日報

(4) 実施後アンケート結果
（とても：４、まあまあ：３、あまり：２、全く：１）

質問項目	4	3	2	1
この取組について先生から初めて聞いたとき興味を持ちましたか	59%	35%	6%	0%
自分に与えられた仕事への取組は満足できるものでしたか	72%	28%	0%	0%
活動は楽しかったですか	83%	14%	3%	0%
地域の食文化について興味関心は高まりましたか	62%	35%	3%	0%
地域の産業について興味関心は高まりましたか	52%	45%	3%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	52%	45%	3%	0%

(5) 生徒感想

○　楽しく活動でき、おいしい料理も出来、地域についてまた一つ知ることができうれしかった。

○　積極的に活動に取り組めた。

○　友達と協力して楽しく作ることが出来た。

○　鶏肉のレモンあえという身近なものから近隣の文化について知ることが出来た。

○　商工会の方の話を聞いて、地域おこしは大変なんだなと思った。

６　情報ビジネスコース地元企業見学（平成28年２月24日）

(1) 目　　的　地元企業の見学を通して、時代の変化に対応した企業のスタイルや仕事について理解を深める。

(2) 協力企業　重川材木店

(3) 内　　容　地元企業を訪問し事業内容等について学び、同窓生でもある経営者の重川隆廣さんの職業講話を聞き、身近なモデルである同窓生から社会人としての生き方を学ぶ。

(4) 実施後アンケート結果（とても：４、まあまあ：３、あまり：２、全く：１）

質問項目	4	3	2	1
この取組について先生から初めて聞いたとき興味を持ちましたか	13%	57%	17%	13%
活動は楽しかったですか	44%	44%	12%	0%
働くことの意義について考えが深まりましたか	17%	61%	22%	0%
地元の産業について興味関心は高まりましたか	17%	61%	22%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	22%	57%	21%	0%

(5) 生徒感想

○　雇用する側の考え方を聞くことができました。どんなことが社会人には求められるのかなど、教えていただいたことを参考にして学校生活を送り、自分の将来の職業を決めていきたいと思いました。

○　モデルハウス見学が大変楽しかった。社長の講話で「初心に戻る」という言葉がとても印象に残った。何かに取り組むうえで大切なことだと思った。

○　今まで、あまり自分に自信が持てなかったが、努力することでいろいろな道が拓けるのだということが分かり、真剣に将来のことを考えてみようと思った。

7　活動内容の情報発信

【学校だより「熱と気魄」１０月特別号】

熱と気魄
（吉田高校だより10月特別号）
（第８号　平成 27 年 10 月 23 日発行）
吉田高等学校　校長　渡辺　欣彦

当校ホームページ（ http://yoshida-hi.n-city.net/ ）アクセスお待ちしております。

頑張ってます！！　オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト

進路講演会　講師:今井美穂さん(地域活性化モデル)

10 月 21 日(水)、テレビ番組ダイばん！のコメンテーターなどでおなじみの地域活性化モデル今井美穂さんを講師に進路講演会を行いました。「地域活性化モデルの挑戦」をテーマに、普通の女の子が企業に至った思いや経緯、地域と若者のつながりなどについて 80 分間の話をしていただきました。「自分のやりたいことが職業にあてはまらないこともある。でも職業を作り出すことは可能である」「チャンスをつかむのは運ではなく、見つけようとする努力」など熱いメッセージを吉高生に送ってもらいました。

感想（３年生女子）　人はきっかけや出会いでいくらでも変われるという事が分かった。自分と少し当てはまる話もありすごく共感できた。今井さんの新潟への情熱が伝わるお話で、将来を考える上ですごく参考になり、今井さんのような考え方が出来る人になりたいと思えた。人との出会いで色々な道が拓けることを意識して人と接していきたい。今井さんの発想はとても面白いし、すてきだなと思いました。

高齢者疑似体験授業(家庭科:生活と福祉)

10 月 13 日（火）、燕市社会福祉協議会様に協力を頂き、文化教養コースを対象に高齢者疑似体験授業を行いました。ゴーグルなど装具を身に付け高齢者の苦労を実際に体験してみました。「不便さや怖さなど高齢の方の大変さが分かった」「お金を取り出すなど細かい作業がこれほど大変と思わなかった」など体験することで、生徒は今までよりもっと気遣ってあげたいという気持ちを持てたようです。

行事予定
10 月 26 日（月）健やか歯ぐき研修会
10 月 31 日（土）吉高祭（文化祭）
11 月 2 日（月）代休日

地域に開かれた学校を目指して吉田高校の取組を定期的にご紹介します
担当教頭　石積　希
電話　0256（93）3225
FAX　0256（93）5455

【英語版】

熱と気魄
(Yoshida High School News)
(2015　October 23)
Watanabe Yoshihiko　Principal, Yoshida High School　HP (http://yoshida-hi.n-city.net/)

Only　One　School　Niigata　Mirai　Project

Lecture on Future Course　Lecturer:Miho Imai (Fashion Model)

A Lecture on future course was held On October 21. The lecturer was Imai Miho, a fashion model, who is trying to liven up the local communities. She is called ' *Chiiki kasseika Model* ' and appears on TV program, ' Daiban !' as a commentator. She talked about what motivated her to be an entrepreneur and desirable relationship between young people and local communities where they have been brought up. Students got her encouraging message : " What you get interested in won't necessarily be related to your future jobs. But you can create occupations." " You owe your success to your effort, not luck."

Students' writing of impression

I understood that encounter can change our lives. I don't believe that Ms. Imai changed from shy to outgoing after graduating high school. I felt great sympathy for her story. Her lecture encouraged me to think about my future course.

Simulated Experience of the Aged

The students of the home economics course had simulated experience of being aged in cooperation with Tsubame Council of Social Welfare. Students wore simulated experience implement such as goggles and experienced the hardship of the aged. Some students said " We've never imagined how hard it is for the aged to do delicate works such as picking up small coins in the purse. " Students came to know they should be more considerate to the elderly.

School Calendar
November 11～13　Open School
November 19　Election of Student Council Representatives
November24～ Term Exam (2nd Graders)

We introduce our educational activities to make school administration open to the local community.
Editor : Vice-Principal　Motomu Ishizumi
Telephone:　0256（93）3225
FAX　:　0256（93）5455

○　活動の内容を定期発行の学校だよりで紹介し、燕市、三条市、新潟市などの近隣中学校へ郵送するとともに、学校のホームページにも掲載した。

○　観光協会、吉田商工会などの協力団体に、広報誌やテレビなどで吉田高校の活動を紹介していただくときには「オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト」の取組であることを強調してもらうように依頼した。

○　学校評議員会、地域の声を聞く会、公開授業、中学生体験入学などでは学校だよりを配付して取組についての周知を図った。

谷西高 第 213 号
平成28年３月１日

高等学校教育課長　様

学番　52　小千谷西高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

小千谷西高校
【テーマ】　地域の未来を切り拓く人材育成 **～地元とのコラボレーションによる「オヂヤモデル」の構築～**
【目標】 ○　小千谷の地において、小千谷西高校を核として、地元自治体、関係団体、企業等、地域の主要な各プレイヤーと連携した教育活動を行い、当該地域の未来を切り拓く人材育成プログラムを構築するとともに、その円滑な実施に努める。 ○　こうした活動の成果を発表する機会を通じて、地域の各小・中学校において行っている職場見学・職場体験等はもとよりキャリア教育全般について理解を深め、地域内での小・中・高一貫したキャリア教育を展開する。 **【取組の概要】** ○　地元企業での職場実習を授業に取り入れた人材育成プログラムの確立 ・学校設定科目「キャリア実習」の定着と、これまでの業種に加えた新たな分野の開拓(新規受け入れ企業等開拓)　※　女子生徒の受け入れを念頭に置く。 ・メカトロニクス系列や機械部におけるこれまでの地域連携取組の一層の充実 ・工業科以外の教科における地元とのコラボレーションの可能性の追求と実践 ○　総合学科の特色をＰＲするためのイベントを市と連携して開催 ・年度末に、市内５中学校の２年生約320人を対象とした、総合学科である小千谷西高校での教育活動の成果発表会を開催する。 ・具体的には、キャリア実習、地域と福祉、他教科及び部活動を含む他の教育活動におけるキャリア教育関連取組について高校生が発表し、受け入れ企業様からの講評をいただく。 **【取組の成果】** ○　様々な科目を有する小千谷西高校において、授業をはじめとした教育活動全体の一層の特色化を進めた。また、地域の小・中学校におけるキャリア教育を理解することで、産業社会と人間や総合的な学習の時間等、ガイダンス的要素を持つ教育活動の工夫・改善につなげる必要性について職員の機運醸成を図った(総合学科における「おぢやモデル」)。 ○　中学校３年０学期と言える２月に将来を見据える活動を行うことにより、一層主体的な進路選択が可能となることから、小千谷市・小千谷市教育委員会とともに「おぢやしごと未来塾」を初開催した(小・中・高一貫した早期からのキャリア教育における「おぢやモデル」)。 ○　地域企業等においては、高校生受け入れ等の活動が、当該生徒(高等学校)に対する取組にとどまらず、地域の未来を担う中学生や高校生にひろくアピールする機会となることを「おぢやしごと未来塾」や「キャリア実習取組成果発表会(校内)」の開催により具体化した(地域の未来を切り拓く人材育成における「おぢやモデル」)。

【取組の成果(詳細)】

1　「地元企業での職場実習を授業に取り入れた人材育成プログラムの確立」について

(1) 科目「キャリア実習」(教科：産業社会)の取組

ア　科目の概要

○　地域の企業等と連携し、授業時間において、長期間にわたり企業等での現場実習を行うことにより、生徒の勤労観や職業観を養い職業意識を高めるとともに、地域産業の発展に貢献することのできるより実践的な技術や能力を身に付けさせることを目的とする科目である。

○　授業時間は火曜日の５・６限、年間のスケジュールは次のとおり。

４月～５月　校内指導、意識付け、実習先決定、企業への事前訪問

６月～11月　企業での実習(毎週火曜日13:30～17:00　約15回)

12月～３月　校内指導、報告書作成、報告会

○　学校から事業所への生徒の移動手段は、原則として、登下校時の交通手段(徒歩、自転車、バス、電車など)。

※　遠距離の場合は本事業によりタクシーを利用。

○　この科目は長期デュアルシステムの一形態である。

イ　これまでの経緯

○　平成24年度に、地域密着型長期デュアルシステムの導入をめざし、企業等における現場実習の在り方について調査研究を行うとともに、小千谷市、小千谷商工会議所、小千谷鉄工電子協同組合等、関係する皆様とご相談させていただきながら、実施に向けて準備を進めた。

○　平成25年度に、教科「工業」の科目「工業技術基礎」を選択した７人を対象に試行した。

○　平成26年度より、教科「産業社会」の科目「キャリア実習」として教育課程に位置づけ、この科目を選択した８人が、各企業等において実習を行った。

○　平成27年度は、この科目を18人が選択し、実習を行った。

ウ　ＦＭ番組出演(H27.11.13)

○　キャリア実習選択生徒２人が、FM-NIIGATAおぢやファンファンCHANNELに出演し、「メカトロニクス系列」や「キャリア実習」についてお話しした。

エ　おぢやしごと未来塾の開催(H28.2.2)

○　このイベントの核として、キャリア実習の選択者４組が、市内中学校２年生約320人を対象に取組成果を発表した。あわせて受入企業の方から講評と中学校２年生へのメッセージをお話しいただいた。

オ　キャリア実習取組成果発表会・地域の声を聞く会(兼学校評議員会)の開催(H28.2.9)

○　キャリア実習の成果発表会は、これまで次年度選択生徒を対象に実施してきたが、今年度より１年次生全員を対象とするとともに、地域の声を聞く会(兼学校評議員会)を同時開催することにより、受入企業のみならず地元行政関係者や学校評議員等より幅広く参加していただくこととし、取組成果や地元企業の紹介をより多くの方に理解していく機会に改めた。

(2) 科目「地域と福祉」(教科：家庭)の取組

ア　科目の概要

○　地域福祉の理念や現状、今後の課題を理解するとともに、社会福祉の理念や制度、高齢者や障害者について学び、さらにコミュニケーションの方法を身に付けるため、地域生活で実践的・体験的に学ぶことを目的とする科目である。

○　６月以降、小千谷市内の福祉施設等４カ所において実習を行い、高齢者や障害者の生活やその支援の在り方、また、地域社会で共に生きることについて考察を深めた。

イ　おぢやしごと未来塾の開催(H28.2.2)

○　この科目の選択者１人が、市内中学校２年生約320人を対象に取組成果を発表した。また、小千谷市社会福祉協議会の方から講評と中学校２年生へのメッセージをお話しいただいた。

(3) 科目「ファッション造形」(教科：家庭)の取組

ア　科目の概要

○　被服の構成を理解するとともに、デザインや着用目的に適した被服材料を選択し、実践的な被服製作ができるようにすることに重点を置く。また、小千谷縮などの伝統工芸に触れ、織物の製造工程についての知識も深めることとしている。

○　11月、小千谷市織物同業協同組合の体験工房である織之座において、機を用いて、あらかじめ染められたよこ糸の柄を慎重にあわせながら織っていくかすり織体験を行った他、小千谷縮の歴史を学んだ。

○　１月、自ら制作した浴衣の着付け体験を行った。会場は小千谷市総合産業会館サンプラザの和室。11月にもお世話になった小千谷市織物同業協同組合の職員様より浴衣の着付け指導をしていただいた。

イ　おぢやしごと未来塾の開催(H28.2.2)

○　この科目の選択者２人が、市内中学校２年生約320人を対象に取組成果を発表した。また、小千谷織物同業協同組合の方から講評と中学校２年生へのメッセージをお話しいただいた。

(4) 科目「美術Ⅰ」(教科：芸術)の取組

ア　科目の概要

○　感性を高め、創造的な表現能力を伸ばすことなどを目的とする科目である。

○　この科目において「西脇順三郎プロジェクト」と題して切り絵の制作を行った。当校の校歌の詩は、小千谷で生まれた偉大な詩人であり、ノーベル文学賞の候補ともなった西脇順三郎先生によるものある。この校歌のフレーズから生徒が感じ取ったイメージを、切り絵によって表現した。

イ　小千谷市総合産業会館サンプラザでの展示(H28.1.12～1.26)

○　本事業の取組成果として、生徒が制作した切り絵30点を展示し、多くの市民の方にご覧いただいた。

(5) 科目「コマーシャルカリグラフィー」(教科：芸術)の取組

ア　科目の概要

○　伝統的な書作品や現代の様々な芸術作品の表現方法を学び、「商業書道」の表現方法を工夫する科目である。郷土の文化や産業をテーマとするため地域との連携を図ることとしている。

○　今年度は、平成27年８月に開催された「おぢやまつり」の画像に、生徒がフレーズを書き込み、ポスターとして制作することとした。

○　ポスターの画像素材は小千谷観光協会様より提供いただいた。

○　外部講師として地域のデザイナーの方より10月と１月の２回、指導・助言をいただいた。

イ　小千谷市総合産業会館サンプラザでの展示

○　本事業の取組成果として、生徒が制作したポスター９点を展示し、多くの市民の方にご覧いただいた。　※　この展示により作品１点が小千谷警察署発行広報紙の表紙に採用された。

２　「総合学科の特色をＰＲするためのイベントを市と連携して開催」について

(1)　当初の構想（６～10月）

○　本事業の実施が決定した６月、当校の科目「キャリア実習」の取組成果発表会を軸に、対象を小千谷市内中学校５校の２年生約320人を対象として実施すべく、小千谷市・小千谷市教育委員会・小千谷市立中学校校・関係団体にコンセプトを説明し、理解を得た。

○　また、中学生の主体的な進路選択を一層促すことを目的として、当校の取組発表だけでなく、市内に設置されている二校のうちの一校であり、普通科である小千谷高等学校の取組（文系・理系）も発表することについて小千谷高等学校の了解を得た。

○　その後、９月に日程や会場を決定、10月に市・市教委・中学校・関係団体等関係者に対し詳細計画の説明を行うなど、徐々に計画を具体化した。こうした中、当校の企画に大きく賛同していただいた小千谷市・小千谷市教育委員会より、地方創世や地元定着等の狙いも盛り込むため、イベントの規模拡大について申し出を受けた。

(2)　「おぢやしごと未来塾」の開催（11～２月）

○　小千谷市（企画政策課・商工観光課）並びに小千谷市教育委員会（学校教育課）からの申し出の内容は次のとおりであった。

①　当初の企画に加え、中学生が市内企業の理解を深める機会とするため、ブースや体験コーナーを設ける。なお、中学校１年生も企業ブース見学に参加する。

②　上記①に伴い、会場は小千谷市総合体育館とすること、中学生の移動に係るバス手配、出展企業との調整等は小千谷市・小千谷市教育委員会が行うこととし、当初の企画である高校生の発表については小千谷西高校が担当することとする。

③　本イベント実施に係る調整の総括は小千谷市企画政策課の担当係長が行うこととする。また、全体のコーディネート・当日設営および運営は小千谷市予算によりFM-NIIGATAに委託することとする。

○　この申し出は当校としても非常にありがたいものであり、快諾した。３年後くらいの実現をイメージしていたことが、一気に初年度に実現することとなった。

○　11月以降、イベント実施に向け、当校にて３回に渡って打ち合わせを行った。

○　当日は、30の企業・団体が出展し、市内中学校１年生約280人と２年生約320人が参加、当校の発表者６組と小千谷高校の発表者２組がそれぞれの取組成果を発表するイベントとなった。

３　その他

(1)　部活動「機械部」の取組

○　平成27年９月20日、当校機械部が、Honda エコ マイレッジチャレンジ2015 第35回全国大会に、３年連続で出場した。※　グループⅡ（高校生クラス）にエントリー。

○　今年のマシンは、昨年のマシンをベースに、課題を克服するため生徒達がエンジンパーツや外装などを改良して仕上げた。

○　車体やエンジンの一部は、小千谷の鉄工と電子の両産業を担う人材育成の場として設けられた「テクノ小千谷名匠塾」にて製作した(H25･26年度)。

○　ドライバーは、初心者の１年生女子が担当した。わずかな走行練習しかできなかったが、本番では、暑さの中「燃費を向上させるためにいろいろ考えながら」約38分間を走りきった。

○　燃費は382.011km/ﾘｯﾄﾙ、順位は62位(エントリー141台、完走89台)で、出場した県内高等学校の中でトップであった。

(2) インターンシップの実施状況

○　夏季休業中に、小千谷市商工観光課の協力を得て、全学年の生徒の希望者を対象に、市内の企業等において２～４日のインターンシップを実施している。

○　平成27年度は10社において、19人が参加した。

○　今後は幼児教育関係等、これまでになかった業種についても新規に開拓することとしている。

(3) 先進校等視察（３校）

①　新潟県立新発田高等学校（スーパーサイエンスハイスクール指定校）

○　平成27年12月16日、「ＩＣＴ活用(SS英語Ⅰ)及び英語活用(マレーシア研修報告会)」公開授業を視察した。

○　ＩＣＴ活用(SS英語Ⅰ)について、数列を内容とするＩＣＴ機器を活用した授業を参観した。英語教諭が数列を扱うことから準備が大変だったそうだが、英語による数学の思考、判断、表現をミックスした良い授業であった。

○　マレーシア研修報告会について、理数科２年生、５人前後の８グループによる発表であった。対象は、理数科１年(次年度マレーシア研修実施)、保護者、来賓・参観者であった。１年生に見せることは当校でも計画しているとおりである。保護者を招待することについては、発表者数及び人数の関係から、本校では難しいと感じた。

○　全体について、運営はＳＳＨ推進委員会が主体であり、よく機能していた。扱うテーマは、ＳＳＨとキャリア教育で異なるものの、今後の本校のキャリア教育推進において、新発田高校をはじめ他校の取組状況が大いに参考になると感じた。

②　大分県立日田三隈高等学校（総合学科）

○　平成28年１月22日、「第18回総合学科公開発表会」及び「第６回30歳のレポート発表会」を視察した。

○　在校生の学習成果の発表内容は次のとおりである。

　１年生：産業社会と人間「この人に学ぶ」発表

　２年生：PAS Second「夏の活動　インターンシップ」発表

　３年生：PAS Third発表

○　「30歳のレポート」では、日田三隅高等学校の総合学科第６期生がレポート発表するもので、長期的な視点による総合学科教育の検証、更には高校教育における「卒業後の追指導」に繋がるものであった。

③　筑波大学附属坂戸高等学校（総合学科、スーパーグローバルハイスクール指定校）

○　平成28年２月18日・19日、「総合学科が育むグローバル人材～ Next two decades これからの20年で総合学科が日本の教育に果たす役割～」を主題とする「第２回ＳＧＨ研究大会・第19回総合学科研究大会」を視察した。

○　分科会では、「総合学科20年の歩みとキャリア教育」に参加し、坂戸高等学校で平成25年度から取り組んでいる「キャリア教育の検証プロジェクト」の内容が報告され、普通科でも必修化が検討されている高等学校におけるキャリア教育の在り方が提言された。また、総合学科の設立段階からこれまでの変遷を振り返り、今後の総合学科の在り方が討議された。

⑷ キャリア教育に係る当校全体計画の再構築

○　平成27年度第２回キャリア教育委員会(校内)において、平成28年度に３年間を見通したキャリア教育の再構築(再確認・再定義)を行うことについて確認した。その際、進路指導部とも連携しながら、これまでの取組を総括するとともに、今後の当校のあるべき姿の実現につながる全体計画を策定する方向性について確認した。

○　なお、小千谷市内小・中学校におけるキャリア教育の取組状況を把握しながら、小・中・高一貫したキャリア教育を展開することに配慮することとした。

【総合所見】

１　「地元企業での職場実習を授業に取り入れた人材育成プログラムの確立」について

⑴ 科目「キャリア実習」

○　平成24～26年度のオンリーワンスクール・ステップアップ事業のもと、科目「キャリア実習」を充実・発展させてきた。平成27年度においても、選択者の増加に伴って新規開拓を進め、校内はもちろんのこと小千谷市内においても認知度が向上しているところである。

○　今後も引き続き、女子の受け皿となる企業やこれまで依頼していない企業等、新規開拓に努めることとしている。その際、生徒の移動について、学校から遠方の実習企業までの移動においては、オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトによりタクシー代を措置していただいたので大いに助かっているところである。

⑵ 上記⑴以外の科目等

○　平成27年度、芸術科や家庭科の科目において、これまでの取組を踏まえつつ、地域の施設や外部講師、その他地域の教育資源をこれまで以上に活用した取組を進めた。

○　当校では、科目「産業社会と人間」、「キャリア実習」、総合的な学習の時間、希望者対象のインターンシップ等においてキャリア教育を推進しているところであるが、日常の授業において、それぞれの科目の学習指導要領の趣旨を踏まえつつ地域の伝統や文化等について理解を深めることは重要であることから、来年度以降も引き続き地域の教育資源を開拓することが課題であり、新たな科目においてもこうした取組を進めることとしている。

２　「総合学科の特色をＰＲするためのイベントを市と連携して開催」について

⑴ おぢやしごと未来塾

○　事業初年度にして中学校・高等学校・行政・企業や団体が関わった「おぢやしごと未来塾」を開催することができた。今後は、今年度の反省を踏まえつつ、関係者の意向を尊重して今年度以上に参加者すべてが「win,win,win…」の関係となるべく開催することが課題となる。

○　様々な団体が、より参加しやすく、かつ継続して実施するのに最もふさわしい規模・内容・形態・実施主体を検討する必要がある。

３　その他

⑴ 授業以外の取組

○　これまで取組を行っている機械部はもちろんのこと、地域の教育資源を活用した取組を一層充実させるべく、どこでどのような活動ができるのか、可能性を探る必要がある。

⑵ キャリア教育の全体計画の構築

○　当校におけるキャリア教育の様々な取組を系統的に示すキャリア教育の全体計画を再構築する必要がある。その際、地域の小・中学校の取組や企業・団体の取組について情報収集を行い、小千谷の地における一貫したキャリア教育の構築を心がける必要がある。

塩商工第267号
平成28年３月１日

高等学校教育課長　様

学番　58　塩沢商工高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

塩沢商工高校

【テ　ー　マ】
塩沢商工が創造する「南魚沼活性化プロジェクト」

【目　　標】

本校は魚沼地域の唯一の専門高校であり、商業科、機械システム科、更には機械システム科では建設土木の科目履修が可能などの特性がある。このプロジェクトをとおして、Employability(雇用されうる能力)を養い、専門高校としてキャリア教育の観点から、将来、この地域を支え活躍する人材を育成する。

【取組の概要】

○　建設業をはじめとする地元企業でのインターンシップの拡充を図る。

・地元商工会や地域企業と連携を取り、職場実習・インターンシップを拡充し、人材を育成する。

・地元建設企業と連携し、企業等から講師を招き、授業では学習することのできない内容を学習し、地域の問題に寄り添った技術者・技能者になるきっかけとし、地域を支え活躍する人材を育成する。

○　地域行事への参加や地元の産業・特産品のＰＲ活動を行う。

・地域の商業施設等で販売実習・イベント開催

・地元企業と連携し、企業等から講師を招き、地元の産業・特産物等をとりあげ、特産物の良さを再発見し、企画立案からＰＲ・販売実習と一連の活動を行い、地域の情報発信・ＰＲを行う。

・学校みどり創出モデル事業等の地域の小学校と連携し、地域活性化につなげる。

・地域文化財の研究・ＰＲ、地元の産業や生活の活性化、克雪への試みを行う。

【取組の成果】

○　建設土木業を含めた地元企業によるインターンシップの拡充を図った。就業体験を実施することで勤労観や職業観を育成するとともに、地域企業の魅力を体験し、各企業における本校への期待を感じることができた。

○　建設土木の現場見学や地元建設企業並びに地元生産者の講演をとおして、建設土木企業の作業内容やその重要性、冬季時における降雪への対応、そして雪の有効利用について理解を深めることができた。

○　地域の小学校と連携した「学校みどり創出モデル事業」や地域のイベントである「土木フェア」に参加することで、地域貢献の一端を担うことができたとともに、地域が抱える課題を再認識することができた。

○　講義等を通じて、南魚沼地域の観光資源や地元の商業活動の特徴について学習し、再発見するとともに、地元酒造や道の駅で行われている作業を見学することで、具体的な販売活動の様子を確認することができた。

1　地元企業と連携したインターンシップの取組について

本事業と「進路希望達成・学力向上対策事業」と連携させ、平成27年10月14日(水)から16日(金)の３日間、地元企業でのインターンシップを行った。

昨年度、インターンシップに参加した生徒は１・２年生の希望者36人、実施企業は16社であったのに対し、本年度は、１・２年生希望者99人、実施企業は建設土木系企業も含め43社と拡充することができた。

参加した生徒からは、「とても良い経験ができた」という感想を得ることができ、就業体験を行うことで勤労観や職業観を育成するとともに、地域企業の魅力を体験し、各企業における本校への期待をも感じさせることができた。以下に生徒の主な感想を示す。

【生徒の主な感想】

○　短い時間だったけどインターンシップに参加して、仕事の大変さや難しさを知った。僕にとってこの３日間はとても有意義な時間でした。

○　仕事をするためには、その仕事に必要な資格を取らなければ仕事ができないということがわかりました。

○　自分は建設業に少し興味があり、実際に体験してみたら大変な職業であるということがわかりました。建設業は、自分の作ったものが他の人たちに役に立っていることがわかり、やりがいを感じることができ、とても良い経験をすることができた。

2　克雪並びに雪の有効利用に関する講話

「南魚沼の生活を豊かにする」と題して、地域の大きな課題でもある除雪や雪の有効利用について、地元企業や大学教授から講話をいただいた。

㈱元店建設の貝瀬様からは、冬期間における除雪に対する地元建設土木系企業の業務内容、本県並びに南魚沼地域の除雪の体制、降雪が予測されるときの職員の勤務体制、除雪するための機械の種類(除雪ドーザーやロータリー除雪車、除雪グレーダー等)やその機能、道路や歩道の除雪や排雪の方法など、スライドの画像を見ながら具体的なお話を聞くことができた。冬期間における除雪について、地区の道路交通網をいかに確保し、市民の生活をいかに守るかというお話が聞けた。

うおぬま倉友農園㈱中澤様からは、雪の冷熱エネルギーを有効活用した雪室についてのお話をいただいた。この南魚沼地区の特産品の一つでもある「コシヒカリ」の貯蔵方法について、「10℃以下で貯蔵することでお米の酸化が止まり、この状態で長期間貯蔵することにより、旨味成分が増大するとのことである」「これは、お米だけではなく、ニンジンや野菜・お酒なども同様であり、これらを冷蔵するための冷熱エネルギーとして雪が有効利用されている」「また、石油等が資源として使用される前は、マキが資源として使用されていたため、この南魚沼の地域はこれらの資源が充実していたために、以前より住民が定着していた」というお話が聞けた。

長岡技術科学大学の上村教授からは、機械システム科２年生に「雪利用最前線」と題して、新潟工科大学の佐藤教授からは、機械システム科１年生に「雪の冷熱エネルギー利活用」と題して、それぞれ講義をいただいた。

講義内容は、「雪が冷熱エネルギーとして利用されること」「冷蔵保存のための雪の利用」「夏場に雪で冷房する家」、「雪氷熱エネルギーの活用術」等の説明を受けた。

冷熱エネルギーの利用で大切なのは、費用対効果についてであり、ビジネスとして成功させるための考え方や新エネルギーについて講義いただいた。

このように、学校の授業だけでは学習することのできない内容についてのお話しをお聞きし、地域の課題や特徴を理解するとともに、地域の魅力や克雪の可能性について理解することができた。

【生徒の主な感想】

○　雪は「スキーができる」だけかと考えていたが、冷房システムや空気清浄、除湿にも利用できることに驚いた。

○　雪は不要なものと考えていたが、講演を聞いて雪が素晴らしいエネルギーであることがわかった。新潟は、雪という武器を上手に使っていることに驚きました。

３　現場見学並びに地域の事業や地域行事への参加

(1)　「国道289号 八十里越現場見学」

機械システム科１年生による土木の現場見学会を、平成27年６月に行った。現場は、国道289号八十里越で新潟・福島県境の通行不能区間の解消を目的とした、三条市塩野淵から福島県南会津郡只見町叶津に至る土木作業現場である。

この整備により、三条市から只見町間の通行不能区間が解消されることにより地域間の交流・連携が増大するとともに、高度医療機関への救急搬送時間が短縮される効果があるとされている。

このように、トンネルを掘削する作業や作業に使用する建設機械を実際に見学することにより、その作業の実際を体感し、把握することができるとともに、建設土木といった職業の重要性について、理解を深めることができた。また、本校では機械システム科２年生において、建設土木系の科目選択することができるため、科目履修について考えるきっかけを与えることができた。

(2) 「学校みどりの創出モデル事業」

南魚沼市立塩沢小学校は、都市緑化や県産材振興に対する意識啓発及び地域コミュニティーの活性化を図ることを目的とした「学校のみどり創出モデル事業」(新潟県南魚沼地域振興局発注)を平成26年度から３か年計画で実施することとしている。

小学校の敷地内にある「みんなの広場」に築山及び植林を行うため、地域連携の一環として本校の機械システム科２年生建設土木選択者が小学校に赴き、築山に必要な丁張設置を行った。本校生徒は、小学校という実際の現場での測量を通じて、責任を持って仕事を行う大変さや苦労を体験することができたとともに、身につけた技術で社会貢献ができる喜びも感じることができた。以下に生徒の感想を示す。

【生徒の主な感想】

○　学校より広い場所で測量を行うことができて、とても良い経験となった。

○　環境が整っていない場所での測量だったので本当の現場のようで大変だった。

(3) 「土木フェア」

地域の皆さんから土木(建設分野)に対する理解と関心を深めていただくことを目的に、新潟県南魚沼地域振興局が主催する「土木フェア」(平成27年10月11日、八色の森にて開催)に参加した。

当日は、側溝や道路に設置されている視線誘導標(デリネータ)などの土木資材にトラロープで作成した輪を投げる「ドキどき土木輪投げ」を実施し、幼児や小学生を中心に多くの方々から参加していただいた。

地域貢献の一環として、この土木フェアに参加することとしたが、生徒が地域住民と触れ合うことによりコミュニケーション能力の向上が図れたとともに、建設土木系の実習に関するパネル展示も合わせて行ったため、本校における建設土木系の学習の様子をＰＲする大変良い機会にもなった。

【生徒の主な感想】

○　少しでも多くの方に土木について知ってもらえて良かった。

○　小さい子達と触れ合うことができて楽しかった。

４　地元の産業・特産品のＰＲ活動の実施

(1) 地域の観光資源等の学習と情報発信に関する講演

地元の地域の観光資源について、南魚沼地域復興支援センターの小林様より、地域の観光資源や地元の商業活動の特徴について講演いただいた。この南魚沼の地域における観光資源には、「スキー場」や「温泉」等といったものがあげられ、これらに伴う宿泊施設なども大きな資源ということができる。

また、「コシヒカリ」等の代表的な農産物やお酒、その他にも塩沢紬や牧之通り等といった特産物や観光資源があることがわかった。

この講演を通じて、南魚沼地域の観光資源や地元の商業活動について理解を一層深めることができたとともに、その特徴について再発見することができた。

これらの内容をもとに、地元の観光資源や特産物を高校生の視点から、いかにＰＲし、情報発信していくか考えるきっかけとしたい。

(2) 地域企業におけるビジネスマナー研修

南魚沼地域復興支援センターの小林様の講演より、この地域における観光資源において、宿泊施設も大きな資源という観点から、地域の観光企業(観光資源)である㈱上越観光開発様と連携し、上越グリーンプラザホテルにてフロント主任である井上様と南魚沼地域復興支援センターの小林様による「ビジネスマナー講習」を実施した。

実際に本地域の観光資源でもある宿泊施設に赴き、「接客マナー」や「ビジネスマナー」についての講義をいただいた。現場における講習は、実際の接客に対する雰囲気を肌で感じることができ、「マナー」の重要性について認識を深めることができた。これから冬本番を迎えるホテルの従業員の皆さんより、指導をいただけたことにより、生徒も緊張感をもってお話を聞いていた。

このビジネスマナーについては、接客のほかにも販売活動においても必要であるため、生徒にとっては貴重な体験でもあった。

【生徒の主な感想】

○　この「マナー講習」で多くのことを教えていただいたが、その中でも「挨拶をしっかりと行う」「話をするときは大きな声で」「靴を揃える」といったことが印象に残っている。

○　売店などに商品を陳列する際は、お客さんに「見せる」置き方をしなければならないことが分かった。館内の雰囲気も、その季節感を大切にした装飾がなされており、その視点の重要性が大切であると感じた。

(3) 地元の物産品の加工及び販売の学習

南魚沼地域の観光資源や特産品等について、講義等でその様子を把握することができたが、その地元企業における商品開発や販売方法、南魚沼の特産品に対する考え方を学習すために、地元の酒蔵である八海酒造「魚沼の里」や道の駅南魚沼「雪あかり」、うおぬま倉友農園(株)に赴き、販売戦略や具体的な販売方法などの学習を行うことができた。

この南魚沼の特産品をいかに販売するか、もともと魅力のある特産品ではあるが、その販売戦略によって大きく実績が変わる。これらのことについて、現場の生の声を聞くことで、実際に行っている地元の特産物の魅力向上に対する考えを学ぶことができた。

これらを参考にして、高校生の視点から特産物等をＰＲする手法や、商品を情報発信する手法を検討するきっかけとし、販売実習につなげる。

【生徒の主な感想】

○　雪むろをテレビで見たことがあったが、実物を間近で見てその規模の大きさに驚いた。この雪むろも南魚沼でなければできないことで、地区の大切さがわかった。

○　お酒は水が大事なことがわかり、地域ならではの地元の米や水を使っていた。地元のものを使うことで、違う味になることもわかった。

５　総合所見

今年度、実施した何れの取組おいても地元企業と連携して実施することができた。これも地元企業においては、本校に対する期待が大きく、本校の生徒の育成のためにご　尽力いただけたものと考える。本校においては、この南魚沼地域を支える人材の育成が求められていることから、より地域に密接した教育活動を行っていく必要があると考える。これらのことから、次年度に向けて次のようなことを実施していきたい。

①　次年度のインターンシップについては、２年生全員を対象に計画する。今年度同様に、「オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト」と「進路希望達成・学力向上対策事業」と連携させながら実施したい。生徒が就業体験を行うことにより、生徒の職業観や勤労観を育成させることができるとともに、本校の離職率の状況から見ても、地元企業の魅力を学校生活の中で感じさせる場面を作ることが重要であると考える。本校の離職率は、全県の工業高校や商業高校に比べて高いほうである。離職率に対する改善に向けても、就業体験は重要であると考える。また、本校の生徒を地域企業へ派遣することにより、本校の生徒の様子も各企業に理解していただける機会として捉えている。

②　この南魚沼地域の雪に対する課題や雪の有効利用について、より理解を深めさせつことが大切である。この地域における降雪に関する問題は、切っても切れないものがある。除雪作業等この雪といかにうまく付き合い、いかに有効利用していくかその手法を考え、実施することは、この地域を活性化させるための一つの手段でもある。従って、次年度においても克雪や雪の有効利用についての講話を取り入れていきたい。

③　この南魚沼地域における建設土木系の学習については、地域を挙げて協力を得ることができている。この地域の協力を得ながら、本校における建設土木系の実習内容等を構築していく必要があり、今後も地域建設業協会などの団体と連携した学習内容を構築していきたい。そのためにも、地域企業や建設業協会との関係を継続していく必要がある。

④　この南魚沼の地域には様々な観光資源があるが、その中でも「スキー場」や「温泉」といった施設、そしてこれに付随した宿泊施設、農産物では「コシヒカリ」、そして「お酒」などの食料品等があげられる。これらの資源がこの地域の大きな魅力でもあり、人々が生活していく術でもある。これらの資源の有効性や魅力を全国に発信しその製品を販売していくことが、この地域の活性化に繋がる。これらを学習する機会は、次年度においても必要であり、最終的には販売実習まで繋げたいと考える。

十 総 第 1 5 9 号
平成28年３月17日

高等学校教育課長　様

学番　60　十日町総合高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

十日町総合高校
【テーマ】　希望を胸に未来へ羽ばたけ十総生 **～地元企業での就業体験をとおして地域を支える人材を育成～**
【目　　標】 生徒一人一人が未来への夢を描き、高校卒業後の適切な進路目標を設定し、進路の実現に向けて必要となる主体的に学習する意欲と基礎学力の向上を図るとともに、それぞれの適性・能力に応じた適切な職業観を育成することを目指す。 **【取組の概要】** １　地域キャリア教育支援協議会の設置 ２　インターンシップの実施と地域の企業見学 ３　本校教職員の、県外総合高等学校視察 ４　校内における大学教授等による模擬授業の実施 ５　地域イベントへの参画 **【期待する成果】** ○　協議会の設置により、多くの方々で協議・意見交換することにより、広く十日町総合高校について、周知するとともに、生徒の活躍の場が広がる。 ○　キャリア教育全体計画の検討、雇用情勢等の情報収集、就労支援の方策の協議等を通じて連携協力体制の強化を図り、その助言や指導等を通して、授業改善や生徒の主体的な進路選択の支援等に取り組み、生徒の就職率の向上や、上級学校(大学)への進学率向上を期待する。 ○　地域との連携により、地域活性化や地域に貢献する人材を育成することが、大いに期待できる。

１　地域キャリア教育支援協議会の設置について

(1) 目的

本校において、インターンシップ実施等体験型の地域キャリア教育推進を図る上で、学校関係者はもとより、家庭、地域、産業界が一体となって積極的な取組が行えるよう、地域キャリア教育支援協議会(以下「支援協議会」という)を設置する。

また、本支援協議会では、キャリア教育全体計画の検討や雇用情勢等の情報収集、就労支援の方策等を協議し、連携協力体制の強化を図る。

(2) 支援協議会の開催

○　第１回十総地域キャリア教育支援協議会

期　　日　　平成27年７月15日(水)
会　　場　　本校　会議室
出 席 者　　キャリア教育支援協議会委員
(産業界関係者、関係行政機関関係者、ＰＴＡ関係者)
協議内容　　・事業説明について
・インターンシップ実施計画等について
・地域産業との有機的連携方策(意見交換)

○　第２回十総地域キャリア教育支援協議会

期　　日　　平成28年２月３日(水)
会　　場　　本校　会議室
出 席 者　　キャリア教育支援協議会委員､インターンシップ受入れ事業主、学校評議員
協議内容　　・インターンシップ報告会について
・インターンシップ受入れ企業等について
・次年度計画について

２　インターンシップの実施と地域の企業見学

(1) インターンシップの実施

実 施 期 間　　平成28年８月３日～21日のうち３日間
参 加 人 数　　43人(２年生40人、３年生３人　希望者)
受入れ企業　　29事業所

スーパーでのインターンシップ

農場でのインターンシップ

(2) 地域の企業見学の実施

期　　日　　平成27年12月９日～14日

参加人数　　１年次生全員160人

（１クラス５班にわかれて実施）

見学企業　　地元企業５社

(3) インターンシップ報告会

期　日　　平成28年２月３日(水)15:15～16:30

会　場　　本校体育館

参加者　　学校評議員、協議会委員、中学校教諭、事業主等27人

３　県外総合高校視察

(1) 長野市立長野高等学校、長野県中野立志館高等学校

期　日　　平成27年10月14日(水)

視察者　　教頭、進路指導部教諭２人(計３人)

(2) 富山県立小杉高等学校、富山県立上市高等学校

期　日　　平成28年１月27日(水)

視察者　　新１学年担任予定者３人

(3) 視察内容

○　総合高校としての特徴(教育課程)

○　年間行事予定(授業時数確保について工夫されている点)

○　学習評価について(観点別評価)

○　学習指導について(アクティブ・ラーニング)

○　生徒指導に関する実践全般について

４　大学教授等による模擬授業の実施

期　日　　平成28年３月15日(火)

参加企業および大学　　(株)きものブレイン、社会福祉法人苗場福祉会、
新潟工業短期大学(自動車工学科)

○　１年次生徒を対象に、職業・職種・企業の現状や各仕事について講義を受け、次年度のインターンシップに向けた、職種や企業選択や進路決定の一助とした。

○　また、企業等の現状、高校生に期待することや、企業の求める人材等について、講演を実施した。

○　さらに、大学等の模擬授業を体験するなどして、学習意欲の向上を図った。

５　地域イベントへの参画について

生徒の個性や適性を見極め、近い将来社会で有用な人材となるべく、社会的自立、職業的自立ができるよう、主体的に進路を決定する能力・態度を育成することを目的にキャリア教育を進めてきた。

生徒会執行部が「十日町まちなかプロジェクト」に参加し、高校生として地域の活性化のための方策を検討、企画した。本年は「大地の芸術祭」開催年であり、地域プロジェクトに参画し地域活性化に寄与した。

イベント発表

企画会議

柏 工 第 1 9 6 号
平成28年３月２日

高等学校教育課長　様

学番　66　柏崎工業高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

柏崎工業高校
【テーマ】　**地域と連携してキャリア教育と防災教育を推進し、地域に貢献できるエンジニアを育成する** **～ 工業高校の特色を活かしたキャリア教育と防災・減災教育の推進 ～**
【目標】 ○　高校生インターンシップ等推進地域協議会を中心に、地域の企業におけるインターンシップ、デュアルシステムを実施し、キャリア教育の充実・発展を図る。 ○　各種ボランティア活動を実施し、地域に貢献する意識を育てる。 ○　地域と連携したインターンシップ等を活用し、技術を修得する。 ○　防災・減災に繋がる製品を製作し、知的財産(実用新案、特許、意匠、商標等)の学習をとおして実用新案の申請を試みる。 ○　地域の関係機関と連携し、工業の専門知識・技術を修得し、各種資格取得を図り、進路希望の実現に繋げる(卒業までに、専門の資格を取得する)。 **【取組の概要】** ○　インターンシップ・デュアルシステムの実施 ○　インターンシップ等推進地域協議会の運営 ○　学校での企業説明会(保護者・生徒対象)の実施 ○　柏崎市の総合防災訓練への協力と参加 ○　保育園、福祉施設への訪問ボランティア ○　地域と連携し、実用新案、特許等の申請を目指す ○　地域と連携した起業家教育を推進し、模擬株式会社での生徒研究の実施 **【期待する成果】** ○　取組をとおして、地震や風水害などの自然災害から自らの生命を守るのに必要な能力や態度を身に付けさせるとともに、助け合いやボランティア精神など「共生」の心を育むことができる。 ○　地域と学校が連携した活動を実施することにより、一人一人が安全で安心なまちづくりに参画する防災マインドを醸成することができる。 ○　生徒の自主性を引き出し、キャリアアップに取り組むことで就職や進路選択へつながることが期待される。

【平成27年度の取組】

1　被災地交流

(1) 見学先　　石川県輪島市社会福祉協議会・輪島市門前町周辺

(2) 実施日　　平成27年11月20日(金)～11月21日(土)

(3) 対　象　　電気科防災エンジニアコース３年　課題研究「災害時に役立つ小水力発電製作班」４人

(4) 概　要

平成19年３月に発生した能登半島地震で甚大な被害のあった輪島市を見学しました。中越沖地震の４か月前に地震が発生している点や柏崎市と同じ沿岸地域であることから本校周辺の被災状況と比較するために見学対象としました。また、参加生徒は防災エンジニアコース３年の課題研究「災害時に役立つ小水力発電製作」班が地震被害の学習を目的に参加しました。

ア　見学内容

○　輪島市社会福祉協議会訪問

能登半島地震の被害状況や災害時の対応、現在までの復興の経過などを説明していただきました。

○　被災地見学１(輪島市門前町)

社会福祉協議会の方から被害の大きかった現場をご紹介いただき、輪島市門前町周辺を見学しました。門前町は家屋の倒壊が多く、現在でも当時の爪跡が残る箇所があるということでした。

○　被災地見学２(七尾マリンパーク)

輪島市とは半島の反対側に位置しながらも大きな被害があった七尾市の被害状況についても見学しました。

イ　まとめ

○　震災直後の混乱した状況やその後の対　応、ボランティア受け入れの苦労など当時の様子を直接経験された方からお聞きすることができ大変有意義な見学会となりました。現在は、当時の苦労や失敗をもとに、ボランティアセンター立ち上げマニュアルが作成されるなど、迅速な対応がとれるような体制整備が行われていることがわかりました。また、住民の防災意識の啓発や防災力の向上のための取組も数多くみられ、災害に対する意識が高い地域である印象を受けました。

○　意見交換の場では、「震災直後は一杯のお茶を手渡し、被災者の話しを聞き、共有することが大切である」という言葉をお聞きし、物資やお金の支援以外にも大切な支援があることに気づかされました。

○　被災当時(8年前)から人口が減少し、高齢化が進んできている状況でも、ボランティア登録や防災士、自主防災組織が増えているそうです。特に防災士育成には、中・高校生を対象に力を注いでおり、本校での取組の参考となりました。

(5) 成果と感想

○　今回の見学会では、生徒・職員ともに防災に対しての考え方や取組について深く考え、行動していくための知識を得る良い機会になりました。また、同じような経験から共感や協力が生まれ、新たな防災減災教育に結びつくのではないかと思います。

○　今後もこの交流事業を通して様々な知識を得て、その成果をいかせるよう取り組んでいきたいと思います。

２　企業見学

(1) 見学先　　(株)ツガミ　長岡工場

(2) 実施日　　平成27年12月18日(金)

(3) 対　象　　工業科１年生　40人

(4) 概　要

本校ではさまざまな進路探求活動を通して生徒が主体的かつ積極的に将来を考えるように指導しており、その一環としてこの度1年生を対象として企業見学を計画しました。

ものづくりの基盤となる工作機械の製造工程を見学し、今後の進路選択の参考になることを目的としています。

ア　見学内容

○　はじめに、会社の概要説明が会議室でありました。PPT資料での説明で、最新の業界動向も踏まえた内容であり、生徒にも分かりやすい説明でした。本校卒業生の現況も説明がありました。生徒達も先輩社員の方の実情を知ることができ、今後の進路選択の参考になったと思います。

○　ＮＣ旋盤組立の見学を行いました。１つの工作機械を１人の担当者が担当し組み立てている作業現場を見学し生徒も興味を持って見学している様子でした。また、出来上がった製品で実際に部品を試作し、その寸法検査を行う精密測定室見学も行いました。学校にはない様々な測定機器を間近で見学し、担当者に質問をしていました。

○　転造盤組立の見学を行いました。本校卒業生が一人で作業をしている様子を見学できました。生徒達も先輩社員の活躍を見学することができました。

○　研削盤組立の見学を行いました。外部の方(ツガミの取引先社員)との打合せが製造現場で行われており、会社の実際の仕事の雰囲気も感じることができました。

イ　まとめ

会社の製造現場を見学することで学校での学習が現場に活かされていることが分かり、今後の学習意欲の向上に繋がることが期待されます。また、ものづくりの実際の現場を見学することで、今回の会社見学が生徒自身の進路選択の一助になることも期待されます。

(5) 成果と感想

○　会社の製造現場を見学することで、学校で学んでいる専門科目の意義を再確認することができました。

○　工業高校ＯＢの先輩社員の活躍を間近で見ることができ、今後の進路を考える良い機会となりました。

○　生徒は、先生以外の大人と接する機会であり、その場での接し方を学ぶ良い機会になったと思います。

【研究の成果】

＜Ⅰ　動物型ロボットの製作＞

１　研究目的

○　リンク機構を用いた複雑な動きをする動物型ロボットの開発を通じて、機械加工・機械組立を学ぶ。

○　完成したロボットを近隣の幼稚園、小学校、中学校で動かし、工業高校の活動を地域に伝えていくことを目的とする。

２　研究内容（平成27年度の取組）

(1) 柏崎第一中学校の訪問　（平成27年12月12日）

(2) 柏崎二葉幼稚園の訪問　（平成28年１月12日）

(3) 長岡みのり幼稚園の訪問（平成28年２月10日）

中学校や幼稚園を訪問し、園児に私たちが製作したロボットを披露した。

中学生とロボット

園児の動物ロボット操作体験

３　まとめ

普段授業で学んでいることや製作した製品を多くの人から見てもらい、評価してもらう機会があればより製作することが意味あるものになると考えた。今回、動物型ロボットを様々な施設へ持って行き演示することを試してみた。

柏崎第一中学校を訪問した際は、笑顔と楽しそうな声の絶えない会となった。終了後のアンケートでは中学生の全てが大変面白かったと回答し、柏崎工業高校の活動について理解を示してくれた。大変楽しく有意義な会となったと確信している。また可愛いロボットや複雑な動きのロボットが人気だったので、今後はそれを超えるロボット作りたいと感じた。

生徒と園児のふれあい

２回の幼稚園訪問では自分たちの製作したロボットを見せることで園児たちに、驚きや感動を与えられて良かった。

喜んでいる園児を見てやりがいや充実感を感じることができた。最後にはロボットを通じて園児と仲良くなれて大変良かったと思う。

今後も周りから評価されるものづくりを目指し製作を行っていきたい。柏崎工業高校の技術を多くの人に知ってもらい広げていくために、これからも色々な所を訪問して行きたい。

＜Ⅱ　太陽光でのパラボラ料理　～災害避難所における調理に関する研究～＞

１ 研究目的

災害後の食料の確保と栄養に関して、最も重要なことは迅速なアセスメントを実施することである。避難所か自宅か、高齢者や乳幼児という年齢、男性か女性かといった個々の属性に応じて異なるニーズを汲み上げ、食料がどのくらい不足しているかを調査する必要がある。また、市町村ごとではなく、より小さな地区、避難所ごとに食料確保の状況を明らかにすることが重要とされている。

しかし、実際には多くの災害の事例において、それらのアセスメントを実施する組織である地方自治体が被災し、食料の確保と栄養に関しては改善まで時間を要することが多い。

これらの事実から、避難所においては食事内容に関して特別な配慮を必要とする避難者が自治体による配給が個々のニーズを満たすことが難しく、自助による対策が大きく必要となる。そこでライフラインの復旧を待たず、個々の栄養と食事のニーズを満たす調理器具として太陽光調理器具の実証研究を行った。

２ 研究内容（平成27年度の取組）

(1) ソーラークッカーによる加熱試験について

	水量〔ℓ〕	上昇した水温〔℃〕	ソーラークッカーの仕事〔ｋＪ〕	加熱所要時間〔ｓ〕	ソーラークッカーの仕事率〔W〕
1回目	1．0	76	318	2，340	136
2回目	1．0	73	305	2，760	111

【ソーラークッカーによる加熱試験の結果】

○　試験回数が少なく、天候や風の影響を考慮していないため概略の値ということになるが100〔W〕を超える加熱性能が発揮された。

ソーラークッカーによる加熱試験

加熱中のなべ

３ まとめ

(1) ソーラークッカーの性能について

少ない実験結果であるが、ソーラークッカーはカセットコンロの弱火と比較して３割から４割程度の仕事率を持つといえる。ソーラークッカーの効率は、天候、風、季節、時間帯によって大きく左右されるが、燃料が切れる可能性が無いこと、不完全燃焼による有毒ガスの発生が無いこと、火災のリスクが小さいこと、などを考慮すると、災害避難所などにおいて少量の調理のニーズを満たすことができると考えられる。

(2) ソーラークッカーの実用に向けた今後の課題

加熱試験では少量の炊飯を行い、１合の米を炊き上げることができたが、約50分の時間が必要であり、大量調理には向かないことが分かった。また、炊き上げた米は、健康な高校生では問題なく摂取することができるが、固めであり万人に向いているとは言い難いものであった。さらに、避難所における栄養状態の改善の観点から、白米のような炭水化物ではなく、タンパク質や微量栄養素を摂取しやすい状態で調理する必要がある。これら献立の選定と調理方法についての改善が今後の課題となる。

＜Ⅲ　災害時に役立つ小水力発電機の製作＞

１　研究目的

本研究は、災害時の電力確保に貢献できる製品開発を目指し、防災エンジニアコースの課題研究として平成25年度より取り組まれた。平成26年度には、地域の大学や企業の協力により実用性のある小水力発電機（３号機）が完成し、通信機器の電力確保という当初の目的が達成された。

今年度からは従来の発電機をベースに災害時の状況を想定し、設置の容易性や耐久性、機能性など製品としての熟成を目的に研究を進める。また、製作過程で生み出されたアイディアや工夫から特許・実用新案申請を目指し、知的財産学習にも力を注いだ取り組みを行う。

２　研究内容（平成27年度の取組）

(1)　１年次（平成27年度）

ア　前年度小水力発電機の試運転・水路の水量調査
イ　課題とアイディアの創出
ウ　設計・製作～完成へ
エ　全国産業教育フェアへの参加
オ　知的財産学習と実用新案申請
カ　発電機の実証実験とその成果

３　まとめ

(1)　改良型小水力発電機の名称

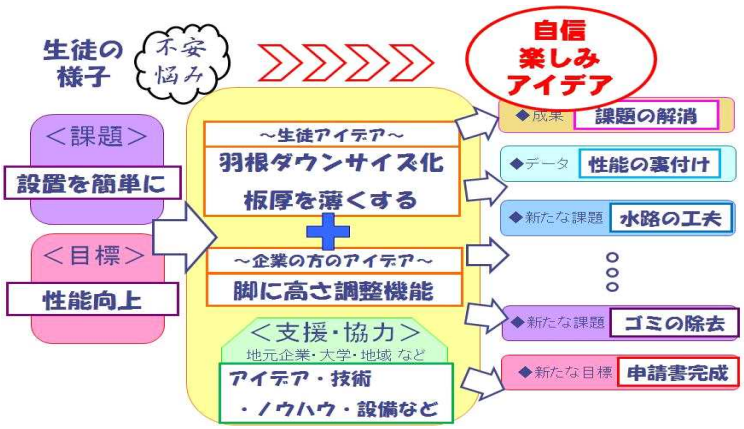
本研究で製作した改良型小水力発電機を「Ｄ Ｗｈｅｅｌ Ｔｙｐｅ Ⅳ」と命名した。
（Ｄ：防災エンジニアコースDisaster engineer course、Wheel：水車、TypeⅣ：４号機の意）

(2)　小水力発電機の課題

本研究では、３号機の課題点を改善することに重点を置き、発電機としての熟成を図ることができた。一方、小水力発電機の安定性や耐久性の検証、使用方法やゴミの除去といったメンテナンス方法、発電機の用途などの研究が行われていない。今後は、製品としての熟成を図る課題に取り組み、実用性を高める研究を進める必要があると考えている。

(3)　知的財産学習の課題

研究に取り組める時間の限界から、実用新案の申請書作成には至らなかった。特に申請対象を製品全体とするか一部の機能とするか、申請対象を検討する必要がある。類似案件の充分な検索や申請書類の完成度を高めるステップを着実に行い、申請を目指すことが大切であると考える。



知的財産学習を取り入れた新たな取り組みは、今後ものづくりを行う工業高校として非常に重要な内容であると感じた。本研究に参加した生徒は、ものづくり活動と知的財産学習を同時に進めることにより、工業製品と知的財産権のつながりが深いことを学び、知的財産学習が重要な内容であることに気がつくことができた様子である。

また、作品展示等の交流会への参加は、他校の活動の様子を知る機会となり、参加後の生徒の取り組みに変化が現れ、大変刺激になっている。この取り組みでの最大の成果は、生徒がやり遂げたという達成感を得て、それが自信につながった点であると考えている。

今年度の成果を活かし、今後も知的財産学習を取り入れた研究としていきたい。

＜Ⅳ　転倒しにくい清掃用具掛けの製作＞

１　研究目的

通常使用されている清掃用具ロッカーは、地震が発生した場合に転倒して避難経路を塞いだり、避難の妨げになったりすることが予想される。また、通常使用されている清掃用具ロッカーは転倒した場合、一人で立てることが大変である。これらの問題を改善して、震災に備えた清掃用具置場を製作することを目的とする。

写１　通常使用されているロッカー

２　研究内容（平成27年度の取組）

(1)　１年次（平成27年度）

ア　通常使用されている清掃用具ロッカー

現在、本校では清掃用具ロッカーを写１のように廊下に設置して使用しているが、廊下には写４の下部に見えるような段差があり、それ以上窓側に設置できない状況である。

イ　現状を踏まえての清掃用具ロッカーの改良（転倒防止用ベースの取付）

ロッカーの下側に転倒防止用ベースを取り付けることにした。転倒防止用ベースの製作にあたり、どのような方法で転倒を防止するか検討し、その結果、廊下の段差を利用して、この段差に転倒防止用ベースを固定することを考えた。

ウ　新しい清掃用具掛けの試作

校内にある先輩方が作られたモップ掛けやロッカーのベースを参考に、新しい清掃用具掛けを試作した。写４は先輩が作られたモップ掛けである。立ち上がりのモップ掛け部分を後側にしていて、重心を後側にすることにより、前側に転倒しにくくなるように工夫されていた。これはとても参考になった。また、廊下の段差に対してどのように設置するかについても、いろいろと工夫された用具が見つかった。写４は段差を跨ぐように作られたモップ掛けで、左下部は実際に廊下の段差の上に設置しているロッカーベース（ロッカーの台座）である。これらも廊下の段差に対する解決方法として、とても参考になった。

写２　前後の揺れに対しての検証

←写３
重心を後側にして前方に転倒しにくくしたモップ掛け

写４　製作した清掃用具掛け

４　まとめ

○　新しい清掃用具掛けについて

長所	① 据付は置くだけであり、移動も一人でできる。 ② 転倒した場合、一人で起こすことができる。 ③ 長いほうきを掛けられるため、毛先が丸まらない。	短所	① 清掃用具を掛けておくため、美観を損ねる。 ② 材料費が高く、製作に手間もかかる。

○　以上の比較から、一人で移動させることができ、転倒した場合でも一人で起こすことができることから、新しい清掃用具掛けを製作することを決めた。今後は、各部品の寸法や製作方法の見直しを行い、合理的に製作する方法を検討したいと考える。

高農 第 275 号
平成28年３月４日

高等学校教育課長　様

学番　71　高田農業高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

高田農業高校
【テーマ】　地域と連携した商品開発をとおした６次産業化の推進

【目標】

地域と連携し、地元食材を使った食品を開発し、地域の特産物を開発する。

【取組の概要】

１　地元の食材の学習と地域との連携

地域の特徴的な食材について学習し理解を深めるとともに、本校の卒業生をはじめとした地域の農家または食品関係の企業と連携し、上越地域の食材を使用した食品を開発し、商品化に向けて検討する。

２　加工・製造の専門的な知識・技術の習得

地域の食品製造の現場から講師を招いて技術指導を受け、専門的な知識を学び技術を高める。また、現場実習(インターンシップ)を行い、実地の実技指導を受け、技術・知識を身につける。

３　試作

習得した知識・技術に基づいて商品を試作し、関係者を招いてプレゼンテーションを行い試作品の評価を受ける。

４　試験的な販売

本校の「山カフェ」や地域のイベント等で試験的に販売し、アンケート調査を行い、商品としての評価を受ける。販売に関わる広報、用具の用意、原材料の生産等、他学科と連携を図る。

５　商品化

試作した商品を商品化するにあたり、パッケージ等のデザインで他校との連携が図れるか検討する。

６　ＮＰＯ法人との連携

ＮＰＯ法人「木と遊ぶ研究所」と連携し、資格取得や木工教室を運営し、山カフェと連携して、テーブル、イスを作成する。

【取組の成果】

食品の開発に携わった食品加工コースの３年生は、企業見学等によって実際の現場の緊張感や商品開発の取組、お客様に対するサービス等を学んだ。また、外部講師の指導によって、商品を作り出すために必要な姿勢や考え方・技術を、学び、商品開発につなげることができた。

はじめに

高田農業高等学校食品科学科は、新しい加工食品の製造・開発・商品化を課題研究の大きなテーマとして日々学習活動に取り組んでいる。平成20年度からの文部科学省「目指せスペシャリスト」研究指定事業「MOTTAINAIプロジェクト」での食品残渣や炭の有効化活用、平成23年度のオンリーワンスクール事業、平成24～26年度のオンリーワンスクールステップアップ事業によって起業家教育を推し進めてきた。

これまでの取組

平成20年度から３年間「高農MOTTAINAIプロジェクト」の一環として食品残渣や製造の工程でできた廃棄物を再利用することに取り組んだ。森林資源コースの間伐材活用としての炭焼きに関連して、炭入りの食品について研究・開発を行った。炭の添加による製品の変化を研究し、炭の添加により不純物の吸着や水分の保持といった効果を知ることができた。その中で生まれたのが今では定番商品になっている炭入りクッキーや炭のロールケーキである。

作った食品を多くの人に食べてもらいたいと平成22年度から地域と連携を始め、山カフェが誕生した。また商品力アップのためにはブランド化の必要性も明らかになり、それが高農の商標登録につながった。

平成23年度本町５丁目商店街振興組合の依頼を受け、10月のイベント花ロードで山カフェを開店した。その後出店を重ね、平成24年度以降は毎月一回のペースで開催している。

山カフェ開催の目的は、

① 山カフェを地域に根付かせ高田農業高校(食品科学科)を外部にアピールする。
② 食品科学科(食品加工コース)の加工食品を外部に紹介する。
③ 外部の評価を受け製品のレベルアップを図る。
④ 意見を次の改良・開発に生かす。
⑤ 接客を学び、コミュニケーション能力を高める。

などである。

この山カフェは、新商品を一般の市民に提案する大切な場となっている。

商標は当初「高農MOTTAINAI」での登録を目指したが、特許庁と何度かのやり取りを経て、最終的には「高農」で申請し、平成25年春に商標登録が認められた。それ以来様々なところで活用が進み、多くの人に認知されるようになった。

平成24年度からは上越地区の専門高校の連携事業J－matchが始まった。平成25年度からは上越総合技術高校(以下上総)の環境デザイン科と連携した活動を始め、25年度は山カフェのコースターを製作していただいた。平成26年度には山カフェで販売するケーキにあしらうケーキピックのデザインをお願いした。６つのデザイン案をプレゼンテーションし、その評価によって２種類のケーキピックを採用し、現在も使用している。

今年度の取組

１　現場見学

期　　日　平成27年８月17日(月)

対象生徒　食品加工コース３年生20人

(1) 石窯パン工房サフラン(新潟市女池)

新潟市の人気店である同店は来客が途切れることなくあり、常に駐車場は満車、８レーンあるレジには列ができている様子に生徒達は驚いた様子だった。多くの従業員がシステマチックに動いている様子も生徒の刺激になったようである。見学後店長から平日は１日1,000個、休日は2,000個のパンを製造するとの説明に生徒は驚いた様子であった。

(2) 新潟県食品研究センター(加茂市)

加茂市の新潟県食品研究センターを訪れ、センターの活動についてスライドを使って説明を受けた。食品研究センターが食品メーカーなどと連携し新商品開発に取り組んでいることの説明を受けた。また、このセンターが開発した微粉の米粉について小麦粉の代替としての普及はある程度進んだが、今後の課題は「米粉でなければできないもの」の開発であるとの説明を受けた。その後施設内を見学した。

２　現場の講師を招いての指導

(1) 御菓子処ほそ山　細山　剛氏

○　第１回８月５日(水)　餡練り

和菓子の材料の中心となる餡についての説明を受け、さらに餡練り(あんこ作り)を実習した。

○　第２回８月19日(水)　羊羹とどら焼き餡の製造

小豆を原料に小倉羊羹を、また白生餡を原料に白羊羹を製造した。また、次回使用するどら焼き用の餡子を準備した。

○　第３回８月26日(水)　どら焼きの製造

どら焼きの生地の製造法の説明を受け、生地の製造を行う。材料の配合、膨張剤の違いによる生地の変化を指導される。前回準備したどら焼き用の餡子を使用し、どら焼きを作成した。課題研究でどら焼きをテーマに取り組んでいた生徒はその違いに驚いていたようである。

○　第４回10月16日(水)　リンゴ餡(フルーツ餡)の製造

本校の実習で製造したリンゴジャムを和菓子に活かす方法として餡子にする方法を学んだ。

○　第５回10月28日(水)　大福の製造

和菓子の素材として欠かせない餅の扱いを学ぶために大福の製造実習を行った。求肥粉を利用しての製造を行った。

○　第６回11月24日(火)　焼き饅頭の製造

４回目で製造したリンゴ餡を素材に焼き饅頭の製造を行った。一般的な饅頭は蒸して製造するが、焼き饅頭はカステラ饅頭とも呼ばれ、オーブンで焼成するものである。

○　第７回12月９日(水)

今までの講座のまとめを座学にて行った。

(2) パティスリー　オラランティ　澤田　俊太郎氏

○　第１回７月15日(水)　講話

校長挨拶、講師紹介の後、生徒自己紹介をし、澤田氏から自己紹介や経歴などを含めお話いただいた。フランスでの修行中の体験談など生徒は大変興味深く講話を聞いていた。

○　第２回７月29日(水)　生徒の製品の試食・評価

各自(各グループ)が課題研究で取り組んだり、山カフェで販売しているケーキなどをあらかじめ準備し、澤田氏に試食していただき、評価・指導を受ける。それぞれアドバイスを頂き今後の参考となったようである。澤田氏から「どういうものを作りたいのか、どんな人に食べてもらいたいのか」という考えをもつことが大事と指導を受ける。

○　第３回９月２日(水)　ガトーショコラの製造

山カフェで提供している、チョコレートケーキのガトーショコラの食感の改善を目指し、技術指導を受ける。チョコレートの種類や量によって味・食感が変わること、油分と水分のバランスそして乳化が食感に及ぼす影響が大きいこと、メレンゲの立て方、扱い方、混ぜ方による食感がどうなるのかを学んだ。

○　第４回９月15日(火)　スフレチーズケーキの製造

山カフェのメニューであるスフレチーズケーキは軽い食感が出せずに苦労していた。そのためふわふわ食感のスフレチーズケーキの製造指導を受けた。同じ材料でも泡立て方、混ぜ方によって出来上がるものが大きく違うことに生徒は驚いたようである。材料の性質を理解することが大切であると気づく生徒もいた。

○　第５回目９月30日(水)　ロールケーキの製造

クリスマスケーキ(ブッシュ・ド・ノエル)のベースとなるロールケーキ製造を学ぶ。ロールケーキは山カフェの定番メニューであるが、生地の作り方、型への流し方、焼いた後の処理、巻き方、巻いた後の処理等、今までと違う作り方に新しい発見があった。見栄えが良く、美味しく、良い食感のケーキを作るにはいくつものコツがあることを学んだようである。

○　第６回目11月11日(水)　クリスマスケーキ(ブッシュ・ド・ノエル)の試作

12月に食品加工コースで製造販売するブッシュ・ド・ノエルの試作を行う。６グループに分かれ試作品を作り、澤田氏を含めて相互評価を行った。その中で高評価のものをベースとして作りこんでいくこととする。相互評価の結果、抹茶ベースとイチゴベースの２種類を選び今後の試作を重ねていく

○　第７回目11月18日(水)　クリスマスケーキ(ブッシュ・ド・ノエル)

11月11日に選ばれた２種類をさらに改良し試作品を作成した。抹茶のケーキは抹茶の配合量を増やし、イチゴのケーキはより色をきれいに出すことを目指して改良した。結果２種類とも改良の余地があり、継続的に澤田氏と連絡を取りながら製品化を目指す。以後数回の試作品のやり取りを経て抹茶のブッシュ・ド・ノエルとイチゴのブッシュ・ド・ノエルの完成を目指した。

３　クリスマスケーキ開発・製造・販売について

抹茶とイチゴの２種類のケーキを製造するスポンジの水分量と食感と全体の味のバランスを整えることに苦労した。

抹茶のスポンジケーキは抹茶を加えることで水分がかなり抹茶に吸収され水分の少ない硬いスポンジケーキになる。水分量をどう増やすかに苦労したが、卵白の量を増やすことによって改善した。

イチゴのブッシュ・ド・ノエルではラズベリー味のスポンジケーキはラズベリーピューレを加えることによる水分の増加によって生地の食感が悪くなるため、どうやって食感を改善するかに苦慮したが、最終的には乾燥卵白を添加することで問題を解決した。

また、６号のホールケーキの味のバランスを見直すとともに、課題であった大量製造の効率化にも取り組んだ。その結果、ビュッシュ・テ・ベール・ア・ラ･ネージュ(抹茶のブッシュ・ド・ノエル)は90個、ビュッシュ・ロゼ･ア･ラ･フレーズ(イチゴのブッシュ・ド・ノエル)は62個、ホールケーキは328個販売することができた(本校食品科学科のケーキとして過去最高の売上)。購入者のアンケート結果では、多くの高い評価をいただいた。

４　ＮＰＯ法人との連携事業

ＮＰＯ法人「木と遊ぶ研究所」主催の木工教室を５月、７月、９月、１１月の年４回行った。

地域住民を対象とした教室で、各回の参加者は20人前後であった。生徒が講師となり参加者とコミュニケーションをとりながら指導するため、大変好評であった。

「山カフェ」で使用する
テーブルとイスを製作

5　総合所見

(1) アンケート調査

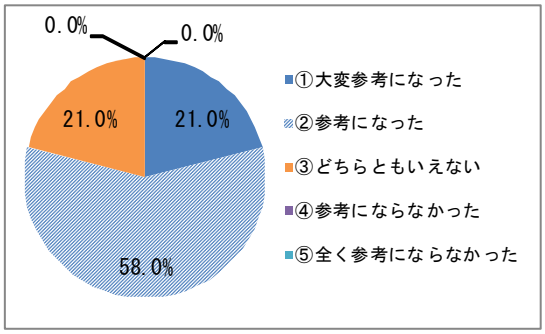
○　対　　象　３年生食品加工コース20人(回答19)

○　質問項目

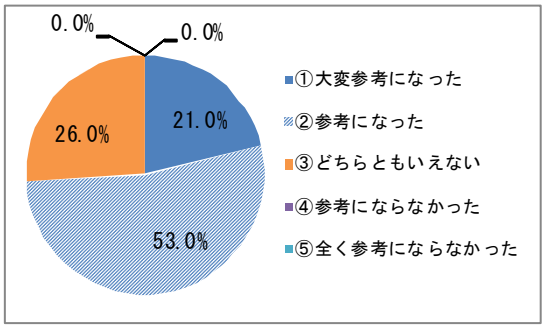
1　見学「石窯パン工房サフラン」について、新商品開発のために参考になりましたか？
2　見学「新潟県食品研究センター」について、新商品開発のために参考になりましたか？
3　「細山剛氏の講座」について、新商品開発のための参考になりましたか？
4　「澤田俊太郎氏の講座」について、新商品開発のための参考になりましたか？
5　ブッシュ・ド・ノエルの開発・販売を通じて、新商品開発や製品の改良の力は身に着きましたか？
6　この取組全体を通じて商品開発や改良に対して考え方が変わりました？
7　この取組全体を通じて学んだことや感想を書いてください。

(2) 調査結果

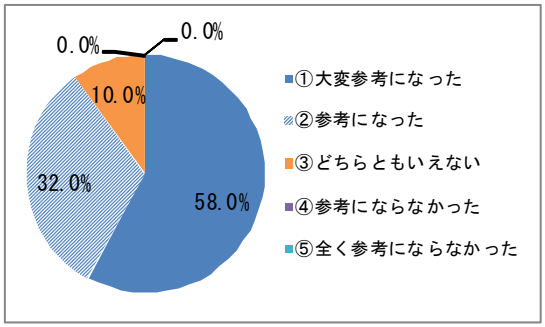
1　石釜パン工房サフランの現場見学は、新商品開発の参考になりましたか



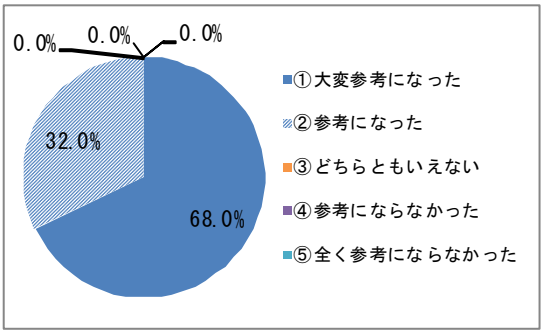
2　新潟県食品研究センターの現場見学は、新商品開発の参考になりましたか



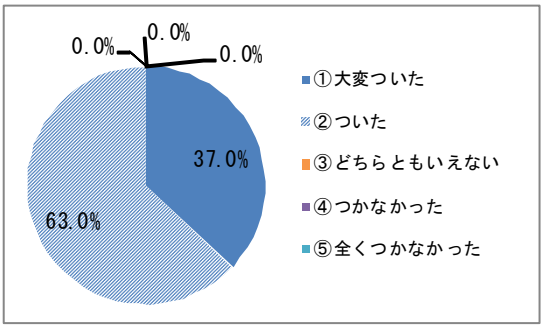
3　細山剛氏の講座について



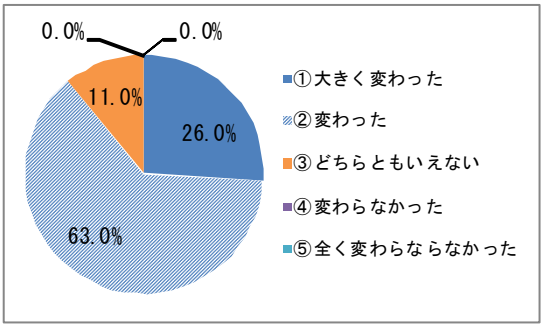
4　澤田俊太郎氏の講座について



5　ブッシュ・ド・ノエルの開発・販売をとおして商品を開発・改良する力はついたか



6　本事業全体をとおして商品の開発・改良に対して考えが変わったか



(3) 調査結果より

○　このアンケートの結果から。この事業に取り組んだ生徒は現場見学、現場講師の指導について概ね参考になったと回答しており、特に澤田氏の講座については全員が参考になったと回答している。これは生徒の多くが洋菓子をテーマに課題研究に取り組んでいること、澤田氏がブッシュ・ド・ノエルの開発・改良に大きく関わったことが理由であると思われる。

○　５の「ブッシュ・ド・ノエルの開発販売を通じて新商品開発の力や製品を改良する力はつきましたか？」の質問で全員が力がついたと回答していることから、ブッシュ・ド・ノエルの取り組みは生徒に大きなインパクトのあるものとなったようである。実際に開発したものを製造販売することにより得られる経験は大きいようである。購入者のアンケートを見ても評価は高く、そのことが生徒の自信となっていると考えられる。

○　生徒の感想としては「商品を作ることの大変さや、お客さんを飽きさせないことの大変さを学びました。製造技術が上がりました。」「今まで悩んでいたところを解決して見せてくれたり、一つ一つの工程にはどのような意味があるのかなど、とても考えさせられる実習となりました。」「ただレシピを見て作るだけではだめだと思った。材料や作り方にこだわると商品が変わることがわかった。」といった意見があり多くの生徒が「気づき」「発見」を得ることができたようである。

○　次年度は今年度指導をいただいた２人の講師に継続して指導いただき、地元食材を使った商品開発を継続していく。そして年度に１つ以上の商品を開発したいと考えている。

○　また、森林資源コース、草花園芸コース等他部門と連携し「山カフェ」を開店し高農ブランドを広めていく予定である。同時に、農業高校で身につけた学習の成果を地域住民に伝える教室等を継続して開催することを計画している。

上総技 第 402 号
平成28年３月１日

高等学校教育課長　様

学番 72　上越総合技術高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

上越総合技術高校

【テーマ】　上越地域から活力を！
～地域が生徒を育て生徒が地域を支える～

【目標】

社会生活を送る上で求められるものは、社会性、人間性、コミュニケーション能力などの人間力であると考える。そのような観点からキャリア教育のあり方を考え、技術と人間力を育んでいくことを目標とする。(専門高校と地域の活性化)

【取組の概要】

1　本校は、上越地域に唯一設置される工業科専門高校として、この地域に貢献できる人材の育成に大きな期待が寄せられている。そのため、地域の企業等と連携したキャリア教育(インターンシップ・デュアルシステム)を推進しており、生徒の勤労観、職業観の育成に努めてきた。今後も一人でも多くの生徒がインターンシップやデュアルシステムに参加させることができるために、地元企業及び協会等と連携(インターンシップ・デュアルシステムの推進会議の設置)し、協力企業の掘り起こしと企業にとってのメリットの創出を図る。

2　平成26年度まで実施した「Ｊ-match」の取組を継承し、４校(高田商業、高田農業、海洋、上越総合技術)の文化祭や地域主催のイベント等に参加し、農・工・商・海の連携を維持し、お互いの学科理解と相互発展の可能性を模索する。

3　「課題研究」及び「実習」の時間を活用し、地元企業の熟練技術者の指導を受けることにより技術技能の伝承を図る。その技術を生徒が講師を務める「ものづくり塾」を開催することにより、地域や小中学生にものづくりの指導を実施する。また、機械工学科を中心とした海洋高校との連携による施設設備の有効活用により他産業への理解を深める。

4　上越市長による講演会を実施し、上越市の未来を全校生徒に伝える。合併10周年を迎え、北陸新幹線の開業、あかねの就航等交通面のアクセスの改善が行われる中、人口減少に伴う上越市の課題を見つめ、上越市の未来について考えるとともに郷土愛を育む。

【取組の成果】

Ⅰ　機械工学科・メカトロニクス科

１　インターンシップ・デュアルシステムの取組について

(1) インターンシップ・デュアルシステムの実施

11の事業所に受入れをしていただき、機械工学系２年生の就職希望者のうち、インターンシップに機械技術コース８人およびメカトロニクスコース12人の計20人、デュアルシステムに各コースからそれぞれ１人ずつの計２人の生徒が参加した。

(2) 報告会の開催(機械工学科・メカトロニクス科)

12月21日(月)、本校視聴覚室において、機械工学系２年生80人を対象として、各事業所別にインターンシップ11社、デュアルシステム２社についての発表を行った。その際、受け入れしていただいた事業所より７人、ならびに本校職員10人が参加した。

(3) 合同報告会の開催

大和電建株式会社富岡工場において、８月５日～20日に10日間の実習を行ったメカトロニクスコースの生徒が発表を行った。溶接ロボットの操作などの作業体験や、挨拶などのコミュニケーションの大切さを学んだことについて発表した。

デュアルシステム風景

デュアルシステム風景

２　ものづくり塾について(他校の文化祭等に参加)

(1) 目的や実際の取組

工業教育フェスタ(柏崎工業高校)をはじめ、高田商業高校、海洋高校、高田農業高校の文化祭と計４回にわたりものづくり塾を実施した。

内容は本科のレーザ加工機により作成したペーパークラフト素材を使用し、クラフト製作の指導を生徒が行うものであった。

(2) 取組の成果

子供達を中心に熱心に取り組んでもらい、広い年齢層から大勢の参加があった。

ものづくり塾

３　地元企業等の熟練指導者による指導の取組について

(1) 県立上越テクノスクールとの連携

機械設計部溶接班の１年生２人による12月の新潟県高校生溶接コンクールへの出場に対して、上越テクノスクール和須津和一九様、清水亮様より来校していただき、アーク溶接の実技指導を受けた。

(2) 専門学校トヨタ東京自動車大学校による出張授業

機械工学系２年生の80人を対象に、トヨタ東京自動車大学校教育部の藤川龍彦様より自動車業界の現在、ＨＶ・ＰＨＶ技術及び燃料電池車等についての授業を受けた。

アーク溶接の実技指導

４　海洋高校との連携

機械工学科３年生39人および機械工学科職員４人が、海洋高校の実習船「海洋丸」の母港で実習を行った。機関の運転の様子や船内の見学を行い、燃料噴射弁の調整などの作業を体験した。

海洋丸

５　総合所見

○　インターンシップ・デュアルシステムは、就職希望者全員が参加できるように拡大させたい。
○　ものづくり塾は概ね成功したと考えられるが、次年度に向け、テーマの拡充を図る必要がある。
○　新潟県高校生溶接コンクールでは、１年生で初参加の２人が４位および５位と健闘した。
○　海洋丸での実習は、次年度機械工学系２クラスで実施したい。

Ⅱ　電子情報科・電気工学科

１　インターンシップ・デュアルシステムの取組について

(1) デュアルシステムの実施

①　大和電建(株)　電気工学科２学年１人

(期間　８月５日～11日、17日～21日　計10日間)

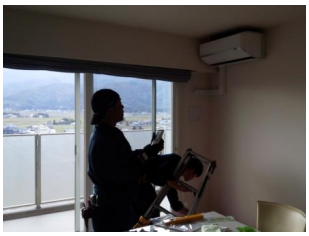
作業内容は、屋上室外機配線、ＬＡＮケーブル取付、コンセント・照明検査などであり、これらの作業をとおして自分の進路について考える良い機会になった。授業では体験できない作業や、現場でのマナーなど、社会で役立つ事を多く学ぶことができた。

屋上室外機配線

②　カザマデンキ　電気工学科２学年１人

(期間　７月30日～８月３日、５日～９日　計10日間)

作業内容は、エアコンの取付工事、光ケーブル接続工事、給湯器の取付工事などであった。社員の人がお客様に分かりやすく商品の説明をしたり、他の家電の相談にも答えたりしている姿を見て、これが地域の役立つ仕事であると実感することができた。



エアコンの取付

③　(株)オアシス　電子情報科２学年１人

(期間　７月27日～31日、８月10日～15日　計10日間)

作業内容はフリーペーパーの配布、名刺の作成に係る業務、イベントの手伝いなどを行った。制作現場で１つのものを作る姿に、大変感銘を受け、妥協せずに、物を作り出す志の大切さを学んだ。

イベントの手伝い

(2) 合同報告会の開催

デュアルシステムに参加した３人が報告した。電気系の生徒は、自分達の取り組んでいる学習や資格取得が、実際の仕事とつながっていることを感じ取ることができ、さらに「上位の資格を取得したい。チャレンジしたい。」という気持ちが、多くの生徒に出てきた。

２　ものづくり塾について(他校の文化祭等に参加)

(1) 目的や実際の取組

①　本校文化祭にて３分タイマー製作

小中学生に、はんだ、電子基板を用いて電気系のものづくりを体験してもらう。電気設計部、電子部の生徒を中心に当日の材料を準備し、当日のお客さんへの指導も行ってもらい、コミュニケーション能力の向上と指導することの難しさを学んでもらう。３分タイマー製作には、女子小学生４人を含む合計20人の参加があった。

②　他校文化祭、工業教育フェスタにて３分タイマー製作

他校、他学科の生徒に本校のものづくりを体験してもらう。３分タイマー製作には、４歳の男子を含む合計62人の参加があった。

(2) 取組の成果

上記いずれのイベントでも、子どもから高齢の方まで真剣な表情で取り組み、完成したタイマーを笑顔で持ち帰る様子が多く見られた。今回は、はんだづけと組立のみであったが、今後は基板の製作から体験してもらえるように改善していきたい。

３　地元企業等の熟練指導者による指導の取り組みについて

(1) カザマデンキとの連携

電気工事技能講習会を例年実施している「ものづくり技能・技術伝承講習会」の事業として、７月10日、17日に合計４時間実施した。

参加生徒は電気工事士技能試験受験者30人。今まで、手間取っていた作業もアドバイスをいただくことで、時間が短縮し完成度が向上した(受講者30人のうち22人が合格)。

(2) 電気工事工業組合との連携

①　電気工事技能講習会

７月18日(土)、新潟県電気工事工業組合上越支部様から、第二種電気工事技能講習会を開催し、技能試験公開問題の13問の内５問を指導していただいた。参加した７人の生徒達は、一様に自信がついたようで、「参加してとてもためになった」と話していた。

11月21日(土)、第一種・第二種電気工事技能講習会を開催した。第一種の試験は講習に参加した６人全員、第二種の試験は講習に参加した５人中４人が合格した。

②　電気工事業界人材確保・育成事業

３月16日(水)、電気工事関連の講義と電気工事作業の実演を合計４時間実施した。参加生徒は、次年度電気エネルギーコース選択者40人であった。

Ⅲ　建築・デザイン科　建築システムコース

１　インターンシップ・デュアルシステムの取組について

(1) インターンシップ・デュアルシステムの実施

①　実施内容

５年前から、建築の２年生全員に対しインターンシップまたは、デュアルシステムを選択させ実施している。今年度は、建築施工管理、大工、建築設計、建築設備分野において、インターンシップを15社で30人、デュアルシステムを２社で４人が実施した。

②　実施後の生徒アンケートより

○　具体的な仕事の内容が理解できた。
○　働くとはどういうことか具体的にイメージできた。
○　自分の興味があること、やりたいことを見つけられた。
○　働くことの厳しさや楽しさを知ることができた。
○　実際に行ってみて解ることが多くあり、とても充実していた。
○　学校の授業ではできない体験ができた。
○　時間や期限を守ることの大切さ、挨拶や礼儀の大切さを肌で感じた。

デュアルシステム風景

(2) 報告会の開催

①　受入企業や１年生を交えた報告会

受入企業８社、学校評議員１人、１学年39人を前に２年生34人が各自の体験を報告した。これは、一人の体験を他の生徒も共有できるメリットがあり、個々の生徒のプレゼン能力・キャリアプランニング能力を高める効果があった。また、地域と学校の連携強化ができたと考える。

報告会

②　キャリア教育フォーラムへの参加(柏崎市)

建築システムコースにおけるインターンシップやデュアルシステムの取組について、柏崎市内の中学生を中心とした300人に対して上越総合技術高校を代表し、体験報告を行った。

キャリア教育フォーラム

２　ものづくり塾について(他校の文化祭等に参加)

(1) 目的や実際の取り組み

工業フェスタや各校文化祭などにおいて、生徒の指導で行う木製サイコロカレンダーの作成を来客者に体験してもらった。

(2) 取組の成果

地域の方との交流を深めることで、コミュニケーション能力を育み、よりものづくりのあり方について考えることができた。

ものづくり塾

３　地元企業等の熟練指導者による指導の取組について

(1) ３級建築大工技能講習

新潟県職業能力開発協会様との連携によりフジモト建築様を講師に迎え、２年生22人に対して３級建築大工技能士受験に向けた指導をいただいた。試験結果はまだ発表されていないが、多くの生徒は手応えを感じていたようである。

３級建築大工技能講習

４　総合所見

インターンシップでは、安全面で作業内容が限られるが、実施時期等の調整を企業と綿密に打合わせを行う。来年度は、今年度以上に内容を充実させ、プレゼン能力・キャリアプラニング能力を向上させたい。

Ⅳ　建築・デザイン科　環境デザインコース

１　インターンシップ・デュアルシステムの取組について

(1) インターンシップ・デュアルシステムの実施

環境デザインコース２年生17人のうち、２人が(株)桐朋のデュアルシステムに参加した。

(2) 合同報告会の開催

デュアルシステムに参加した、２年生の２人が、(株)桐朋での体験を発表した。10日間の体験を通して、第三者の見方でデザイン提案を行うこと、コミュニケーションの大切さなどを学んだ。

デュアルシステム風景

２　ものづくり塾について(他校の文化祭に参加)

(1) 目的や実際の取組

①　ものづくり塾で使用するのぼり旗のデザイン

３年の実習で取り組み、デザインを12案提出した。その中より１案が採用され、業者に５本の製作を依頼し、ものづくり塾のブースで使用された。

②　３分タイマーのパッケージの製作

電子情報科・電気工学科の依頼により３分タイマーの紙によるパッケージを50個製作した。

③　試作製品の販売

本校文化祭において試作品(陶芸皿)を販売し、購入者や来店者の製品に対する評価を聞くことにより市場調査とし、次年度の取組への参考とした。

のぼり旗

試作製品販売

３　地元企業等の熟練指導者による指導の取組について

○　長岡造形大学による出張授業

長岡造形大学プロダクトデザイン学科　鈴木均治教授から、「味を色で表現しよう」というテーマで、色彩についての基本演習授業を受けた。生徒はこの授業で、色彩と感情の関係について、深く学習することができた。

校外発表展示

４　総合所見

○　インターンシップは、次年度に向けて就職希望者全員が参加できるように計画したい。

○　ものづくり塾は試作・検討段階だったので、次年度に向けてテーマを設定し、受講者が興味の持てるものを実践していきたい。

Ⅴ　環境土木科

1　インターンシップ・デュアルシステムの取組について

(1) インターンシップ・デュアルシステムの実施

建設関連・測量調査・上越市役所・環境科学センター等の11の事業所において、希望者21人（インターンシップ19人、デュアルシステム２人）が参加した。

(2) 合同報告会の開催

大和土建工業(株)において、インターンシップを実施した３人が体験発表を行った。「日頃の授業や今後の人生に生かしていきたい。」等の感想を全校の生徒に伝えた。

合同報告会

(3) インターンシップ・デュアルシステムに関する意見や調査

① 来賓のアンケート内容

・就業体験学習、課題研究、専門的技術講習、学校教育全般への協力を継続する。

・建設業界に次世代の若い担い手が来てほしい。これからも頑張ってほしい。

② インターンシップ・デュアルシステム希望状況(環境土木科１年生25人)

希望する 14人、希望しない ９人、未回答 ２人

2　ものづくり塾について(他校の文化祭に参加)

環境土木科では、「地域とくらし」、「地球環境」、「自然科学」、「土木構造物」、「測量調査」をものづくり塾の柱とし、生徒に「コンクリートメダルの製作」、「橋梁模型の製作」、「GNSS人工衛星を利用した宝探し」、「水耕栽培キットの製作」のテーマを実施させた。

それぞれ勉強したことを来場者に丁寧に説明し、暖かなコミュニケーションを交えつつ製作することができた。水耕栽培キットは、しばらく楽しむことができ、現在も好評いただいている。

ものづくり塾

3　地元企業等の熟練指導者による指導の取組について

(1) ＵＡＶに関する技術講習

(株)エアフォートサービス様より、ＵＡＶ技術の指導を受け、技術開発やＵＡＶのさらなる可能性と展望について学ぶことができた。

(2) 地域をつなぐ上越魚沼道路の現場見学

(株)大島組様より、軟弱地盤の改良工事を紹介する模型製作の技術指導をしていただき、「軟弱地盤の不安定な状態」と「支持力のある安定状態」を身近な材料で再現し、建設技術の重要性を理解できる模型を製作することができた。

地元企業による指導

(3) 雪崩・地すべりに関する講習および見学(１年生環境土木科25人)

土木研究所雪崩地すべり研究センターにある研究施設と災害現場を見学した。私たちの身の回りで発生しうる災害とくらしとの関わり、災害の軽減や未然防止の技術開発、土木技術の適用について学ぶことができた。

雪崩地滑り研究センター

4　総合所見

ものづくり塾では、生徒が土木の思いを込めて様々な内容の作業パッケージ化を試行錯誤し作り上げ、実施した場所で好評を得ることができた。小学生を対象に考慮したが、今後は中学生や一般向けにも幅広く適用できるように種類や技術的な高度化を進めていきたい。

Ⅵ　本事業における講演会(平成27年11月13日(金))

講　師　　上越市長　村山秀幸　様

テーマ　　上越市の「未来」について(上越市の自然と歴史、地方創世と市政の方向など)

海 高　第 749 号
平成28年３月14日

高等学校教育課長　様

学番 80　海洋高等学校長

オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトについて、下記のとおり報告します。

記

海洋高校
【テーマ】　地元漁業の維持・発展のための活動をとおした水産専門人材の育成

【目標】

地域との連携を一層図り、地方の課題の解決を図るとともに、地域の活性化に貢献できる将来の水産専門人材を育成するため、以下の能力・態度の育成について取組む。

１　課題解決能力の育成
国際的な視野を持ち、地域が直面する課題に対して、幅広い視点から解決しようとする能力と態度を育成する。

２　マネジメント能力の向上
専門家と連携した実践を通じて、水産業に対応できるマネジメント能力を育成する。

３　自己有用感の向上
実践をとおして、生徒に社会への参画意識を醸成させるとともに、その経験から自己有用感を向上させる。

【期待する成果】

１　特産水産物の復活や、新たな特産物の生産により地元経済に貢献できる。

２　生徒が地元の産業に目を向ける端緒となり、勤労観・職業感の醸成につながる。

３　特産物の流通や製造量が増加することにより、生徒の就業機会が拡大する。

【取組の概要】

１　海洋生産コース(海洋技術コース)
「バイ貝及び甘エビの漁獲方法の習得」

２　食品科学科(食品科学コース)
「干物等の製造におけるＨＡＣＣＰ取得及びハラルの研究」

３　栽培技術コース(資源育成コース)
「チョウザメの養殖」

４　マリン技術コース(海洋創造コース)
「潜水技術を用いたモズクの漁獲方法の研究」

1　各コースの具体的な取組

(1) 海洋生産コース(海洋技術コース)

・地元漁船によるバイ篭漁業及び甘エビの操業体験及び実習船「くびき」からの見学
・バイ篭漁具研究者からの講演
・バイ篭の漁具製作

バイ篭漁での収穫

(2) 食品科学科(食品科学コース)

・本校開発の魚醤「最後の一滴」のハラール認証に向けた学習会の開催
・スモークサーモン及びヒラメくん製のＨＡＣＣＰシステムの検証活動の実施

ハラール認証のための商品検討

(3) 栽培技術コース(資源育成コース)

・６月中旬からチョウザメ500尾(平均全長10ｃｍ)の養殖を開始して３月まで給餌等飼育管理を行い、成長データを取得した。

チョウザメ養殖池でのエサやり

(4) マリン技術コース(海洋創造コース)

・潜水技術を用いて糸魚川市能生地区でのモズクの繁茂状況の調査および試験採取を行なった。

・試験採取したモズクと現在広く流通しているオキナワモズクとの食べ比べ(官能試験)を行なった。

モズクの食べ比べの(官能試験)の様子

２　取組の成果

(1) 海洋生産コース(海洋技術コース)
「バイ貝及び甘エビの漁獲方法の習得」
・バイ篭漁業の操業の様子や、漁具の構成の概略を学ぶことができた。
・バイ篭漁業の研究者から、バイ篭漁場に関して説明を受けることができた。
・地元漁業者から、バイ篭漁具の製作に必要となる基礎的な技術について指導していただいた。

(2) 食品科学科(食品科学コース)
「干物等の製造におけるＨＡＣＣＰ取得及びハラルの研究」
・専門家を招いたハラール認証に向けた学習会を３回実施し、来年度以降の認証に向けた課題と対策を検討することができた。
・ＨＡＣＣＰシステムの検証のため各種分析を行い、これらのデータからＨＡＣＣＰ認定の更新をすることができた。

(3) 栽培技術コース(資源育成コース)
「チョウザメの養殖」
・水温が11℃から14℃で、成長速度の速いグループ(平均全長35.9㎝)と遅いグループ(平均全長22.3㎝)が出現することがわかった。
・上記の問題を解決するために、今後、給餌方法などを改善する必要があることがわかった。

(4) マリン技術コース(海洋創造コース)
「潜水技術を用いたモズクの漁獲方法の研究」
・繁茂状況の調査では約4000㎡にモズクが繁茂していることを確認でき、試験採取では12kgのモズクを採取できた。
・官能試験で試験採取したモズクがオキナワモズクと比較して良い評価となる傾向にあることがわかった。

３　総合所見

当事業の実施により、本校生徒が地元の産業についての認識を深めるとともに、水産業の面白さや大変さを実感できた。具体的な事項は以下のとおりである。

・バイ篭やモズクの調査により、特産水産物の復活や、新たな特産物の生産への可能性を広げるとともに、地元の産業に目を向ける端緒となった。
・地元の漁業者から指導を受けることによって、専門的な職業人としての自覚に目覚めた。
・チョウザメの養殖をとおして、新たな特産物の創出に貢献しようとする意欲が生まれた。
・本校開発の魚醤「最後の一滴」のハラール認証に向けた学習会を開催したことにより、日本はもとより外国へ流通させられる可能性を感じ取り、経営的な感覚の醸成がなされた。

今年度は各分野の活動は実験的、あるいは予備調査的な段階であった。来年度は、今年度の成果をもとに、より企業的にコストを意識した活動を行いたい。また、地域との連携を深め、地元経済への貢献をするために必要なことは何かを明確にして、海洋高校が中心となる実践を行いたい。